



優良住宅部品性能試験方法書

Methods of Testing Performance of Quality Housing Components

テレビ共同受信機器(同軸伝送)

Master Antenna TV Coaxial System Components

BLT TV:2021

2021年4月1日公表・施行

一般財団法人

ニセーリビニセー

I 性能試験項目

優良住宅部品認定基準において、試験により性能等を確認する項目並びに試験方法等は、下表によるものとする。

(1) 地上放送用アンテナの測定項目及び試験項目

性能試験項目名	性能試験方法	備考	頁
1. 動作利得	BLT TV-01		1
2. 半値幅・前後比	BLT TV-02		2
3. 電圧定在波比 (V SWR)	BLT TV-03		3
4. 荷重試験	BLT TV-04	第三者性を有する機関等による試験の実施	4

(2) 衛星放送用アンテナの測定項目及び試験項目

性能試験項目名	性能試験方法	備考	頁
5. アンテナ利得	BLT TV-05		6
6. 指向性	BLT TV-06		7
7. 交差偏波特性	BLT TV-07		8
8. 荷重試験	BLT TV-08	第三者性を有する機関等による試験の実施	9
9. 利得周波数特性	BLT TV-09		10
10. 雑音指数	BLT TV-10		11
11. 雑音指数 (別法)	BLT TV-11		12
12. 相互変調妨害比 (右左旋共用)	BLT TV-12		13
13. イメージ妨害抑圧比	BLT TV-13		14
14. 局部発振周波数及びその漂動	BLT TV-14		15
15. 入力端子における局部発振信号の漏洩	BLT TV-15		16
16. 出力電圧定在波比 (出力V SWR)	BLT TV-16		17
17. 局発位相雑音	BLT TV-17		18
19. G/T	BLT TV-19		19

(3) 受信機器の測定項目及び試験項目

性能試験項目名	性能試験方法	備考	頁
20. 耐衝撃波試験	BLT TV-20		22
21. 通電試験	BLT TV-21		23
22. 出力電圧試験	BLT TV-22		23
23. 雑音指数	BLT TV-23		24
24. 利得・利得調整範囲・帯域内利得偏差・チルト特性	BLT TV-24		25
25. 周波数帯域・帯域内周波数特性	BLT TV-25		27
26. 利得安定度	BLT TV-26		28
27. 電圧定在波比 (VSWR) [ブースタ]	BLT TV-27		29
28. ハム変調	BLT TV-28		30
29. 相互変調	BLT TV-29		31
30. C T B	BLT TV-30		33
31. 挿入損失・分配損失・結合損失・端子間結合損失・逆結合損失・通過帯域減衰量・阻止帯域減衰量	BLT TV-31		34
32. 電圧定在波比 (VSWR) [ブースタ以外の受信機器]	BLT TV-32		36
33. 絶縁抵抗試験 [ブースタ]	BLT TV-33		37
34. 絶縁耐力試験 [ブースタ]	BLT TV-34		38
35. C I N	BLT TV-35		39
36. 漏洩電界強度	BLT TV-36		40

(4) その他

性能試験項目名	備考	頁
37. イミューティ [参考試験]		46

II 試験体

試験体の種別、形状、個数については性能試験方法で示すとおりとする。ただし、個数の下限は当財団の判断によるものとする。

また、試験体は認定申請時に提出された設計図書の図面、仕様書の内容と同一のものであることとし、ある場合は、追加試験の要請もあり得る。

III 試験結果の提示

各試験は、付属資料「テレビ共同受信機器（同軸伝送）試験成績書様式集」を参考に、定量的に表示しうるものは図表化を図り、外観観察については具体的に、何が、いつ、どのような状態になったかを試験目的にそって簡潔に記述すること。なお、試験体、試験装置は詳細図を添付し、また、試験結果を示すのに有効な場合は写真を添付すること。

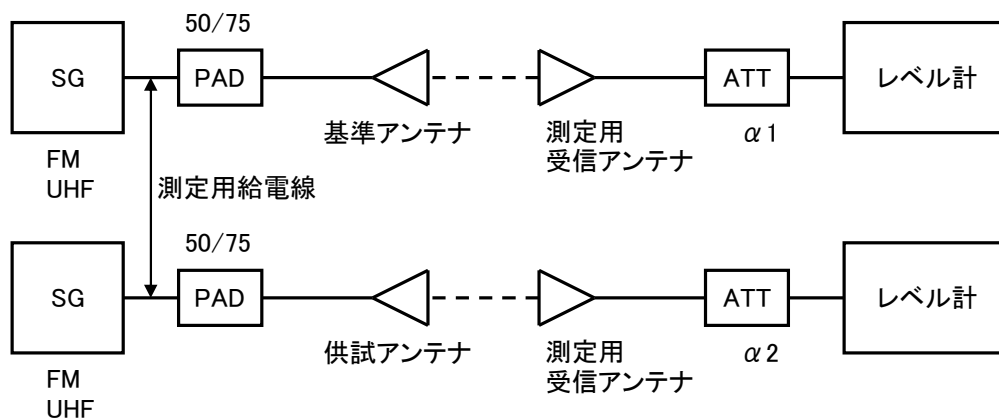
(1) 地上放送用アンテナ

●測定項目

- 1) 動作利得 2) 半値幅 3) 前後比 4) 電圧定在波比(VSWR) 5) 荷重試験

1. 動作利得<試験番号: BLT TV-01>

【測定回路】



【測定方法・条件】

- ① SG の出力を一定に保持し、供試アンテナと基準アンテナを交互に交換し、それぞれの場合におけるレベル計の入力電圧が等しくなるように ATT を調整し、次の式により動作利得を求める。

$$G = G_s + \alpha_2 - \alpha_1 + L_f \text{ (dB)}$$

G : 供試アンテナの動作利得

G_s : 基準アンテナの動作利得

α_1 : 基準アンテナを用いたときの ATT の減衰量

α_2 : 供試アンテナを用いたときの ATT の減衰量

L_f : 供試アンテナの VSWR による給電線の減衰の増加量 (JEITA CP5105B による)

- ② 測定基準周波数 (MHz)

V S - FMW (S) : 76 95

U L N - 20 (S) : 473 599

U W N - 20 (S) : 473 581 707

(S) : ステンレスタイプ

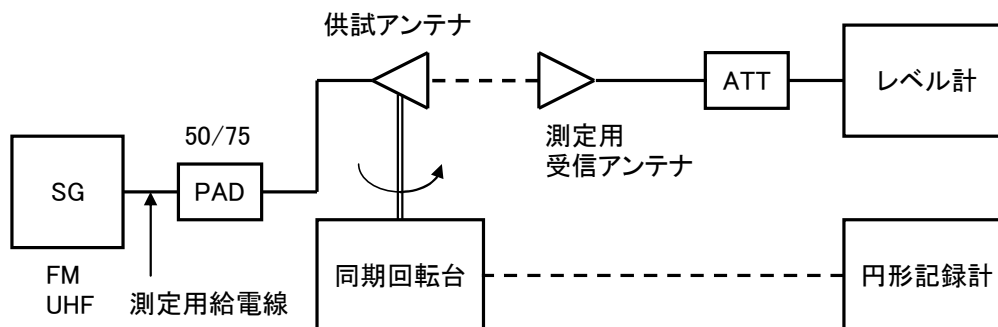
- ③ 測定用給電線は基準アンテナを用いる場合と同じ。

【測定データ処理】

- ① 測定値打点 グラフ表示
② 様式-1 (FM 用)
様式-4 (UHF 用)

2. 半値幅・前後比<試験番号: BLT TV-02>

【測定回路】



【測定方法・条件】

- ① 供試アンテナを測定すべき面が水平になるように設置し、供試アンテナの放射器を中心に回転させ指定方向からの角度 θ を関数とした受信電界強度を測定し、指向性を得る。
- ② 測定基準周波数 (MHz)
動作利得と同じ
- ③ 半値幅
上記によって求めた指向性の最大出力電圧の -3 dB 以上の出力電圧相対値を示す範囲の角度幅を求める。
- ④ 前後比
上記によって求めた指向性の指定方向 (角度 0° とする) の出力電圧 (E_f) と $180 \pm 60^\circ$ の範囲の方向にある最大出力電圧 (E_b) との比から次の式によって求める。
前後比 $= 20 \log_{10} (E_f / E_b) \text{ (dB)}$
- ⑤ 供試アンテナの支持物、給電線の影響が少なくなるように配慮する。

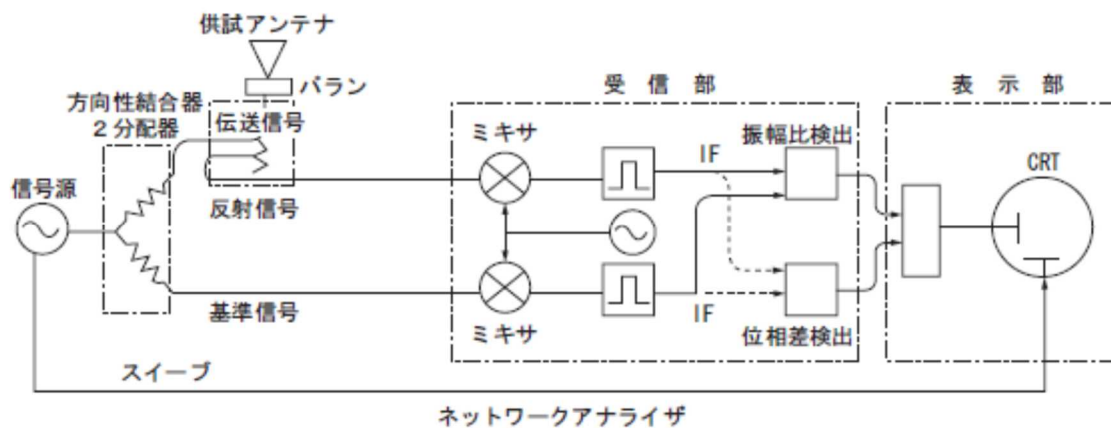
【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 様式-1 (FM 用)
様式-4 (UHF 用)

3. 電圧定在波比 (VSWR) <試験番号: BLT TV-03>

【測定回路】

地上高 4 m 以上にできる限り反射物体のない方向に向けて固定する。



【測定方法・条件】

- ①測定基準周波数
動作利得の場合と同じ。
- ②ネットワークアナライザを使用して測定し、直交表示またはスミスチャート表示にて求める。

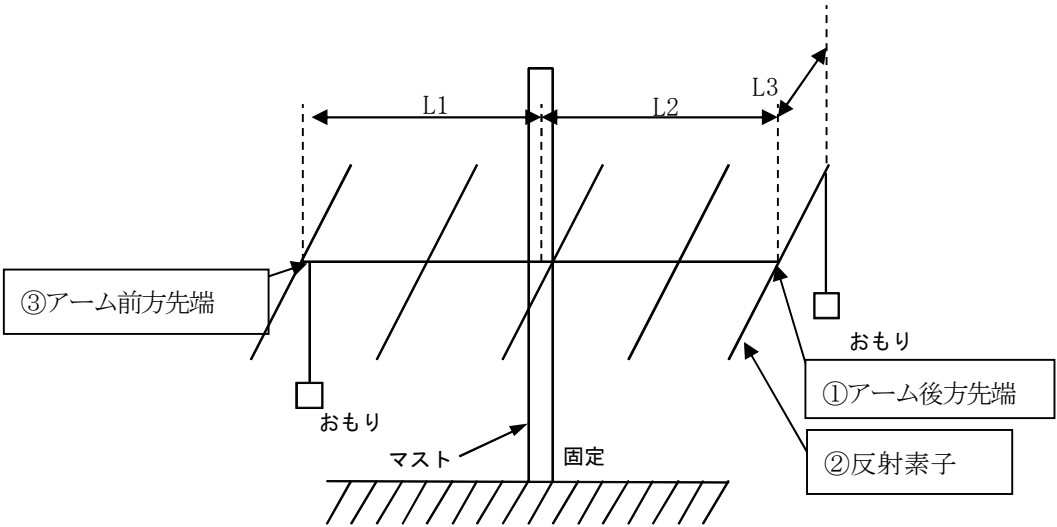
【測定データ処理】

- ①測定値打点グラフ表示
- ②様式－1 (F M 用)
様式－4 (UHF用)

4. 荷重試験<試験番号：BLT TV-04>

【測定回路】

試験架台に取扱説明書に記載された方法で水平にアンテナを取付ける。



【測定方法・条件】

- ①反射素子およびアーム先端の両側から10mm以内におもりをつるす。
(反射素子、アーム先端両側に対し、同時におもりをつるす。)
- ②荷重試験は1箇所ごとに分けて行う。

型 式		反射素子	アーム	
			前	後
風速 45m/s	VS-FMW (S)	1.0	10	10
	UWN-20	1.0	5	5
	ULN-20	1.0	5	5
風速 60m/s	UWN-20S	1.8	8.8	8.8
	ULN-20S	1.8	8.8	8.8

単位kg、(S) S：ステンレス

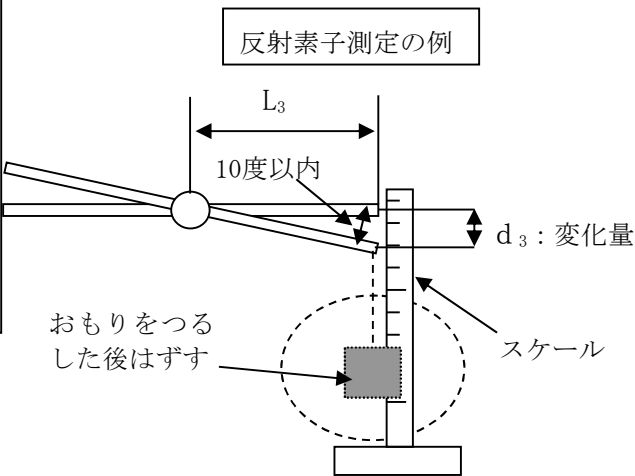
判定基準 ———10度以内に復元すること

- 判定規格Dはマスト固定部分からアームの先端までのL₁とL₂とアームから反射素子の先端までのL₃にそれぞれ $\tan 10^\circ$ を乗じて求める。
- 左図のようにおもりをつるし、おもりをはずした後の変位量dを求め判定規格Dより小さければ合格とする。

判定規格D----- $D = L_x \times \tan 10^\circ$

【測定データ処理】

- ①水平基準10度以内に復元すること。
- ②様式－5



(2) 衛星放送用アンテナ

●BS・110度CSアンテナ測定項目

- 1) アンテナ利得 2) 指向性 3) 交差偏波特性 4) 荷重試験

●BS・110度CSコンバータ測定項目

- 5) 利得周波数特性 6) 雑音指数 7) 相互変調妨害比 8) イメージ妨害抑圧比
9) 局部発振周波数およびその漂動 10) 入力端子における局部発振信号の漏洩
11) 電圧定在波比(出力VSWR) 12) 位相雑音

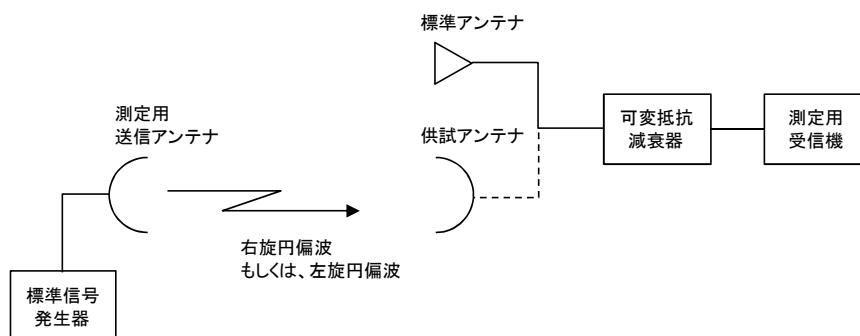
●総合性能

- 13) G/T

5. アンテナ利得<試験番号：BLT TV-05>

【測定回路】

J E I T A規格の J E I T A C P - 5 1 3 1 Aに規定する条件を満足する測定サイトにおいて、下図のごとく接続する。



【測定方法・条件】

- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては測定用送信アンテナを右旋円偏波用アンテナにした場合の測定と左旋円偏波用アンテナとした場合について行う。
- ② 試験信号を測定用送信アンテナに加え所定の位置に取り付けた標準アンテナで受信レベルを測定する。このとき測定用受信機の受信レベル R_o と、そのときの可変抵抗減衰器の減衰量 L_o (dB) を求める。
ただし、標準アンテナが直線偏波の場合には、水平偏波の場合と垂直偏波の場合について測定し、その平均値で表す。
- ③ 標準アンテナと供試アンテナを置換して②と同様に測定し、測定用受信機の表示レベルが R_o となるときの可変抵抗減衰器の減衰量 L (dB) を求める。
- ④ アンテナの利得を次式により算出する。
(1) B S ・ 1 1 0 度 C S アンテナ測定時 (送信偏波は円偏波)
・ 標準アンテナが直線偏波ホーンの場合 : $G = G_s + L - L_o - 3 + \Delta\alpha$
・ 標準アンテナが円偏波ホーンの場合 : $G = G_s + L - L_o + \Delta\alpha$
 G : 供試アンテナの利得 (dB)
 G_s : 標準アンテナの利得 (dB)
 L_o : 標準アンテナを用いたときの可変抵抗減衰器の減衰量 (dB)
 L : 供試アンテナを用いたときの可変抵抗減衰器の減衰量 (dB)
 $\Delta\alpha$: 標準アンテナの所定位置における受信レベルと試験開口面の平均受信レベルとの差 (dB)
- ⑤ 標準信号発生器の出力および測定用受信機の利得変動が無視できない場合はその変動分を補正する。

< $\Delta\alpha$ の求め方 >

- 1) 試験開口面の中心を通る水平軸方向及び垂直軸方向において、それぞれ標準アンテナを5~10cmずつ動かし、受信レベルを測定して平均受信レベルを求める。
- 2) 標準アンテナを所定の位置に置き、受信レベルを測定する。
- 3) 標準アンテナの所定の位置における受信レベルと試験開口面内の平均受信レベルの差 $\Delta\alpha$ は次式によって求められる。

$$\Delta\alpha = (\text{標準アンテナによる受信レベル}) - (\text{試験開口面の平均受信レベル}) \quad (\text{dB})$$

- ⑥ 測定基準周波数 (GHz)

B S ・ 1 1 0 度 C S アンテナ : 11.70 11.85 12.00 12.25 12.50 12.75

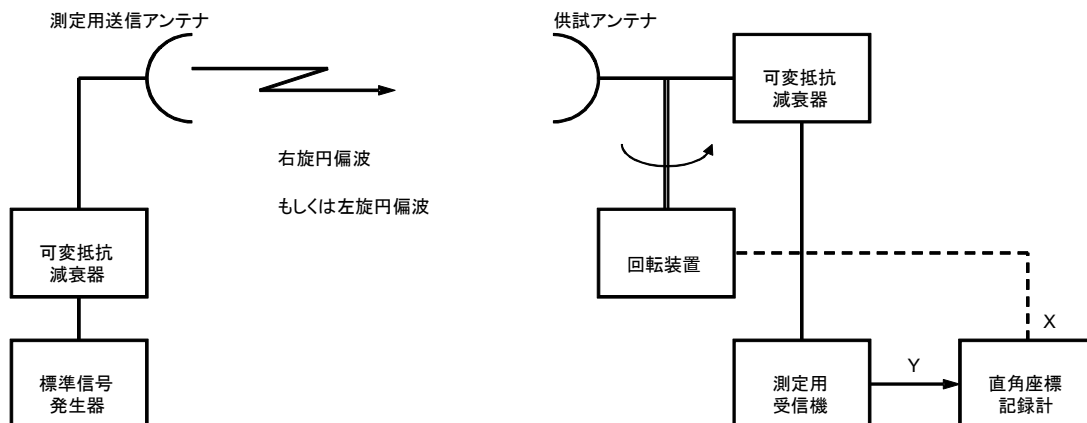
【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 様式-6

6. 指 向 性<試験番号：BLT TV-06>

【測定回路】

J E I T A規格のJ E I T A C P - 5 1 3 1 Aに規定する条件を満足する測定サイトにおいて、下図のごとく接続する。



【測定方法・条件】

- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては、測定用送信アンテナを右旋円偏波用アンテナにした場合の測定と左旋円偏波用アンテナとした場合について行う。
- ② 試験信号を測定用送信アンテナに加え供試アンテナを所定の位置に、水平回転装置と連動した支持台を使用して取り付ける。
- ③ 主ビーム方向を 0° として、 -180° から $+180^{\circ}$ まで1回転させ、各回転角に対応する相対受信レベルを測定する。
一般には、測定用受信機出力を回転装置と同期した直角座標記録計に自動記録する。
- ④ 主ビーム方向の近辺を拡大して測定するためには、 -18° から $+18^{\circ}$ まで回転させ、各回転角に対応する受信レベルを②と同様に測定する。
- ⑤ 測定基準周波数 (GHz)

BS・110度CSアンテナ：11.70 11.85 12.00 12.25 12.50 12.75

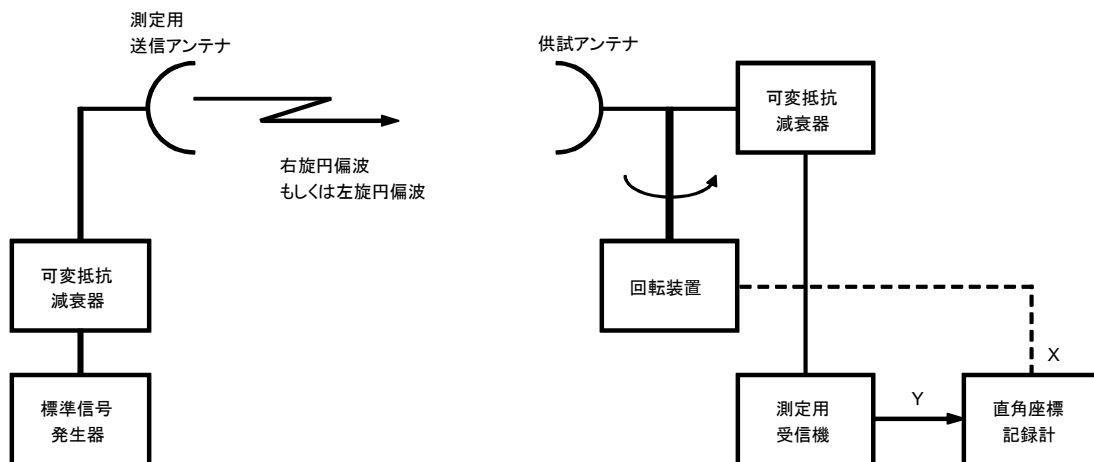
【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 様式-7 ($\pm 180^{\circ}$)
様式-8 ($\pm 18^{\circ}$)

7. 交差偏波特性<試験番号：BLT TV-07>

【測定回路】

J E I T A規格のJ E I T A C P - 5 1 3 1 Aに規定する条件を満足する測定サイトにおいて、下図のごとく接続する。



【測定方法・条件】

- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては供試アンテナの主偏波を右旋円偏波（交差偏波は左旋円偏波）とした場合の測定と左旋偏波（交差偏波は右旋円偏波）とした場合について行う。

<主偏波を右旋円偏波とした場合>

- ② 供試アンテナを所定の位置に、水平回転装置と連動した支持台を使用して取り付け。
- ③ 測定用送信アンテナを右旋円偏波用アンテナとして試験信号を加え、供試アンテナを主ビーム方向に向け、このときの受信レベルを基準レベル（0 d B）とする。
またこの方向を基準方向（0°）とする。
- ④ 測定用送信アンテナを左旋円偏波用に取換え、供試アンテナを基準方向に対して-180°から+180°まで1回転させ、各回転角に対応する受信レベルを測定し、基準レベルとの差を求める。

一般には、測定用受信機出力を回転装置と同期した直角座標記録計に記録する。

- ⑤ 測定基準周波数（G H z）

B S ・ 1 1 0 度 C S アンテナ：11.70 11.85 12.00 12.25 12.50 12.75

【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 様式-9

8. 荷重試験<試験番号: BLT TV-08>

【測定方法】

図1 反射鏡(正面方向)

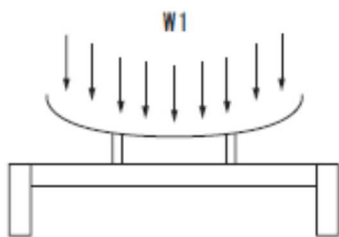
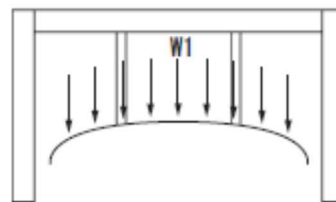
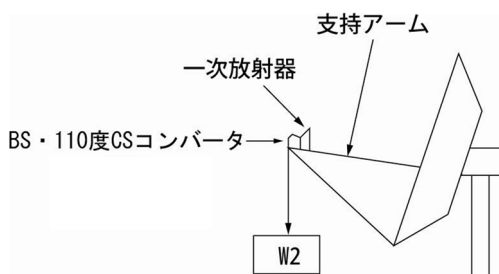
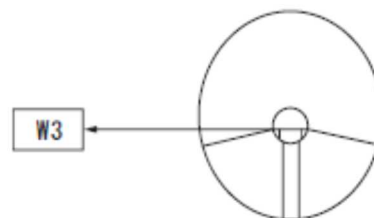


図2 反射鏡(裏面方向)

図3 一次放射器支持アーム
(垂直方向)図4 一次放射器支持アーム
(水平方向)

【測定方法・条件】

① パラボラアンテナ反射鏡

供試アンテナを架台に取付け、正面方向および裏面方向について反射鏡に受ける風圧荷重W1に相当する静止荷重を反射鏡全体に均等に分布するように加える。
図1および図2に例を示す。

② 一次放射器支持アーム

供試アンテナを架台に取付け、図3および図4の様に一次放射器、BS・110度CSコンバータ及び支持アームに受ける風圧荷重W2, W3に相当する静止荷重を加える。

③ 静止荷重は次式により算出する。

$$W1 = 320 \times 1.4 \times A1 \text{ (kg)}$$

$$W2 = 320 \times 1.0 \times A2 \text{ (kg)}$$

$$W3 = 320 \times 1.0 \times A3 \text{ (kg)}$$

A1: 反射鏡の最大受風面積 (m²)

A2: 一次放射器、BS・110度CSコンバータ及び支持アームの垂直方向の最大受風面積 (m²)

A3: 一次放射器、BS・110度CSコンバータ及び支持アームの水平方向の最大受風面積 (m²)

(注) *速度圧は下記条件にて算出

$$\text{速度圧 } q = 120 \sqrt{h} \quad (h: \text{地上高 (m)})$$

ここで、h = 50m (15階建て) として $q = 320 \text{ kg/m}^2$

【測定データ処理】

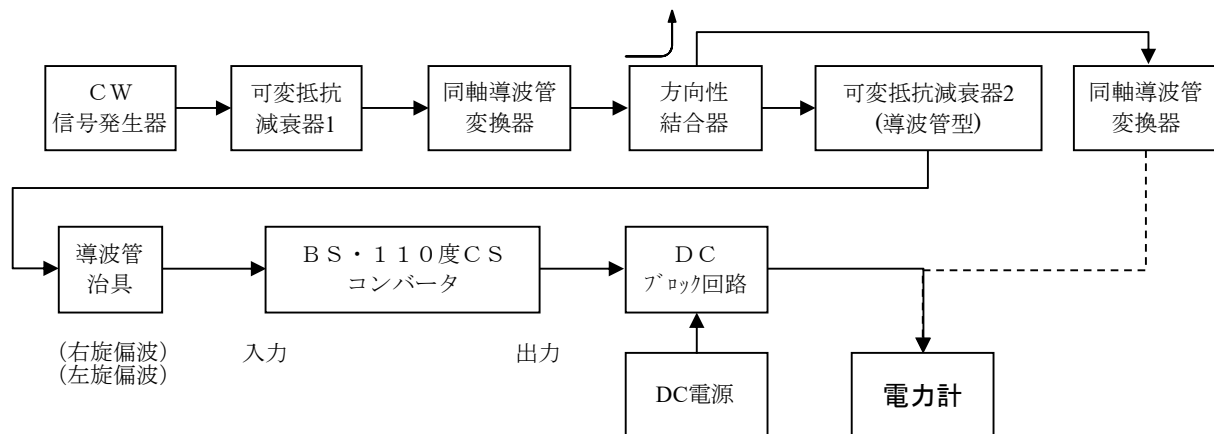
① 測定方法の概要

② 判定: 目視により観察し、飛散に相当する破壊のないこと。

③ 様式-10

9. 利得周波数特性<試験番号：BLT TV-09>

【測定回路】



【測定方法・条件】

- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては導波管治具を右旋円偏波用にした場合と左旋円偏波用とした場合について測定を行う。
- ② 無変調の測定信号を加え、測定信号レベルに設定する。このとき、方向性結合器の結合端子の出力信号レベル P_o [dB (mW)] を測定する。
- ③ 出力端子に現れる信号レベル P [dB (mW)] を測定する。
- ④ 利得を次式により算出する。

$$G = P - P_o + L_r - L_s$$

ただし、 G : 利得 (dB)

L_r : 可変抵抗減衰器2の減衰量 (dB)

L_s : 方向性結合器の結合量 (dB)

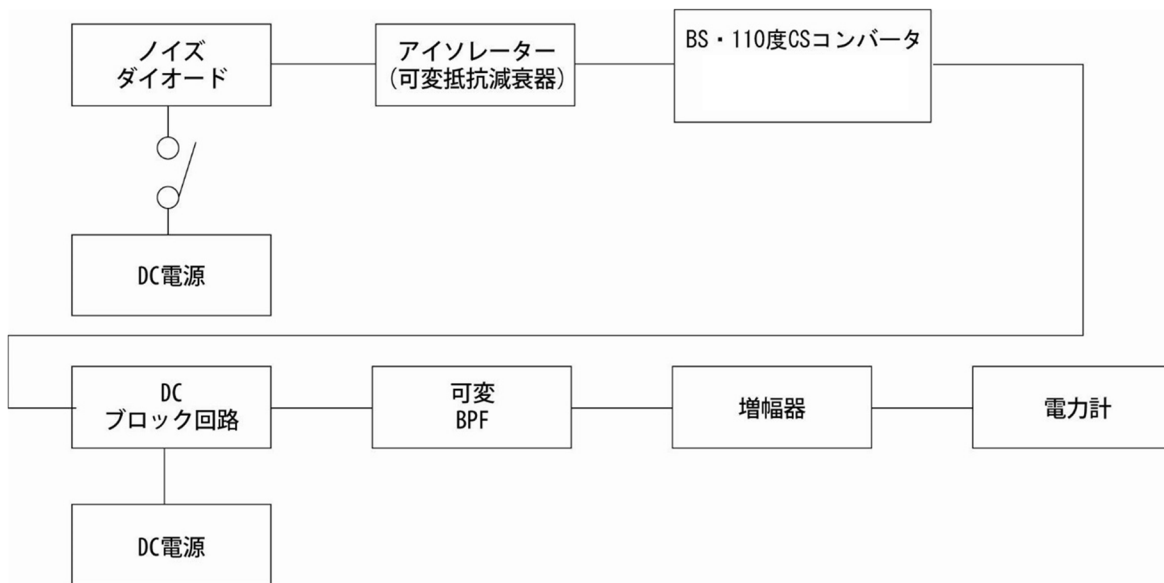
- ⑤ 測定信号周波数を変えて、②～④を繰り返す。ただし、CW信号発生器は周波数挿引を可とする。
- ⑥ 測定信号周波数 (GHz)
BS・110度CSアンテナ: 11.70 11.85 12.00 12.25 12.50 12.75
- ⑦ 測定信号レベル -70 dB (mW)
- ⑧ 流電圧電源 1.5 V +10%、-12% 以内

【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 式-11

10. 雑音指数<試験番号: BLT TV-10>

【測定回路】



【測定方法・条件】

- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては導波管治具を右旋円偏波用にした場合と左旋円偏波用とした場合について測定を行う。
- ② 可変BPFを測定周波数に対応する第1中間周波数に同調させ、ノイズダイオードの電源を切ったときの増幅器の出力端子に現れる雑音電力 P_o [dB (mW)] を測定する。
- ③ ノイズダイオードの電源を入れ、このときに増幅器の出力端子に現れる雑音電力 P [dB (mW)] を測定する。
- ④ 雑音指数を次式により算出する。

$$NF = (E_n - L) - 10 \log_{10} (Y - 1) \quad (\text{dB})$$

$$\text{ただし、} Y = 10^{0.1(P-P_o)}$$

E_n : ノイズダイオードのENR (dB)

L : アイソレーターまたは抵抗減衰器の挿入損失

- ⑤ 測定信号周波数 (GHz)
BS・110度CSアンテナ: 11.70 11.85 12.00 12.25 12.50 12.75
- ⑥ 測定周囲温度 標準温湿度状態
(JIS Z 8703 5~35℃、45~85%)
- ⑦ 直流電圧電源 1.5V +10%、-12% 以内

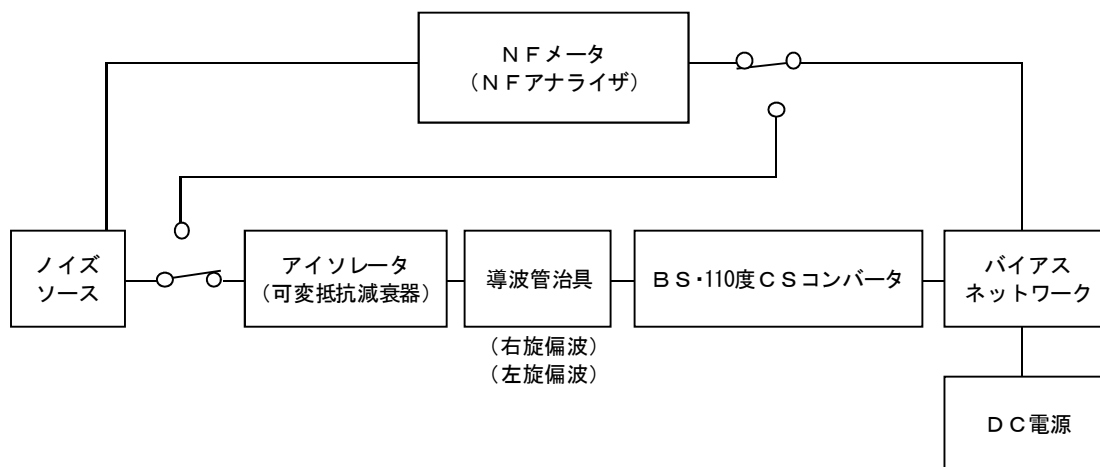
*⑧ 別に定めるNFメータによる測定方法を用いてもよい。

【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 様式-12

11. 雑音指数（別法）＜試験番号：BLT TV-11＞

【測定回路】



- 備考（１）ノイズソースからBS・110度CSコンバータへのVSWRが影響しない場合は、アイソレータまたは抵抗減衰器を省略してもよい。
 使用する場合には、アイソレータではVSWRが1.05以下、抵抗減衰器ではVSWRが1.05以下、減衰量が6～10dBのものとする。
- （２）ノイズソースはENRが5dB程度のものとする。

【測定方法・条件】

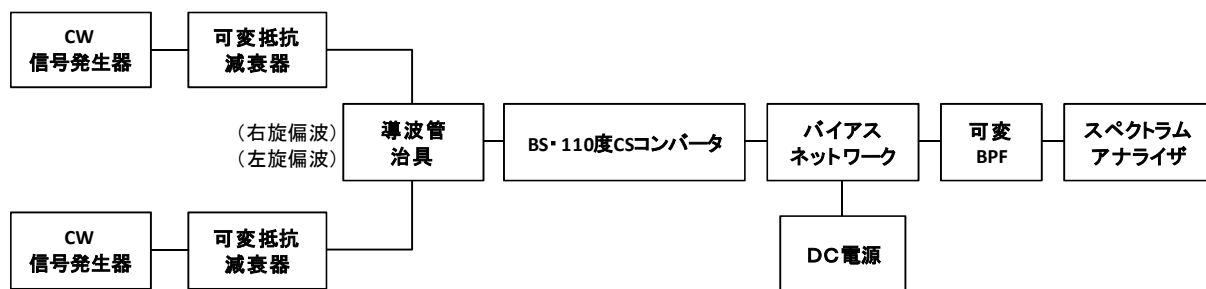
- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては導波管治具を右旋円偏波用にした場合と左旋円偏波用とした場合について測定を行う。
- ② ノイズソースのENRの値を読み、NFメータを校正する。
- ③ NFメータの値を直読する。
- ④ 測定周波数を変えて②を繰り返す。
- ⑤ 測定信号周波数（GHz）
 BS・110度CSアンテナ：11.70 11.85 12.00 12.25 12.50 12.75
- ⑥ 測定周囲温度 標準温湿度状態
 (JIS Z 8703 5～35℃、45～85%)
- ⑦ 直流電圧電源 1.5V +10%、-12% 以内

【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 様式-12

1 2. 相互変調妨害比（右左旋共用）＜試験番号：BLT TV-12＞

【測定回路】



【測定方法・条件】

- ①導波管治具は右左旋対応で両偏波の信号を同時に入力出来る治具とする。
- ②無変調の希望信号を加え、測定信号レベルに設定する。
- ③可変BPFを調節して、出力端子に現れる信号レベル P_0 〔dB(mW)〕を測定する。
- ④②とレベルの等しい2波の無変調妨害信号を同時に加え、その出力端子に現れる信号レベル P 〔dB(mW)〕を測定する。
- ⑤相互変調妨害比を次式により算出する。

$$\text{相互変調妨害比} = P_0 - P \quad [\text{dB}]$$

- ⑥希望信号レベルおよび妨害信号の組合せを下表のように変えて②～⑤を同様に繰り返す。

⑦測定信号周波数

	希望信号周波数		妨害信号周波数		相互変調波周波数
	RF (GHz)	IF (MHz)	RF (GHz)	IF (MHz)	
組み合わせA	11.728 (右旋)	1050	11.768 (右旋)	1090 (f_1)	$2f_1 - f_2$
			11.808 (右旋)	1130 (f_2)	
組み合わせB	12.028 (右旋)	1350	12.068 (右旋)	1390 (f_1)	
			12.108 (右旋)	1430 (f_2)	
組み合わせC	12.608 (右旋)	1930	12.648 (右旋)	1970 (f_1)	
			12.688 (右旋)	2010 (f_2)	
組み合わせD	12.015 (左旋)	2150	12.055 (左旋)	2550 (f_1)	
			12.095 (左旋)	2590 (f_2)	
組み合わせE	12.585 (左旋)	3080	12.625 (左旋)	3120 (f_1)	
			12.665 (左旋)	3160 (f_2)	

希望信号周波数の入力レベル：-50～-70dB(mW)

局部発振周波数：10.678 GHz(右旋)、9.505 GHz (左旋)

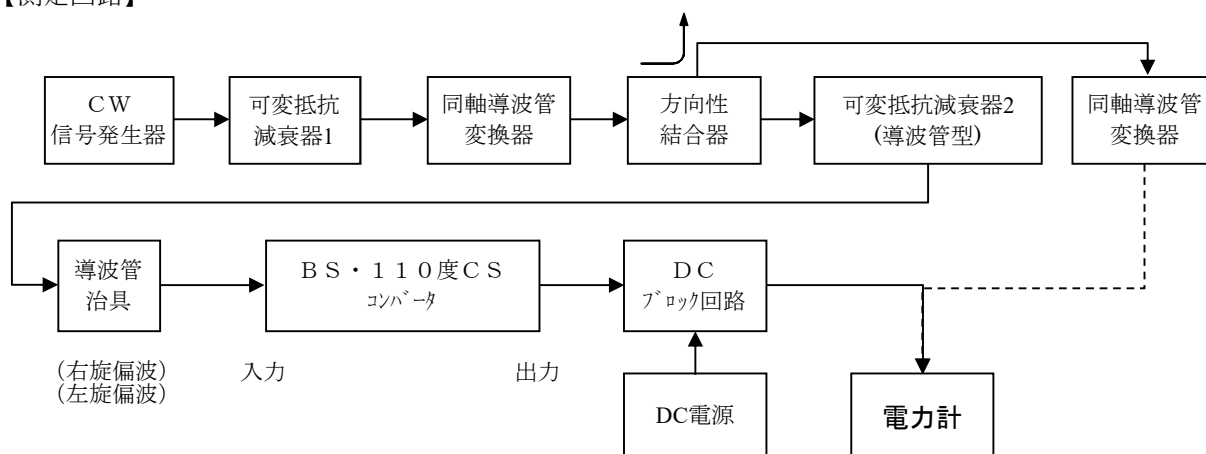
- ⑧直流電源電圧 1.5 V +10%、-12% 以内

【測定データ処理】

- ①測定値打点グラフ表示
- ②様式-13-1 (右旋帯域)、様式-13-2 (左旋帯域)

1 3. イメージ妨害抑圧比<試験番号：BLT TV-13>

【測定回路】



〔測定上の注意〕

※イメージ周波数は、導波管の規格周波数の範囲外であるので方向性結合器の結合度を確認し、校正しておくこと。

【測定方法・条件】

- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては導波管治具を右旋円偏波用にして右旋円偏波用の測定周波数について測定を行い、それに加え、導波管治具を左旋円偏波用として左旋円偏波用の測定周波数についても行う。
- ② 無変調の希望信号を加え、希望信号レベルに設定する。このとき出力端子に現れる信号レベル P_0 [dB (mW)] を測定する。
- ③ ②の希望周波数に対するイメージ周波数で無変調の妨害信号を同時に加え、出力端子に現れる信号レベル P [dB (mW)] を測定する。
- ④ イメージ妨害抑圧比を次式により算出する。

$$\text{イメージ妨害抑圧比} = P_0 - P + 30 \quad [\text{dB}]$$

- ⑤ 希望信号周波数および妨害信号周波数を変えて、②～④を同様に繰り返す。

⑥ 測定周波数

<右旋円偏波>

希望信号周波数	妨害信号周波数
11.75 GHz	9.606 GHz
12.25 GHz	9.106 GHz
12.70 GHz	8.656 GHz

<左旋円偏波>

希望信号周波数	妨害信号周波数
11.75 GHz	7.26 GHz
12.25 GHz	6.76 GHz
12.70 GHz	6.31 GHz

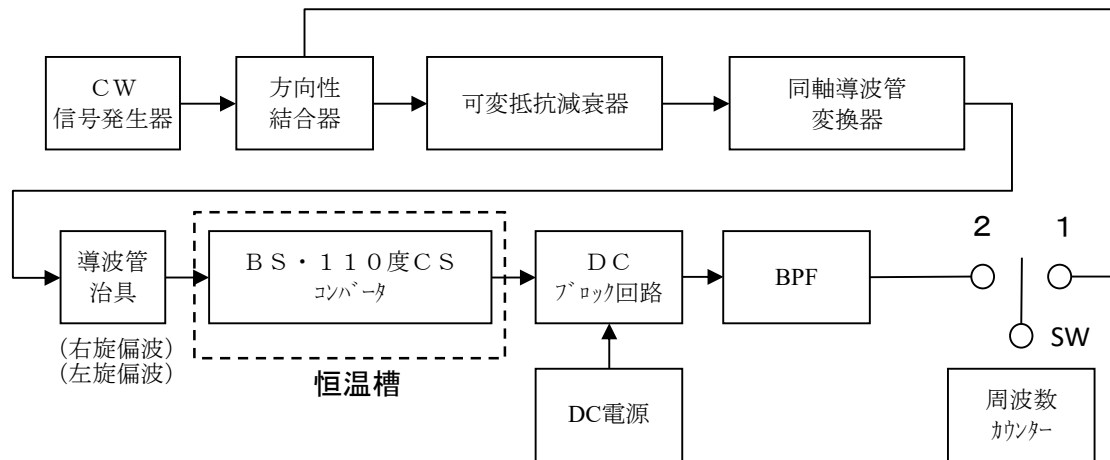
- ⑦ 希望信号レベル — 70 dB (mW)
- ⑧ 妨害信号レベル — 40 dB (mW)
- ⑨ 直流電源電圧 15 V +10% 以内
-12%

【測定データ処理】

- ①測定値打点グラフ表示
- ②様式－13－1（右旋帯域）、様式－13－2（左旋帯域）

1 4. 局部発振周波数およびその漂動<試験番号: BLT TV-14>

【測定回路】



【測定方法・条件】

- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては導波管治具を右旋円偏波用にして右旋円偏波用の局部発振周波数について測定を行い、それに加え、導波管治具を左旋円偏波用として左旋円偏波用の局部発振周波数についても行う。
- ② SWを1側に接続して、無変調の測定信号を加え、測定信号レベルに設定して、そのときの周波数 f_0 (GHz) を測定する。
- ③ SWを2側に接続して、出力における第1中間周波数の信号の周波数 f_i (GHz) を測定する。このとき可変減衰器により信号レベルを規定入力レベルに調整する。
- ④ 次式により局部発振周波数を算出する。

$$\text{局部発振周波数} = f_0 - f_i \text{ (GHz)}$$

- ⑤ (a) ②～④を繰り返す。
常温〔25℃〕で、電源投入後1分から局部発振周波数が安定するまで測定。
- (b) ②～④を測定周囲温度を変えて繰り返す。

⑥測定信号周波数

右旋円偏波: 12 GHz

左旋円偏波: 12 GHz

⑦測定信号レベル -20~-10 dB (mW)

⑧周囲温度 -30℃、0℃、25℃、50℃

⑨測定周波数

右旋円偏波: 1.322 GHz

左旋円偏波: 2.495 GHz

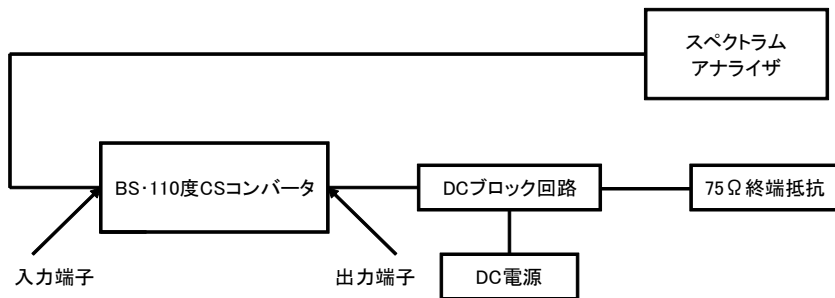
⑩直流電源電圧 15V +10%、-12% 以内

【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 様式-14

15. 入力端子における局部発振信号の漏洩<試験番号: BLT TV-15>

【測定回路】



〔測定上の注意〕

- (1) 局部発振信号の第2高調波を測定するときは、テーパ導波管を接続してWR J-220に変換して測定すること。
- (2) 同軸導波管変換器およびケーブルの損失を補正すること。

【測定方法・条件】

- ① 出力端子に終端抵抗を接続して、入力端子から漏洩する信号の周波数および電力を測定する。
- ② 測定周波数は以下とする。
 <右左旋円偏波共用アンテナ>
 1. 17.3 GHz ~ 21.356 GHz
- ③ 直流電源電圧 15 V +10%、-12% 以内

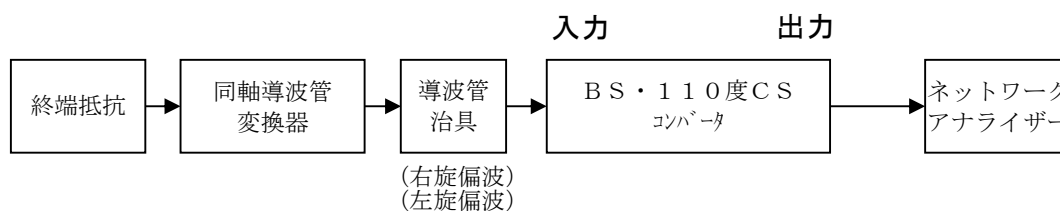
(注) 入力構造が導波管の場合には、その遮断周波数以上について測定する。

【測定データ処理】

- ① 測定値打点グラフ表示
- ② 様式-15-1 (右旋偏波用)、様式-15-2 (左旋偏波用)

1 6．出力電圧定在波比(出力VSWR) <試験番号：BLT TV-16>

【測定回路】



【測定方法・条件】

- ① ネットワークアナライザのキャリブレーションを行った後、コンバータの出力端子をネットワークアナライザに接続してVSWRを直読する。
リターンロス表示の場合には、VSWRを次式により算出する。

$$\text{出力VSWR} = (1 + 10^{-L/20}) / (1 - 10^{-L/20})$$

- ② 測定信号周波数

＜右左旋円偏波用アンテナ＞

1 0 3 2 MHz ～ 3 2 2 4 MHz、2 5 MHz ステップ

- ③ 測定信号レベル −30 dB (mW)

- ④ 直流電圧電源 1.5 V +10%、-12% 以内

【測定データ処理】

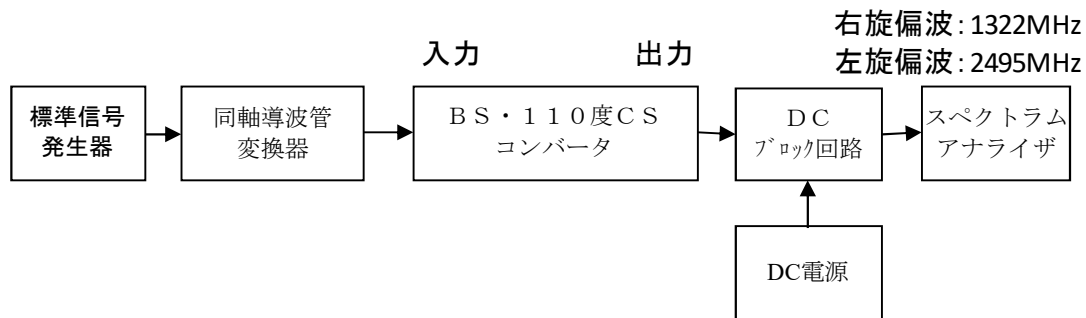
- ① 測定値打点グラフ表示

- ② 様式-15-1 (右旋偏波用)、様式-15-2 (左旋偏波用)

17. 局発位相雑音<試験番号: BLT TV-17>

測定回路および測定法・条件

【測定回路】



【測定方法・条件】

- ① 次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては導波管変換器を右旋円偏波用にして測定を行い、それに加え、導波管変換器を左旋円偏波用としての測定も行う。
- ② 試験信号周波数は下記周波数とし、離調周波数は1、5、10 kHz とする。
BS・110度CSコンバータ: 12 GHz
- ③ 入力電力はコンバータの入出力特性において線形性が保たれる範囲で、-60 dBm程度を目安とする。
- ④ コンバータの出力端子における信号レベル P_o [dB (mW)] を測定する。
- ⑤ 各々の離調周波数における信号レベル P [dB (mW)] を測定する。
- ⑥ それぞれの離調周波数における、局部発振信号の純度を次式より求める。
局部発振信号の純度 [dBc/Hz] = P [dB (mW)] - P_o [dB (mW)]
- ⑦ 右旋偏波の場合には1322 MHz、左旋偏波の場合には2495 MHz で局部発振位相雑音をスペクトラムアナライザで測定する。

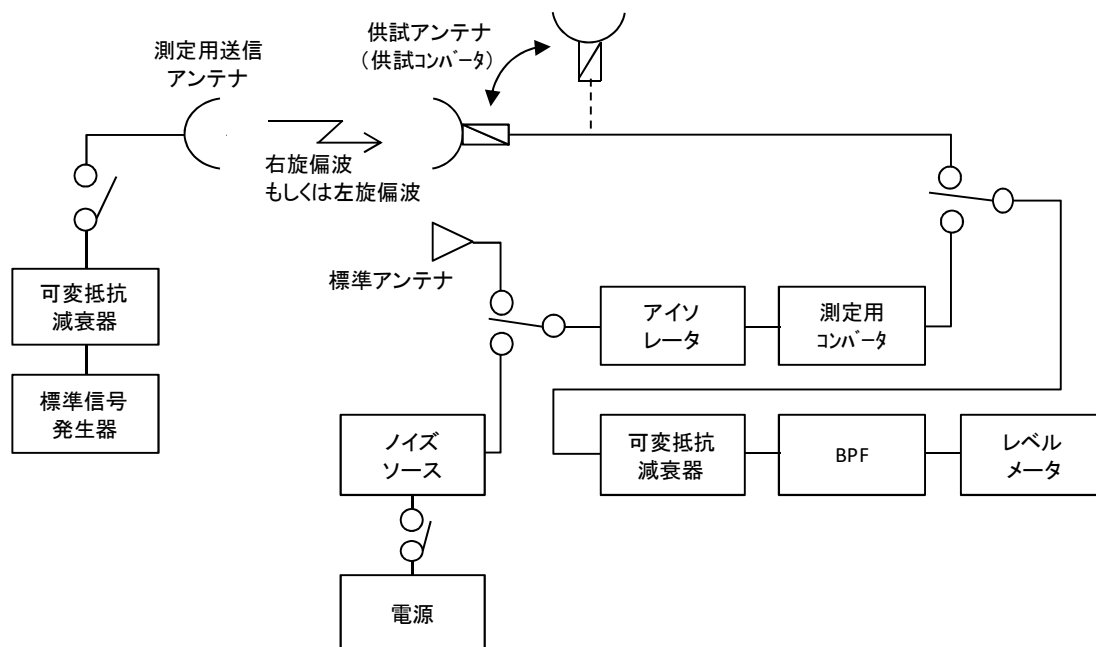
【測定データ処理】

- ① 測定値打点
- ② 式-16

19.G/T<試験番号: BLT TV-19>

【測定回路】

J E I T A規格の J E I T A C P - 5 1 3 1 Aに規定する条件を満足する測定サイトにおいて、下図のごとく接続する。



【測定方法・条件】

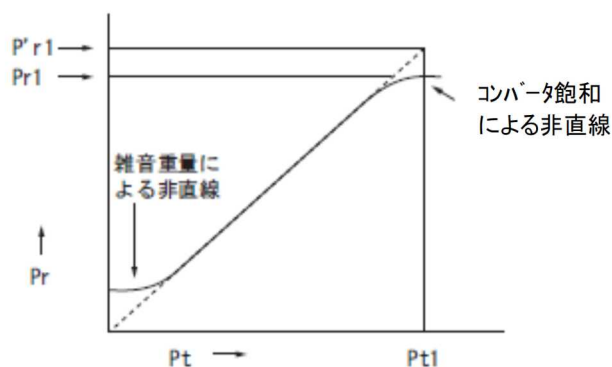
(1) 試験周波数

11.70GHz、11.85GHz、12.00GHz、12.25GHz、12.50GHz、12.75GHz

(2) 測定用コンバーターの非直線性の校正

- ①測定用送信アンテナと供試アンテナを正対させた状態で、送信側の可変抵抗減衰器の減衰量 α_t (dB) を変化させ、レベルメータの指示が適当な一定値となるように受信側の可変抵抗減衰器を調節し、その減衰量 α_r を求める。
- ②送信レベル $P_t = 10^{\alpha_t/10}$ と測定用コンバーター出力レベル $P_r = 10^{\alpha_r/10}$ の関係を直角座標上に書き、非直線性を補正するための比例直線を求める。
- ③送信レベルを適当な値 (測定系雑音が十分無視できるような高い値でかつ、非直線による誤差を精度よく補正できる範囲の値) に設定し、そのときの受信レベル P_{r1} と補正受信レベル P'_{r1} から非直線補正係数 r を次式によって求める。

$$r = P'_{r1} / P_{r1} \text{ (倍)}$$



(3) G/Tの測定

- ①次の測定について、右左旋円偏波共用アンテナについては測定用アンテナからの送信電波を右旋円偏波として測定を行い、それに加え、送信電波を左旋円偏波とした測定も行う。
- ②測定用送信アンテナと供試アンテナを正対させて試験開口面の電力束密度分布を測定し、その平均レベルと標準アンテナ所定位置でのレベルとの比 β (倍)を求める。
- ③供試アンテナを正対して受信したとき(P_1)、正対のまま送信電波を切ったとき(P_2)、および電波を切ったまま供試アンテナを天空に向けたとき(P_3)のレベルメータの指示が同じになるように受信側の可変抵抗減衰器を調節し、その減衰量からそれぞれの出力レベル P_1 、 P_2 、 P_3 を求める。
- ④標準アンテナを所定の位置に設定し、規定送信レベルの電波を受信する。このとき(P_4)と、この状態で送信電波を切ったとき(P_5)、さらにノイズダイオードに切り換えたとき(P_6)および、ノイズダイオードの電源を切ったとき(P_7)のレベルメータの指示値が同じになるように受信側の可変抵抗減衰器を調節し、その減衰量からそれぞれの出力レベル P_4 、 P_5 、 P_6 、 P_7 を求める。
- ⑤G/Tは次式によって算出する。

(1) BS・110度CSアンテナ測定時

標準アンテナが直線偏波ホーンの場合

$$\frac{G}{T} = \frac{G_s \gamma}{2 T_0 E_n \beta} \cdot \frac{(P_1 - P_2 / \gamma) (P_6 - P_7)}{P_3 (P_4 - P_5)} \quad (\text{倍/K})$$

ここに、 G_s ：標準アンテナの利得(倍) E_n ：ノイズダイオードの過剰雑音比(倍) T_0 ：290 K ($10 \log 290 = 24.62$)

G/TをdB/Kで表すと次のようになる。

$$\begin{aligned} G/T &= G_s + \gamma - 3 - E_n - \beta \\ &\quad + 10 \log (10^{P_1/10} - 10^{P_2/10} / 10^{\gamma/10}) \\ &\quad + 10 \log (10^{P_6/10} - 10^{P_7/10}) - P_3 \\ &\quad - 10 \log (10^{P_4/10} - 10^{P_5/10}) - 24.62 \quad (\text{dB/K}) \end{aligned}$$

標準アンテナが円偏波ホーンの場合

$$\frac{G}{T} = \frac{G_s \gamma}{T_0 E_n \beta} \cdot \frac{(P_1 - P_2 / \gamma) (P_6 - P_7)}{P_3 (P_4 - P_5)} \quad (\text{倍/K})$$

ここに、 G_s ：標準アンテナの利得(倍) E_n ：ノイズダイオードの過剰雑音比(倍) T_0 ：290 K ($10 \log 290 = 24.62$)

G/TをdB/Kで表すと次のようになる。

$$\begin{aligned} G/T &= G_s + \gamma - E_n - \beta \\ &\quad + 10 \log (10^{P_1/10} - 10^{P_2/10} / 10^{\gamma/10}) \\ &\quad + 10 \log (10^{P_6/10} - 10^{P_7/10}) - P_3 \\ &\quad - 10 \log (10^{P_4/10} - 10^{P_5/10}) - 24.62 \quad (\text{dB/K}) \end{aligned}$$

ここに、 G_s 、 γ 、 E_n 、 β 、 P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_4 、 P_5 、 P_6 、 P_7 はdBで表す。

【測定データ処理】

- ①測定値打点。グラフ表示
- ②様式-17

(3) 受信機器**●ブースタ測定項目**

- 1) 耐衝撃波試験 2) 通電試験 3) 出力電圧試験 4) 雑音指数 5) 利得 6) 利得調整範囲
 7) 帯域内利得偏差 8) チルト特性 9) 周波数帯域幅 10) 帯域内周波数特性 11) 利得安定度
 12) 電圧定在波比(VSWR) 13) ハム変調 14) 相互変調 15) CTB 16) 絶縁抵抗
 17) 絶縁耐力 18) CIN 19) 漏洩電界強度

●分配器, 分岐器, 混合(分波)器, 直列ユニット, テレビ端子測定項目

- 20) 挿入損失 21) 分配損失 22) 結合損失 23) 端子間結合損失 24) 逆方向結合損失
 25) 通過帯域減衰量 26) 阻止帯域減衰量 27) 電圧定在波比(VSWR) 28) 漏洩電界強度

●測定上の注意

- ①測定系の校正を行う場合には、下表の中継方法により中継する。

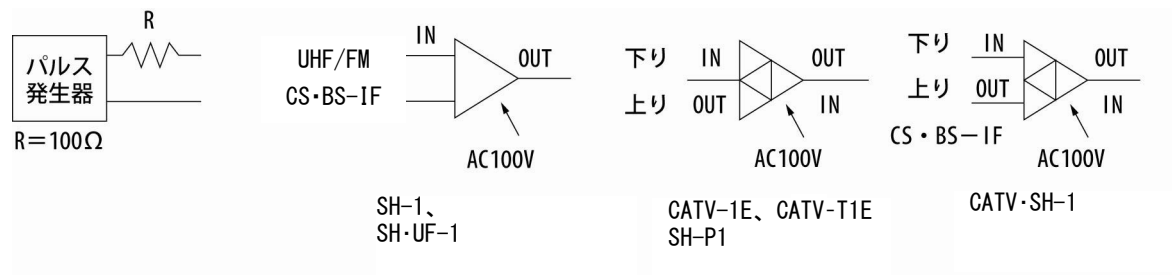
供試器入出力		
入 力	出 力	
◎	◎	中継コネクタによる

◎：接栓

- ②測定用コネクタはC15形を用いること。
 ③測定系のVSWRは1.1以下であること。

20. 耐衝撃波試験<試験番号: BLT TV-20>

【測定回路】



【測定方法・条件】

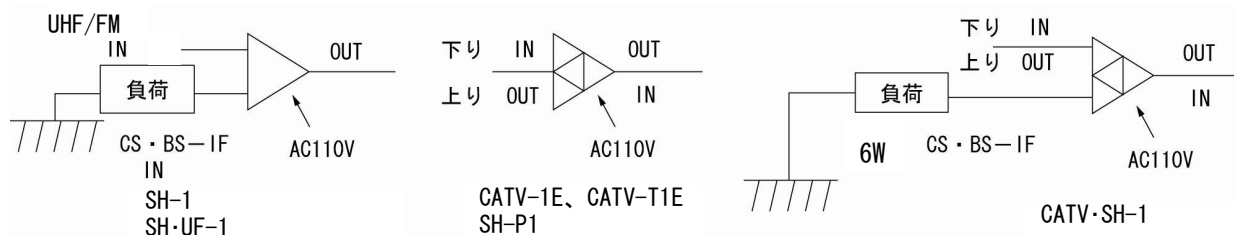
- ①パルス発生電圧 電圧15KV 波形1.2/50μs
- ②極性 正負
- ③回数 各端子 正負各2回
- ④印加端子
 - (a) CATV-1E、CATV-T1E、SH-P1
IN, OUT, 電源 計3端子
 - (b) SH-1、SH-UF-1
IN(UHF/FM、CS-BS-IF), OUT, 電源 計4端子
*FMとUHFが独立する場合は 計5端子
 - (c) CATV-SH-1
IN(CATV及びCS-BS-IF), OUT, 電源 計4端子
 - (d) 空き端子には終端抵抗を取付ること。
- ⑤電源端子についてはACコードプラグ片端子と機能アース端子間とする。

【測定データ処理】

- ①印加前、印加後の周波数特性に変化のないこと。
- ②部品に損傷のないこと。
- ③様式-18

2 1. 通 電 試 験<試験番号：BLT TV-21>

【測定回路】



【測定方法・条件】

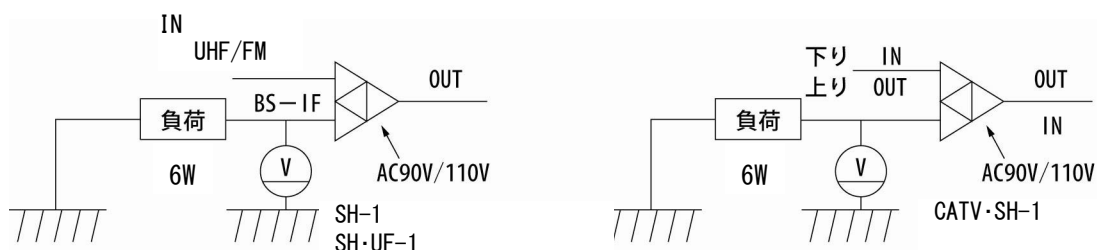
- ①電 源 電 圧 AC100V+10%
- ②周 囲 温 度 常 温
- ③通 電 時 間 48H連続
- ④通電試験の印加前および印加後の周波数特性を確認する。
- ⑤CS・BS-IFの入力端子に適正負荷を接続する。

【測定データ処理】

- ①外観および性能に変化のないこと。
- ②様式-18

2 2. 出力電圧試験<試験番号：BLT TV-22>

【測定回路】



【測定方法・条件】

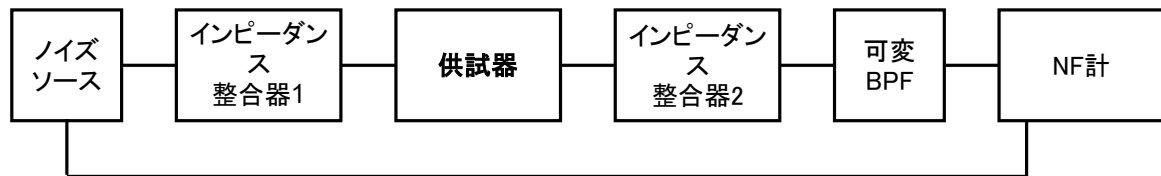
- ①電源電圧，AC90Vおよび110VでCS・BS-IF入力端子の出力電圧を測定する。
- ②CS・BS-IF入力端子の負荷は抵抗負荷とする。（負荷抵抗は37.5Ω6W）

【測定データ処理】

- ①出力電圧はDC15V±10%以内のこと。
- ②様式-18

2 3. 雑音指数<試験番号: BLT TV-23>

【測定回路】



【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) CATV-T1E、CATV-T1E : IN, OUT
- (b) SH-1 : IN (CS・BS-IF端子), OUT
- (c) SH・UF-1 : IN (CS・BS-IF/UHF/FM共用端子), OUT
- (d) CATV・SH-1、SH-P1 : IN (CS・BS-IF/CATV共用端子), OUT

②測定基準周波数

- (a) FM帯域 : 80MHz
- (b) UHF帯域 : 620MHz
- (c) CS・BS-IF帯域 : 1090、1280、1520、2040、2540、3160MHz
- (d) CATV帯域 : 上り 30MHz、下り 300MHz

③ブースタの利得を最大値にセットする。

④可変BPFを測定周波数に同調させる。

⑤NF計の測定手順によって測定する。

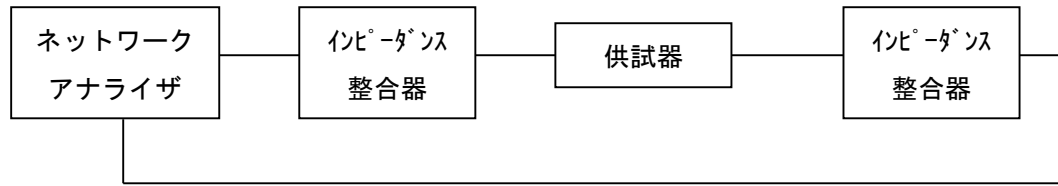
【測定データ処理】

①測定値表示 (dB)

②様式-18

24. 利得・利得調整範囲・帯域内利得偏差・チルト特性<試験番号: BLT TV-24>

【測定回路】



【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) CATV-T1E、CATV-T1E : IN, OUT
- (b) SH-1 : IN (CS・BS-IF端子), OUT
- (c) SH・UF-1 : IN (CS・BS-IF/UHF/FM共用端子), OUT
- (d) CATV・SH-1、SH-P1 : IN (CS・BS-IF/CATV共用端子), OUT

②測定基準周波数

- (a) FM帯域 : 80MHz
- (b) UHF帯域 : 620MHz
- (c) CS・BS-IF帯域 : 1000、3224MHz
- (d) CATV帯域 : 上り 30MHz、下り 300MHz

③入力レベル

- (a) FM/UHF : 60~70dBμV
- (b) CS・BS-IF : 60~70dBμV
- (c) CATV : 60~70dBμV

④ネットワークアナライザの出力は指定帯域を掃引し、供試器の入力レベルを供試器により指定された値とする。

⑤利得・利得調整範囲の測定方法

- (a) 最大利得で利得を各帯域毎に測定。
- (b) 測定基準周波数で利得標準にセットする。

⑥利得の測定

ネットワークアナライザの測定手順により特性を測定する。

⑦利得調整範囲の測定

利得調整器を標準利得および最小利得状態に設定しそれぞれの利得を測定する。

⑧利得調整範囲の算出

測定基準周波数において、利得調整器を標準利得に調整したときの利得を G_1 とし、最小利得に調整したときの利得を G_2 としたとき、利得調整範囲 G_R は次式から求める。

$$G_R = G_1 - G_2 \quad (\text{dB})$$

⑨帯域内利得偏差の算出

帯域内における利得の最大値を G_3 、最小値を G_4 としたとき、帯域内利得偏差 ΔG は、次式から求める。

$$\pm \Delta G = (G_3 - G_4) / 2 \quad (\text{dB})$$

※ 下表に示す標準利得値の間を線で結び、アンプの標準利得を3224MHzで45dBもしくは20dBに合わせる。このとき直線に対する利得を測定し最大値を G_3 、最小値を G_4 とする。

ブースタ	周波数 (MHz)	標準利得 (dB)
3224MHz対応	1000	35
	3224	45
SH-P1	1000	15
	3224	20

⑩チルト特性の測定方法

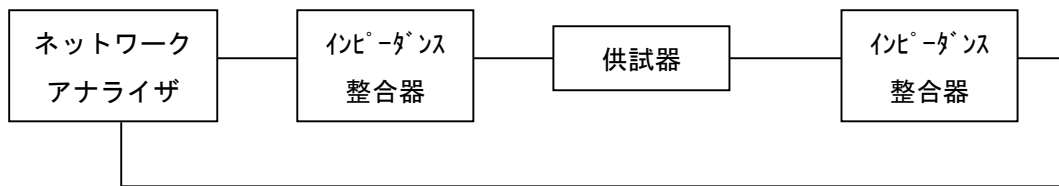
チルトを最大とし、最大周波数で利得標準にセットする。最高周波数に対する最低周波数のチルト量を測定する。

【測定データ処理】

- ①測定値表示（記録計）
- ②整合ロス補正
- ③様式－1 9－1
様式－2 0－1

25. 周波数帯域幅・帯域内周波数特性<試験番号: BLT TV-25>

【測定回路】



【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) CATV-T1E、CATV-T1E : IN, OUT
- (b) SH-1 : IN (CS・BS-IF端子), OUT
- (c) SH・UF-1 : IN (CS・BS-IF/UHF/FM共用端子), OUT
- (d) CATV・SH-1、SH-P1 : IN (CS・BS-IF/CATV共用端子), OUT

②測定基準周波数

- (a) FM帯域 : 80MHz
- (b) UHF帯域 : 620MHz
- (c) CATV帯域 : 上り 30MHz、下り 300MHz
- (d) CS・BS-IF帯域 : 1000、3224MHz

③入力レベル

- (a) FM/UHF : 60～70dBμV
- (b) CS・BS-IF : 60～70dBμV
- (c) CATV : 60～70dBμV

④ネットワークアナライザ出力の設定

ネットワークアナライザの出力は指定帯域を掃引し、供試器の入力レベルを供試器により指定された値とする。

⑤利得の測定

ネットワークアナライザの測定手順により特性を測定する。

⑥帯域内周波数特性の算出

指定周波数において、利得調整器を標準利得に調整し指定帯域内における利得の最大値を G_1 、最小値を G_2 としたとき、帯域内周波数特性 G_F は次式から求める。

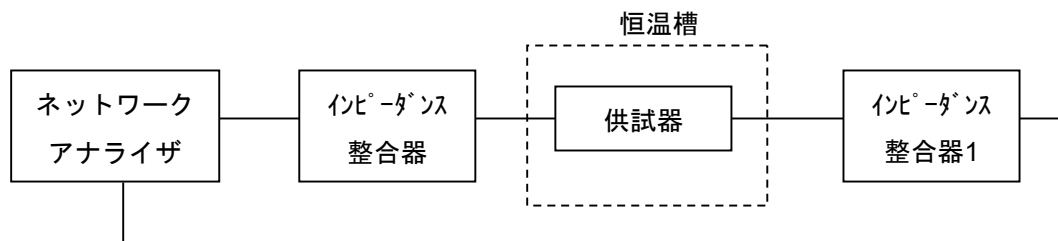
$$G_F = (G_1 - G_2) / 2 \quad (\text{dB})$$

【測定データ処理】

- ①測定値表示 (記録計)
- ②整合ロス補正
- ③様式-19-2

26. 利得安定度<試験番号: BLT TV-26>

【測定回路】



【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) CATV-1E、CATV-T1E : IN, OUT
- (b) SH-1 : IN (CS・BS-IF端子), OUT
- (c) SH・UF-1 : IN (CS・BS-IF/UV共用端子), OUT
- (d) CATV・SH-1、SH-P1 : IN (CS・BS-IF/CATV共用端子), OUT

②測定基準周波数

- (a) FM帯域 : 80MHz
- (b) UHF帯域 : 620MHz
- (c) CATV帯域 : 上り 30MHz、下り 300MHz
- (d) CS・BS-IF帯域 : 1550MHz

③入力レベル

- (a) FM/UHF : 60~70dBμV
- (b) CS・BS-IF : 60~70dBμV
- (c) CATV : 60~70dBμV

④ネットワークアナライザ出力の設定

ネットワークアナライザの出力は指定帯域を掃引し、供試器の入力レベルを供試器により指定された値とする。

⑤利得変動の測定

恒温槽の温度は+20℃、-10℃、+40℃の順に変化させる。各温度において、熱平衡状態に達した雰囲気中に、供試器を30分放置し、そのときの利得を測定する。

⑥利得変動の算出

基準温度(20℃)における利得を G_s (dB)とし、温度が-10℃のときの利得を G_3 (dB)、温度が+40℃のときの利得を G_4 (dB)とする。

基準温度から-10℃にしたときの利得変動を ΔG_1 (dB)、+40℃にしたときの利得変動を ΔG_2 (dB)としたとき、温度変化による利得変動は、次式から求める。

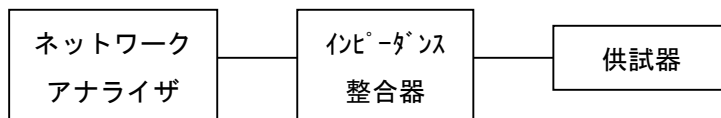
$$\begin{aligned} (-10^\circ\text{C}) \quad \Delta G_1 &= G_3 - G_s \quad (\text{dB}) \\ (+40^\circ\text{C}) \quad \Delta G_2 &= G_4 - G_s \quad (\text{dB}) \end{aligned}$$

【測定データ処理】

- ①測定値表示(記録計)
- ②整合ロス補正
- ③様式-19-2

27. 電圧定在波比(VSWR)〔ブースタ〕＜試験番号：BLT TV-27＞

【測定回路】



【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) CATV-1E、CATV-T1E
: IN, OUT
- (b) SH-1
: IN (CS・BS-IF端子), OUT
- (c) SH・UF-1
: IN (CS・BS-IF/UHF/FM共用端子), OUT
- (d) CATV・SH-1、SH-P1
: IN (CS・BS-IF/CATV共用端子), OUT

②測定基準周波数

- (a) 各ブースタ全帯域
- (b) 測定基準周波数
 - FM帯域 : 80MHz
 - UHF帯域 : 620MHz
 - CATV帯域 : 上り 30MHz、下り 300MHz
 - CS・BS-IF帯域 : 1000、3224MHz

③測定基準周波数において利得標準にセットする。

④ネットワークアナライザ出力の設定

ネットワークアナライザの出力は、指定帯域を掃引し供試器の入力レベルを供試器により指定された値とする。

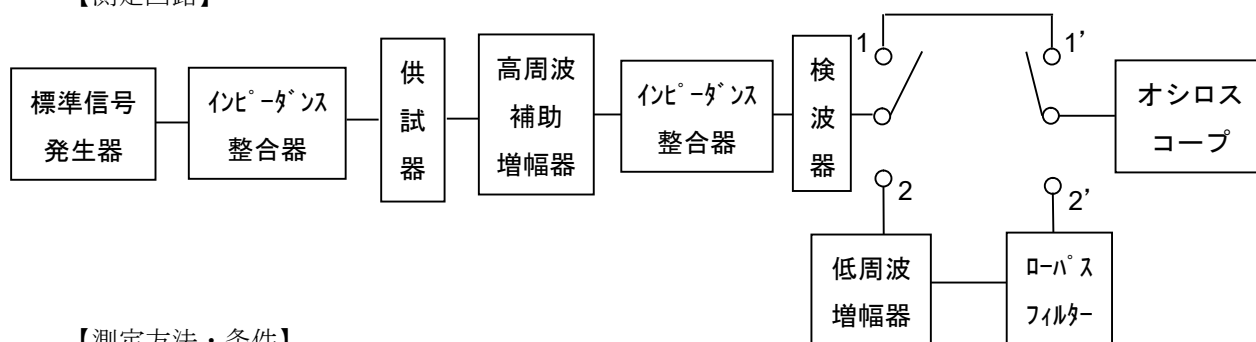
⑤ネットワークアナライザの測定手順によって測定する。

【測定データ処理】

- ①測定値表示（記録計）
- ②様式-21

28. ハム変調<試験番号: BLT TV-28>

【測定回路】



【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) CATV-1E、CATV-T1E
: IN, OUT
- (b) SH-1
: IN (CS・BS-IF端子), OUT
- (c) SH・UF-1
: IN (CS・BS-IF/UHF/FM共用端子), OUT
- (d) CATV・SH-1、SH-P1
: IN (CS・BS-IF/CATV共用端子), OUT

②測定基準周波数

- (a) FM帯域 : 80MHz
- (b) UHF帯域 : 620MHz
- (c) CATV帯域 : 上り 30MHz, 下り 300MHz
- (d) CS・BS-IF帯域
SH・UF-1、SH-1、CATV・SH-1
: 1000MHz (103dBμV出力)
: 3224MHz (113dBμV出力)
- SH-P1
: 1000MHz (92dBμV出力)
: 3224MHz (97dBμV出力)

③高周波補助増幅器および低周波増幅器の電源には、電池を使用すること。

④ローパスフィルタのカットオフ周波数は200Hzとする。

⑤電源 : 50または60Hz

⑥測定基準周波数で利得標準にセットし標準出力レベルに調整する。

⑦1-1'を接続し、標準信号発生器を1KHzの正弦波で50%振幅変調した信号にしオシロスコープ上の波形P-P値を E_0 (V)とする。

⑧次に2-2'を接続し、標準信号発生器を無変調としてオシロスコープ上の波形P-P値を E_h (V)とする。

⑨ハム変調HMは次式から求める。

$$HM = 20 \log \frac{E_h}{E_0} \quad (\text{ローパスフィルタを含む低周波増幅器の利得}) \quad (\text{dB})$$

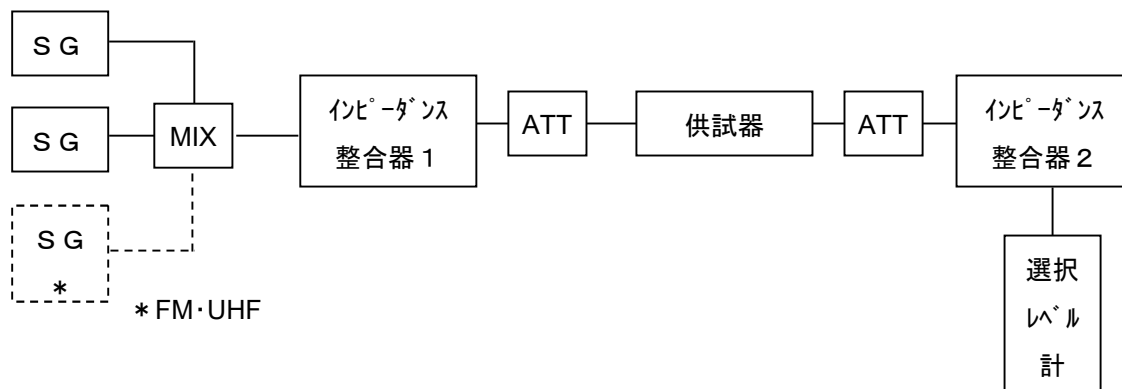
なお、検波器の出力が十分得られる場合には、高周波補助増幅器を用いなくてもよい。

【測定データ処理】

- ①測定値表示 (-dB)
- ②様式-22

29. 相互変調＜試験番号：BLT TV-29＞

【測定回路】



【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) CATV-1E、CATV-T1E
: IN, OUT
- (b) SH-1
: IN (CS・BS-IF端子), OUT
- (c) SH・UF-1
: IN (CS・BS-IF/UHF/FM共用端子)、OUT
- (d)
CATV・SH-1、SH-P1
: IN (CS・BS-IF/CATV共用端子)、OUT

②発振基準周波数 (MHz)

(a) 2次歪

【区 分】		【発振周波数】	【測定周波数】
(イ)CATV	上り	15 + 25	40
		40 - 25	15
	下り	100 + 350	450
		450 - 350	100

(b) 3次歪

	f_1	f_2	f_3	$2f_1 - f_2$	$2f_2 - f_1$
(イ)FM	80	84	—	76	88
(ロ)UHF	550	600	—	500	650
	*600	650	—	550	700
(ハ)FM/UHF	f_1	f_2	f_3	$f_3 \pm f_2 \pm f_1$	
	80	84	600	596	604
	84	596	600	80	88

③利得標準をセットする測定基準周波数

- (a) FM帯域 : 80MHz
- (b) UHF帯域 : 620MHz
- (c) CATV帯域 : 上り 30MHz、下り 300MHz

④基準周波数で利得標準にセットする。

チルト付のブースタは発振基準周波数のチルト出力に設定する。

(又は、 f_L : 35dB f_H : 40dBに設定する。)

⑤SG出力はブースタを標準利得で定格出力にセットする。

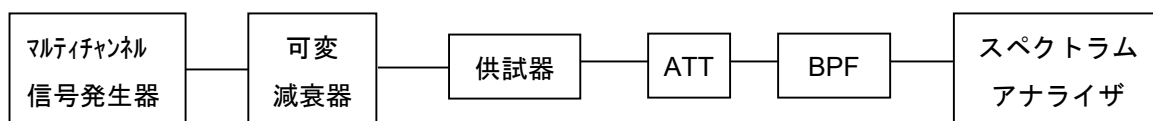
⑥2次歪、3次歪を測定。

【測定データ処理】

- ①測定値表示
- ②様式－ 2 3

30. CTB<試験番号: BLT TV-30>

【測定回路】



【測定方法・条件】

①接続端子

(a) CATV-1E、CATV-T1E

: IN、OUT

(b) CATV・SH-1

: IN (CATV)、OUT

②発振基準周波数

【発振周波数】

ch1～C60の57波 (ch2, 7, C28を除く)

ch1～U25の74波 (ch7, C28を除く)

【測定周波数】

C35

③測定基準周波数

(a) CATV帯域 : 300MHz

④基準周波数で利得標準にセットする。

⑤供試器の出力が定格レベルとなるように信号発生器の出力を調整する。

⑥測定周波数信号のみ停波させ、その周辺へ落ち込む合成歪のレベルを測定する。

⑦定格出力レベルと測定した歪のレベルよりCTBを求める。

【測定データ処理】

①測定値表示

②様式-23

* スペクトラムアナライザの設定条件

IF帯域幅 30kHz

ビデオ帯域幅 10Hz

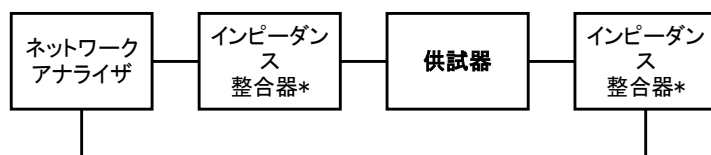
掃引幅 50kHz

垂直 10dB/Div

掃引時間 0.2sec/Div (測定器による)

3 1. 挿入損失・分配損失・結合損失・端子間結合損失・逆結合損失・通過帯域減衰量 阻止帯域減衰量<試験番号:BLT TV-31>

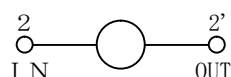
【測定回路】



*必要に応じて使用する

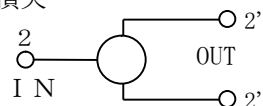
【測定項目と該当機種】

①挿入損失



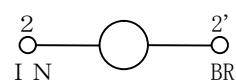
SH-C1, SH-C2, SH-C4
CS-7F-7WE, CS-77F-7WE, CS-7F-7SWE, CS-77F-7SWE
SH-7F, SH-77F,
SH-7FS (1), SH-7FS (3), SH-77FS

②分配損失



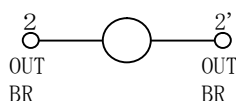
SH-D2, SH-D4, SH-D6, SH-D8

③結合損失



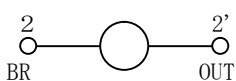
SH-C1, SH-C2, SH-C4
CS-7F-7WE, CS-7F-RWE, CS-77F-7WE, CS-77F-RWE
CS-7F-7SWE, CS-7F-RSWE, CS-77F-7SWE, CS-77F-RSWE

④端子間結合損失



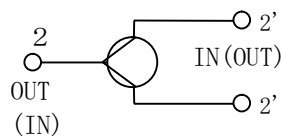
SH-D2, SH-D4, SH-D6, SH-D8
SH-C2, SH-C4
CS-77F-7WE, CS-77F-RWE, CS-77F-7SWE, CS-77F-RSWE
SH-77F, SH-77FS

⑤逆結合損失



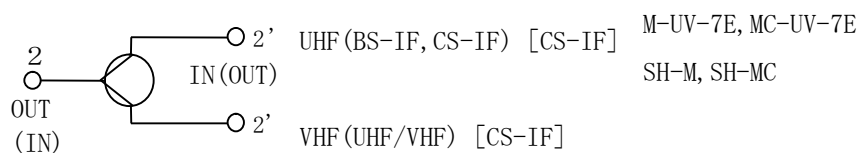
SH-C1, SH-C2, SH-C4
CS-7F-7WE, CS-77F-7WE, CS-7F-7SWE, CS-77F-7SWE

⑥通過帯域減衰量



M-UV-7E, SH-M
MC-UV-7E,
SH-MC

⑦阻止帯域減衰量



【測定方法・条件】

- ①測定周波数範囲

10～2602MHz	連続（2602MHz対応機器）
10～3224MHz	連続（3224MHz対応機器）
- ②S1～S1'とS2～S2'との比較値を測定
- ③ネットワークアナライザ出力の設定
ネットワークアナライザの出力は、指定帯域を掃引し供試器の入力レベルを60～120 dBμVの範囲とする。
- ④特性の測定
 - ・ネットワークアナライザにより、指定の特性を測定する。
 - ・全端子接栓型の機器は、各測定項目（①, ②, ③, ④, ⑤）に於いては全端子の組み合わせについて測定する。（空き端子には終端抵抗を接続する。）
 - ・上り信号カット機能付き直列ユニット、テレビ端子の特性はスイッチを双方向にした場合と片方向にした場合を測定し、端子間結合損失は2端子とも双方向にした状態で測定する。また片方向の場合は、10～100MHzの範囲も拡大して測定する。

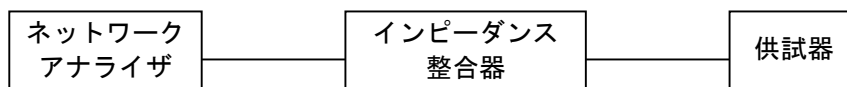
【測定データ処理】

- ①測定値表示は記録計
- ②基準ラインはS1～S1'の値で値は0とする。
- ③規格値ラインを表示する。
- ④目盛表示（最小値から最大値）

周波数幅：	0～2650MHz	連続（2602MHz対応機器）
	0～3250MHz	連続（3224MHz対応機器）
測定値：	(a) 0～10dB	挿入損失・分配損失・通過帯域減衰量
	(b) 0～20dB	結合損失・分配損失
	(c) 0～50dB	端子間結合損失・逆結合損失・阻止帯域減衰量
- ⑤上り信号カット機能付き直列ユニット、テレビ端子のスイッチ片方向測定時の表示は、周波数幅10～100MHzの範囲も拡大して表示する。
- ⑥様式－24
様式－25

3 2. 電圧定在波比(VSWR) [ブースタ以外の受信機器] <試験番号: BLT TV-32>

【測定回路】



M-UV-7E, SH-M, MC-UV-7E, SH-MC

SH-D2, SH-D4, SH-D6, SH-D8

SH-C1, SH-C2, SH-C4

CS-7F-7WE, CS-7F-RWE, CS-77F-7WE, CS-77F-RWE, CS-7F-7SWE, CS-7F-RSWE, CS-77F-7SWE, CS-77F-RSWE

SH-7F, SH-77F, SH-7FS (1), SH-7FS (3), SH-77FS

【測定方法・条件】

- ①測定周波数範囲

1 0 ～ 2 6 0 2 MHz	連続 (2 6 0 2 MHz 対応機器)
1 0 ～ 3 2 2 4 MHz	連続 (3 2 2 4 MHz 対応機器)
- ②ネットワークアナライザ出力の設定

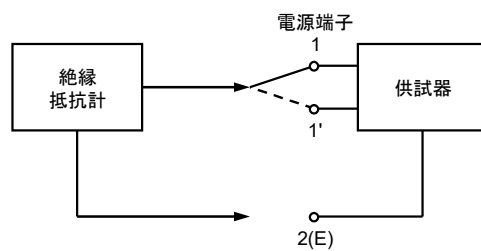
ネットワークアナライザの出力は、指定帯域を掃引し供試器の入力レベルを 6 0 ～ 1 2 0 d B μ V の範囲とする。
- ③特性の測定
 - ・ネットワークアナライザにより、全ての対象端子を測定する。
 - *但し上り信号カット機能付直列ユニット、テレビ端子でスイッチを片方向にした場合には、アウトレット端子 (テレビ端子) 側において、1 0 ～ 5 5 MHz の帯域は除く。
 - ・空き端子には終端抵抗を接続する。
 - ・上り信号カット機能付直列ユニット、テレビ端子の特性はスイッチを双方向 (2 端子型は両方とも) にした場合と片方向 (2 端子型は両方とも) にした場合を測定する。

【測定データ処理】

- ①測定値表示 (記録計)
- ②基準ラインは 1 . 0
- ③規格値ラインを表示する。
- ④目盛表示 (最小値から最大値)

周波数幅 : 0 ～ 2 6 5 0 MHz	連続 (2 6 0 2 MHz 対応機器)
0 ～ 3 2 5 0 MHz	連続 (3 2 2 4 MHz 対応機器)
- ⑤様式 - 2 4

3 3. 絶縁抵抗試験 [ブースタ] <試験番号: BLT TV-33>

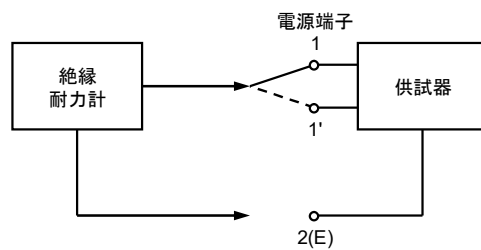
【測定回路】**【測定方法・条件】**

- ① 測定電圧 DC500V
- ② 測定端子 電源端子の AC プラグのそれぞれの片端子と筐体間
- ③ 測定手順 DC500V 絶縁抵抗計を用い、1-2 及び 1'-2 間の絶縁抵抗を測定する。

【測定データ処理】

- ① 絶縁抵抗値が $1\text{ M}\Omega$ 以上得られていること。
- ② 様式-26

3 4. 絶縁耐力試験 [ブースタ] <試験番号: BLT TV-34>

【測定回路】**【測定方法・条件】**

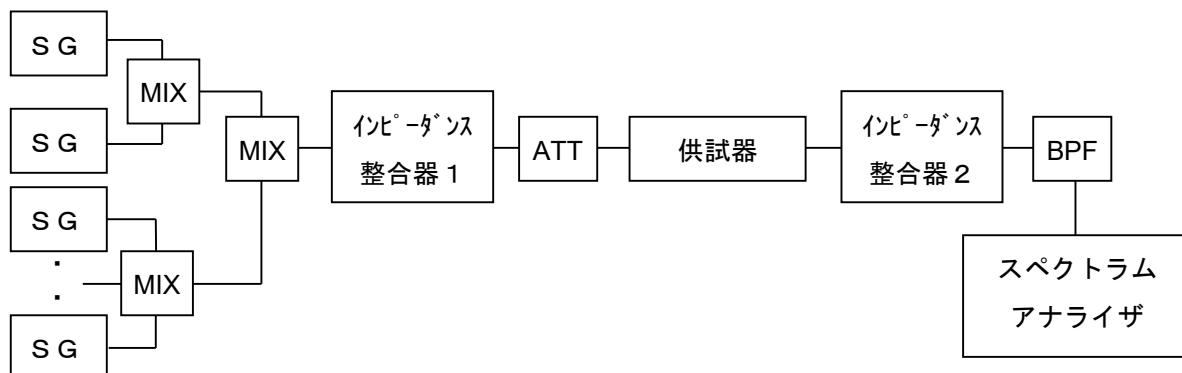
- ① 印加電圧 AC1000V 1回
- ② 印加時間 1分間
- ③ 測定端子 ACプラグの端子と筐体間
- ④ 測定手順 絶縁耐力検査装置を用い、1-2及び1'-2間の絶縁耐力を測定する。

【測定データ処理】

- ① 電流の漏れ値が10mAを超えないこと
- ② 様式-26

3 5 . C I N < 試験番号 : BLT TV-35 >

【測定回路】



①信号条件

- (a) SGは変調波50波 (TC8PSK/16APSK) とする。
- (b) 供試器に入力する信号のCN比は測定に支障がない値とすること。

【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) SH・UF-1 : IN (CS・BS-IF/UHF/FM共用端子)、OUT
- (b) SH-1 : IN (CS・BS-IF端子)、OUT
- (c) CATV・SH-1、SH-P1 : IN (CS・BS-IF/CATV共用端子)、OUT

②SG出力チャンネル

- (a) BS右旋 : BS1～BS23
- (b) CS右旋 : ND26、ND2～ND24
- (c) BS左旋 : BS2～BS24
- (d) CS左旋 : ND25、ND1～ND23

③測定チャンネル

- (a) BS右旋 : BS1
- (b) CS右旋 : ND24
- (c) BS左旋 : BS24
- (d) CS左旋 : ND23

⑥利得標準にセットする。

1000MHzと3224MHzにおいて標準利得に設定する。

- ⑥ SGの混合出力をフラットに設定し、ブースタに入力する。ブースタは標準利得の状態で定格出力となるように入力レベルをセットする。
定格出力は、スペクトラムアナライザのチャンネルパワー測定にて、ND23のレベルを確認する。

⑦CINを測定する。

測定チャンネルのチャンネルパワーを測定し、次に測定チャンネルおよび両側隣接チャンネル (下限および上限チャンネルは片側隣接のみ) をOFFし、測定チャンネルの帯域内ノイズをパワー測定し、その相対値を求める。測定チャンネルの電力帯域幅は、TC8PSK : 28.86MHz、16APSK : 33.7561MHzとする。

【測定データ処理】

- ①測定値表示
- ②様式-27

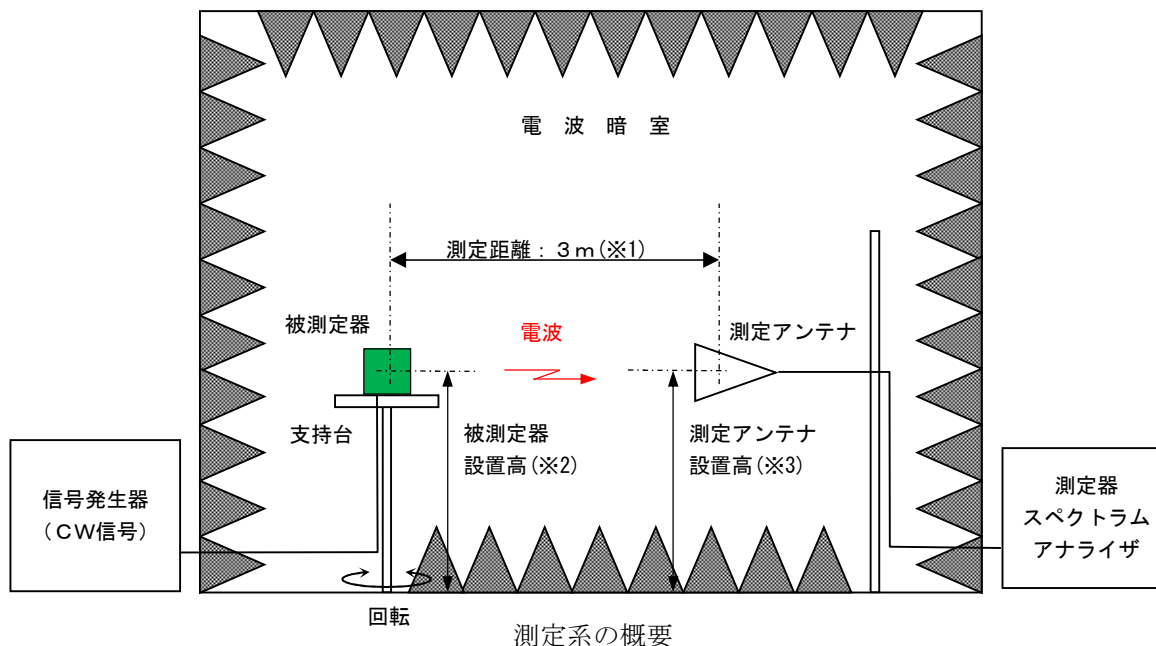
*スペクトラムアナライザの設定条件

周波数スパン	50MHz
分解能帯域幅	300kHz
ビデオ帯域幅	3MHz
検波モード	SAMPLE
アベレージ	30回以上

3 6. 漏洩電界強度<試験番号：BLT TV-36>

【測定回路】

平成18年総務省告示第173号の要件を満たした電波暗室において、下図のごとく接続する。



* 測定対象周波数が70MHz～770MHz、および1000MHz～3224MHzにおいて5面もしくは6面電波暗室とするが、5面電波暗室の場合には、被測定機器と測定アンテナ間の床面には電波吸収体を敷くこととする。この場合、CISPR13などに準拠した測定サイトを使用することが望ましい。

※1：被測定器の中心から測定アンテナの基準点までの距離

※2：床面から供試機中心までの距離

※3：床面から測定アンテナの基準点までの距離

【測定方法・条件】

①70MHz～770MHzの周波数範囲における測定

a) 測定間距離

3m（被測定器中心から測定用アンテナの基準点までの距離）

なお、測定アンテナの基準点は以下とする。

- ・ダイポールアンテナ、バイコニカルアンテナ：バランの先端
- ・ログペリオディックダイポールアレイアンテナ：測定アンテナの製造業者が表示する位相中心点、もしくはアンテナ校正メーカーが指示する基準点

b) 機器設置高

(b-1) 被測定器

床面から被測定器中心までの距離とし、測定サイトの電気特性を考慮し、測定に適した高さに設置するものとする。

(b-2) 測定アンテナ

床面からアンテナ基準点までの距離とし、設置された被測定器の中心を基準として、-0.5m～+2.5m。

（設置された被測定器の中心が1.5mの場合には、1m～4m）

c) 測定周波数

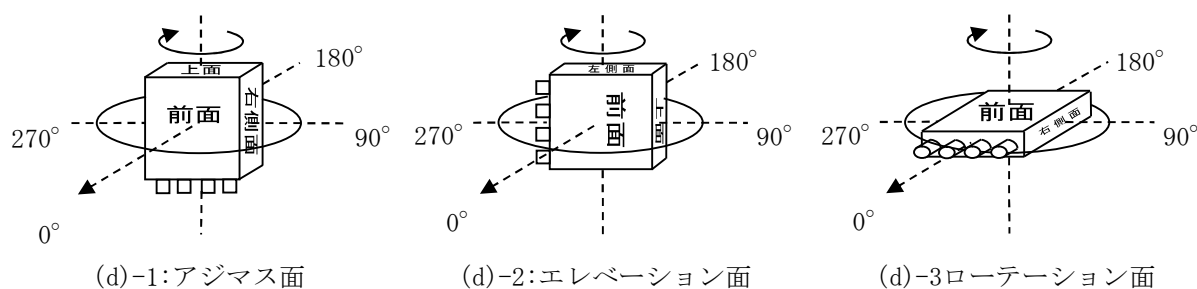
70MHz～770MHzの周波数範囲内における各機器の適用数波数範囲とする。

なお、測定周波数ステップは以下とする。

- ・ 70MHz ～ 95MHzの周波数範囲における測定 : 1MHz
- ・ 95MHz ～ 770MHzの周波数範囲における測定 : 6MHz

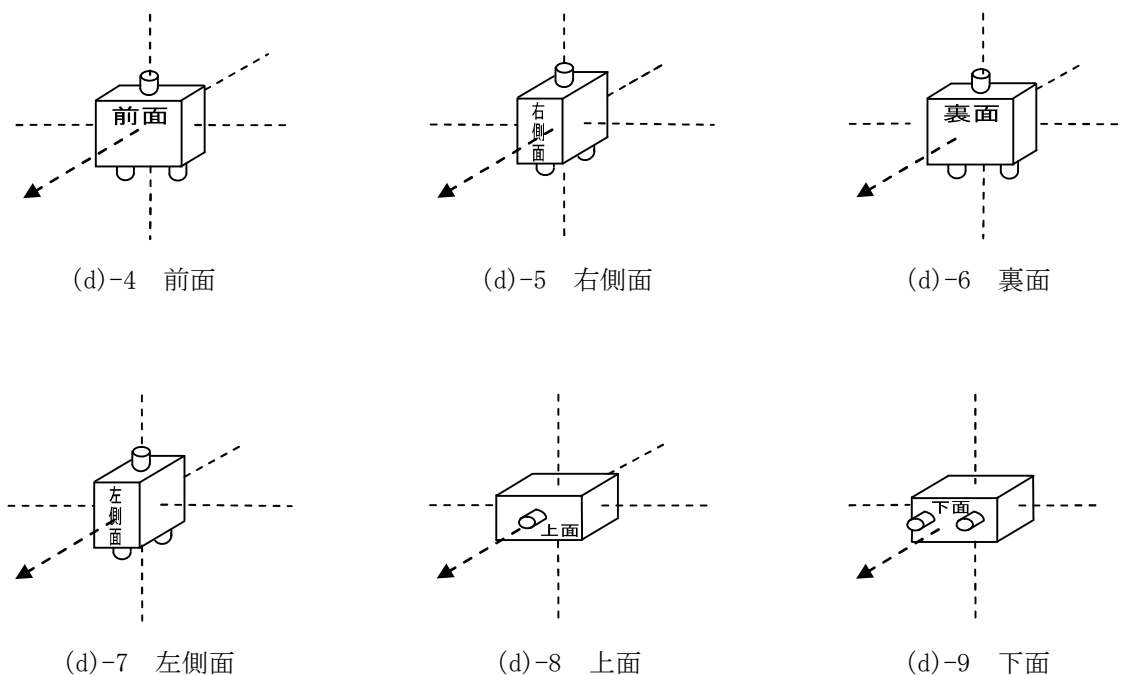
d) 測定方向

(d-1) ブースタ : 図 (d)-1～図 (d)-3に示すように設置し、それぞれの面 (3面) において測定を行う。測定角度ステップは15度とする。なお、測定面の呼称は通常使用での設置状態を原則とする。



測定時の被測定器設置方法 (ブースタ)

(d-2) 受動機器 : 図 (d)-4～図 (d)-9に示すように設置し、機器の6面において測定を行う。なお、測定面の呼称は通常使用での設置状態を原則とする。



測定時の被測定器設置方法 (受動機器)

e)測定偏波

水平偏波、垂直偏波

f)測定アンテナ

測定する周波数に共振する半波長共振型ダイポールアンテナ。もしくは、アンテナファクターが既知のバイコンカルアンテナ、ログペリオディックダイポールアレイアンテナとする。

g)測定入力レベル

(g-1) ブースタ：標準利得に設定し、標準入力レベルを入力する

(g-2) 受動機器：混合器・分岐器・分配器 周波数に係らず 113dB μ V
直列ユニット・テレビ端子 周波数に係らず 100dB μ V

h) 次の手順にて漏洩電界強度を測定する。

(h-1) 事前に各測定周波数における測定アンテナからスペクトラムアナライザまでの給電線損失 L_r を測定する。なお、増幅器やインピーダンス変換器等を中継する場合には、その利得・損失も L_r に含むものとする。

(h-2) 事前に測定環境における各測定周波数の潜在電界レベル E_0 を測定し、(h-5) に掲げる式を用いて潜在電界値を求め、測定値に影響を与えない環境であることを確認する。

(h-3) 信号発生器の出力信号を無変調信号波(CW)とし、被測定器への入力レベルが規定のレベルになるように、信号発生器の出力レベルを調整して被測定器に加える。

(h-4) 測定アンテナを垂直偏波とし、設置高を被測定器の中心と同じにする。

(h-5) 測定アンテナにて受信した漏洩電波のレベル E_1 をスペクトラムアナライザで測定し、3m離れたところにおける漏洩電界強度 E を次の式によって求める。
なお、終端値での測定値を適用する場合には、開放値へ換算する 6dB の加算を行うものとする。

$$E \text{ (dB } \mu\text{V/m)} \\ = E_1 \text{ (dB } \mu\text{V)} + AF \text{ (dB)} + L_r \text{ (dB)} + \text{測定距離補正值 (dB)} \\ E_1: \text{漏洩電波のレベル、} AF: \text{アンテナファクター、} L_r: \text{給電線損失}$$

スペクトラムアナライザの分解能帯域幅は 100kHz もしくは 300kHz とする。
また、入力レベルを規定値以上として測定した場合は、規定入力レベルとの差を補正し、漏洩電界強度値 (dB μ V/m) を求める。

(h-6) ブースタにおいては各面・所定の測定角度ステップ、受動機器においては各面において漏洩電界強度測定を行い、測定周波数範囲内の最大値を得る面および角度を求めて固定する。

(h-7) 信号発生器の出力周波数を漏洩電界強度の最大値が得られる周波数とし、測定アンテナを被測定器の設置高に対して、-0.5m～+2.5m まで変化させて最大値を求める。

(h-8) 漏洩電界強度の最大値が得られる測定アンテナの設置高において、測定距離が 3m でない場合には、＜参考＞に記載の補正式によって補正し、3m における漏洩電界強度値を求める。

(h-9) 測定アンテナを水平偏波として (h-4) から (h-8) を繰り返し、垂直偏波と水平偏波の測定結果を比較し、大きい値を漏洩電界強度の試験結果とする。

②1000MHz～3224MHzの周波数範囲における測定

a)測定間距離

3m（被測定器中心から測定アンテナの基準点までの距離）

なお、測定アンテナの基準点は以下とする。

- ・ホーンアンテナ：開口面の中心

b) 機器設置高

(b-1) 被測定器

①と同様。

(b-2) 測定アンテナ

床面からアンテナ基準点までの距離とし、被測定器の中心と同じとする。

c) 測定周波数

1000MHz～3224MHzの周波数範囲における各機器の適用周波数範囲とする。

なお、測定周波数ステップは以下とする。

- ・ 1000MHz ～ 3224MHzの周波数範囲における測定 : 40MHz

d) 測定方向

①と同様。

e) 測定偏波

①と同様。

f) 測定用アンテナ

アンテナファクターが既知のホーンアンテナとする。

g) 測定入力レベル

(g-1) ブースタ：①と同様。

(g-2) 受動機器：①と同様。

h) 次の手順にて漏洩電界強度を測定する。

(h-1) 事前に各測定周波数における測定アンテナからスペクトラムアナライザまでの給電線損失 L_r を測定する。なお、増幅器やインピーダンス変換器等を中継する場合には、その利得・損失も L_r に含むものとする。

(h-2) 事前に測定環境における各測定周波数の潜在電界レベル E_0 を測定し、(h-5) に掲げる式を用いて潜在電界値を求め、測定値に影響を与えない環境であることを確認する。

(h-3) 信号発生器の出力信号を無変調信号波(CW)とし、被測定器への入力レベルが規定のレベルになるように、信号発生器の出力レベルを調整して被測定器に加える。

(h-4) 測定アンテナを垂直偏波とし、設置高を被測定器の中心と同じにする。

(h-5) 測定アンテナにて受信した漏洩電波のレベル E_1 をスペクトラムアナライザで測定し、3m離れたところにおける漏洩電界強度 E を次の式によって求める。
 なお、終端値での測定値を適用する場合には、開放値へ換算する 6dB の加算を行うものとする。

$$E \text{ (dB } \mu\text{V/m)} = E1 \text{ (dB } \mu\text{V)} + AF \text{ (dB)} + L_r \text{ (dB)} + \text{測定距離補正值 (dB)}$$

$E1$: 漏洩電波のレベル、 AF : アンテナファクター、 L_r : 給電線損失

スペクトラムアナライザの分解能帯域幅は 100kHz もしくは 300kHz とする。
また、入力レベルを規定値以上として測定した場合は、規定入力レベルとの差を補正し、漏洩電界強度値 (dB $\mu\text{V/m}$) を求める。

(h-6) ブースタにおいては各面・所定の測定角度ステップ、受動機器においては各面において漏洩電界強度測定を行い、測定周波数範囲内の最大値を求める。

(h-7) 測定間距離が 3m でない場合には、＜参考＞に記載の補正式によって補正し、3m における漏洩電界強度値を求める。

(h-8) 測定アンテナを水平偏波として (h-4) から (h-7) を繰り返し、垂直偏波と水平偏波の測定結果を比較し、大きい値を漏洩電界強度の試験結果とする。

①、②共通注意事項

1. コネクタや終端抵抗の締め付けトルクはメーカー指定値とする。但し、メーカー指定値がない場合は $2\text{N}\cdot\text{m}$ とする。
2. 信号発生器を掃引させ測定する場合、信号発生器の掃引時間は、スぺアナの掃引時間より遅くし、各周波数で取り逃しが無いように信号発生器とスぺアナの設定をすること。
3. ブースタでパス機能がある周波数帯については、受動機器の規定を適用する。

【測定データ処理】

①測定値表示

a) 70MHz～770MHzの周波数範囲における測定

- ・ブースタ：測定アンテナ設置高を変化させた場合を含め、各測定面におけるそれぞれの最大値を表示する。
- ・受動機器：6面測定での最大値、および測定アンテナ設置高を変化させたときの最大値を表示する。

b) 1000MHz～3224MHzの周波数範囲における測定

- ・ブースタ：各測定面におけるそれぞれの最大値を表示する
- ・受動機器：6面測定での最大値を表示する

②様式－28－1

様式－28－2

＜参考＞3m 以上の距離で測定した場合の、3m での測定値への換算

3m 以上で測定する場合は実測定距離における測定結果から延長距離分を補正し、基本距離 3m における測定結果に換算する。

補正值 (dB) = 実測定距離の自由空間損失 - 3m の自由空間損失

$$\begin{aligned} &= 20\log \frac{4\pi d}{\lambda} - 20\log \frac{4\pi d_0}{\lambda} \\ &= 20\log \frac{4\pi d}{\lambda} - 20\log \frac{12\pi}{\lambda} \\ &= 20\log \frac{d}{3} \end{aligned}$$

※ λ = 波長 (m) $d_0 = 3(\text{m})$ d = 測定距離 (m)

測定距離 (m)	3	4	5	6	7	8	9	10
補正值 (dB)	0.0	2.5	4.4	6.0	7.4	8.5	9.5	10.5

表1 測定距離による補正值

(4) その他

●参考試験〔テレビ端子〕

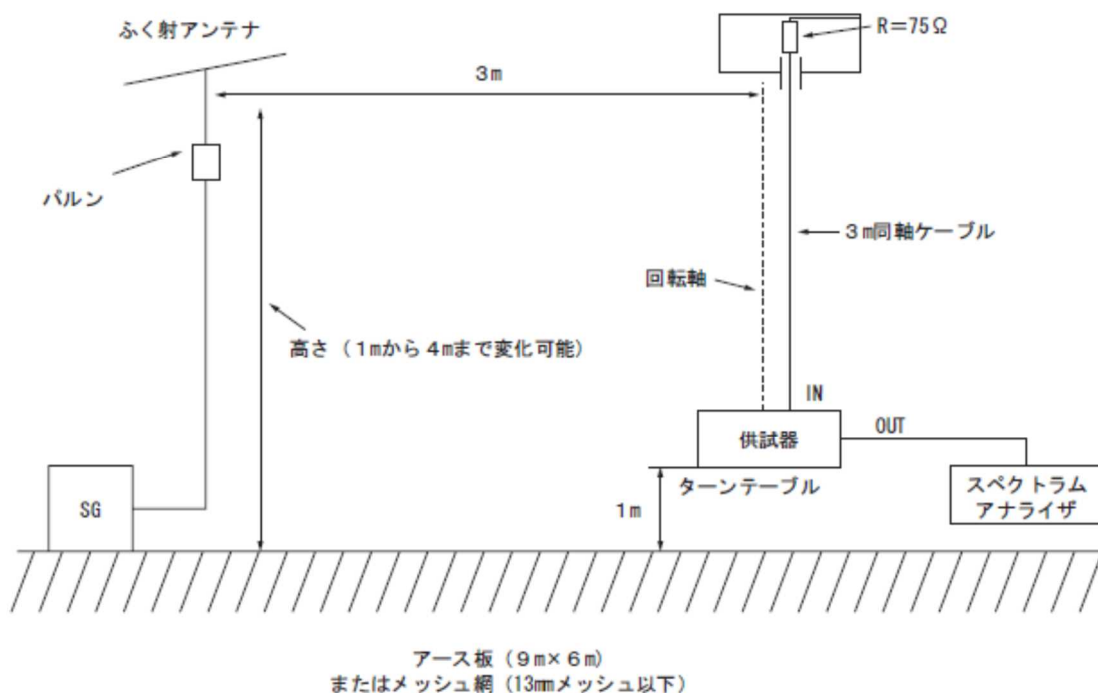
1)イミュニティ

住戸内では情報処理機器の普及が進んでいるが、電波雑音を発射する機器もあり、条件が重なりとテレビ受信に影響を与える場合がある。今後、テレビ受信システムの妨害排除能力に対する要求が高まると考えられる。共同受信システムに対する妨害波の影響を評価する場合の一事例として示した。

3 7.イミュニティ [参考試験]

【測定回路】

図1 測定サイト



【測定方法・条件】

①接続端子

- (a) SH-7F、SH-77F : IN

(注) OUTの空き端子には75Ωの終端抵抗を接続すること。

供試器は測定中に動かないように絶縁板などで固定すること。

- ②測定周波数は50、200、600MHzとする。
- ③ふく射アンテナは水平にセットして2.5mの高さに合わせる。
- ④SGを適当な内部変調にして、スペクトラムアナライザのレベルがノイズに影響されないようにSGの出力を調整する。
- ⑤ふく射アンテナの高さを1mから4m (500MHzでは2.5mから4m) の範囲で可変してかつ、ターンテーブルを回転して、スペクトラムアナライザのレベルが最大になるようにする。
- ⑥スペクトラムアナライザのレベルが読みやすい値V_IになるようにSGの出力を調整して、その時のSGの出力をP₀とする。
- ⑦次にシールドルーム内でのSGの出力をスペクトラムアナライザの入力に接続する。接続には前の測定でふく射アンテナとの結合に使ったものか、それと同等のケーブルを使用する。
- ⑧前と同じスペクトラムアナライザのレベルV_Iが得られるようにSGの出力を調整して、その値をP_Iとする。

⑨イミュニティI_mを次の式から求める。

$$I_m \text{ (dB)} = P_o \text{ (dB)} - P_I \text{ (dB)} - K \text{ (dB)}$$

(注) Kは補正係数で図2に示す。

上記の式は次のように導かれる。

ふく射アンテナに供給される電力P₀ (W) と供試設置場所の電界E₀ (V/m) との関係は比例定数をK₀としたとき次式で与えられる。

$$E_o = K_o \sqrt{P_o} \dots\dots\dots (1)$$

これをデジベルで表すと

$$E_o (dB) = P_o (dB) + K_o (dB) \dots\dots\dots (2)$$

但し、 $E_o (dB) = 20 \log_{10} E_o$ 、 $P_o (dB) = 10 \log_{10} P_o$ 、 $K_o (dB) = 10 \log_{10} K_o$ となる。また、供試器入力 P_1 (W) と、半波長ダイポールでの電界強度 E_1 (V/m) との関係はアンテナ入力インピーダンスを R として次式で表される。

$$E_1 (dB) = P_1 (dB) - [20 \log_{10} \frac{\pi}{\lambda} + 10 \log_{10} R - K_o] (dB) \dots\dots (3)$$

但し、 $E_1 (dB) = 20 \log_{10} E_1$ 、 $P_1 (dB) = 10 \log_{10} P_1$

妨害排除能力 I_m は定義により、 $E_o (dB)$ と $E_1 (dB)$ の差として次式で与えられる。

$$\begin{aligned} I_m (dB) &= E_o (dB) - E_1 (dB) \\ &= P_o (dB) - P_1 - [20 \log_{10} \frac{\pi}{\lambda} + 10 \log_{10} R - K_o] (dB) \\ &\dots\dots\dots (4) \\ &= P_o (dB) - P_1 (dB) - K \dots\dots\dots (5) \end{aligned}$$

$$\text{但し、} K = [20 \log_{10} \frac{\pi}{\lambda} + 10 \log_{10} R - K_o] (dB)$$

尚、(4) 式はバルンの損失を考慮していない。

⑩ ふく射アンテナを垂直にセットして上記を繰り返す。垂直の測定の場合は K の 3 dB を加える。

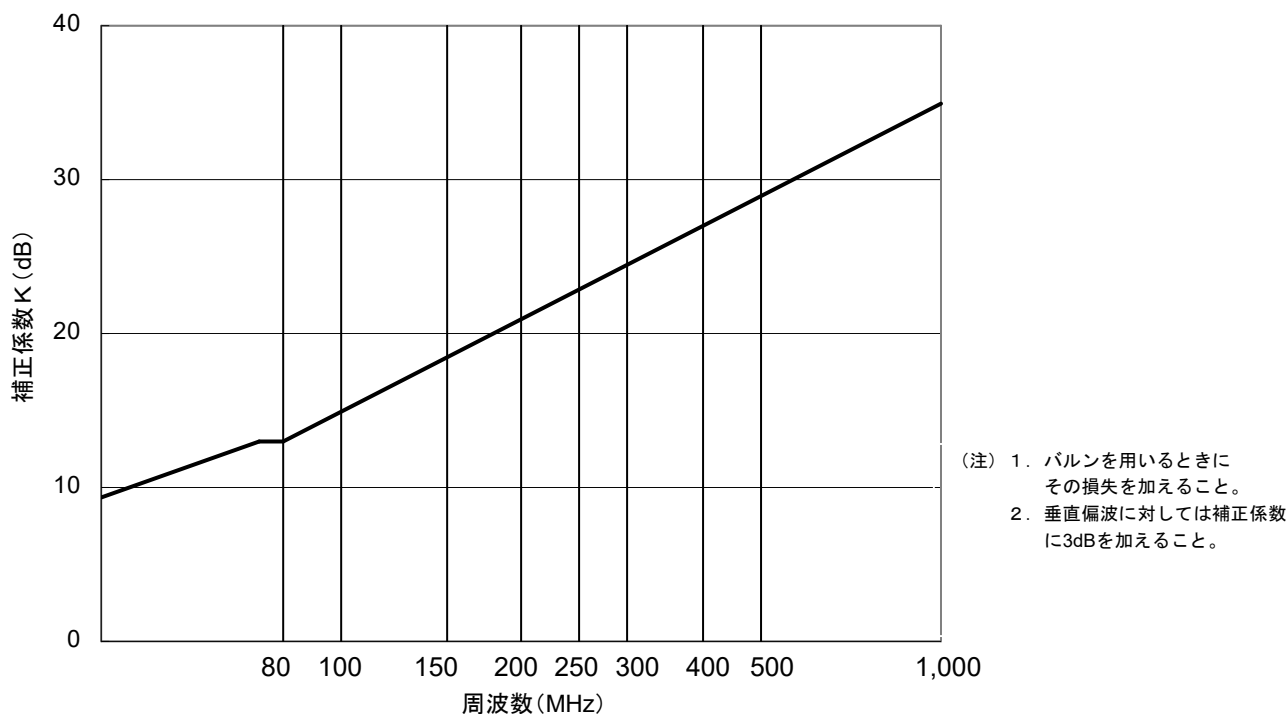


図2 補正係数

【測定方法・条件】

① 測定値打点

付属資料

テレビ共同受信機器(同軸伝送)
試験成績書様式集

地上放送用アンテナ性能試験成績表

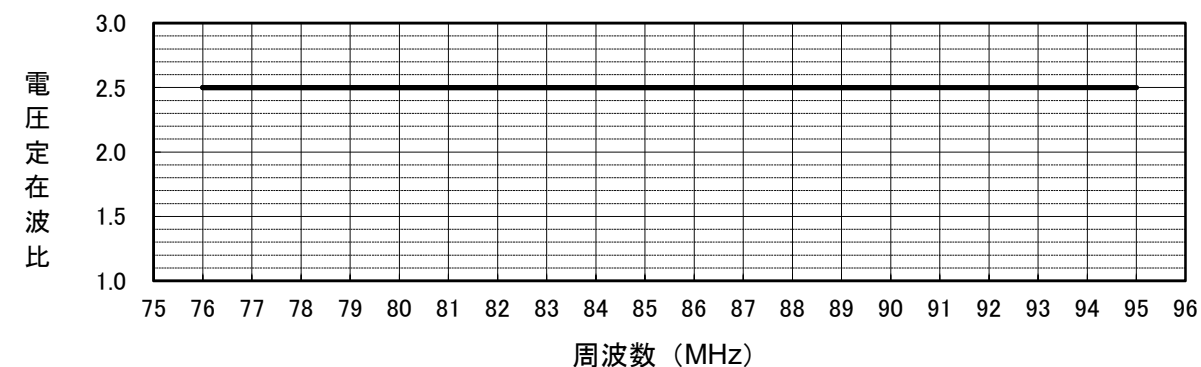
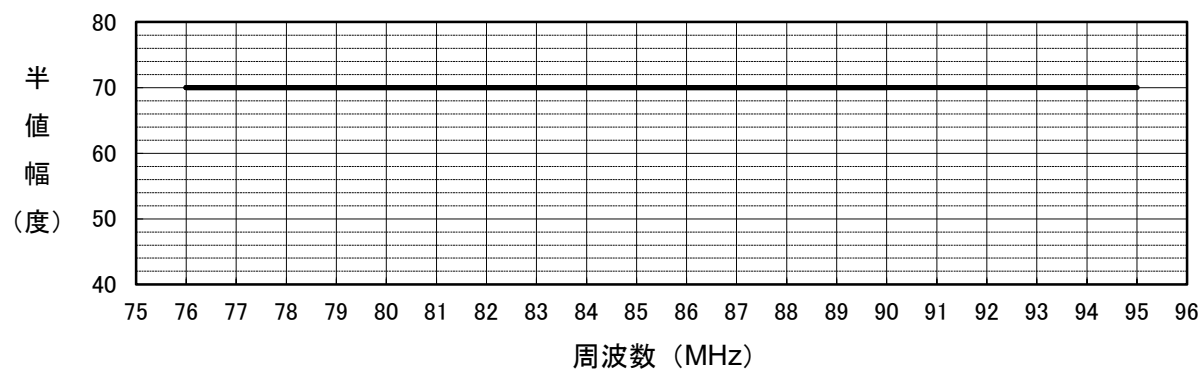
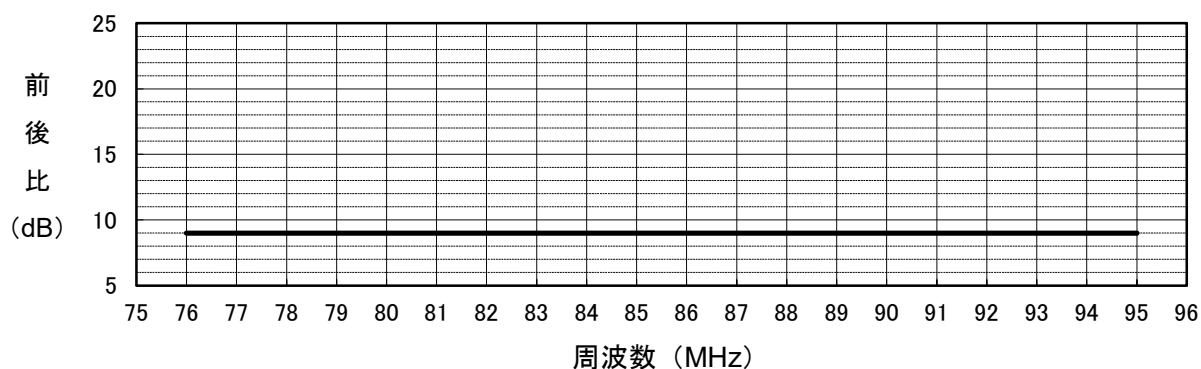
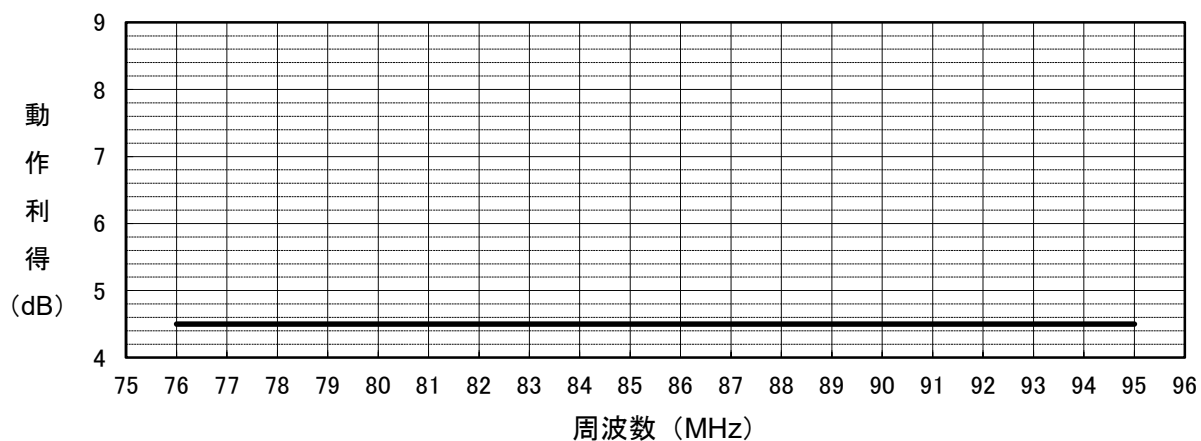
(FM用)
76～95MHz

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：



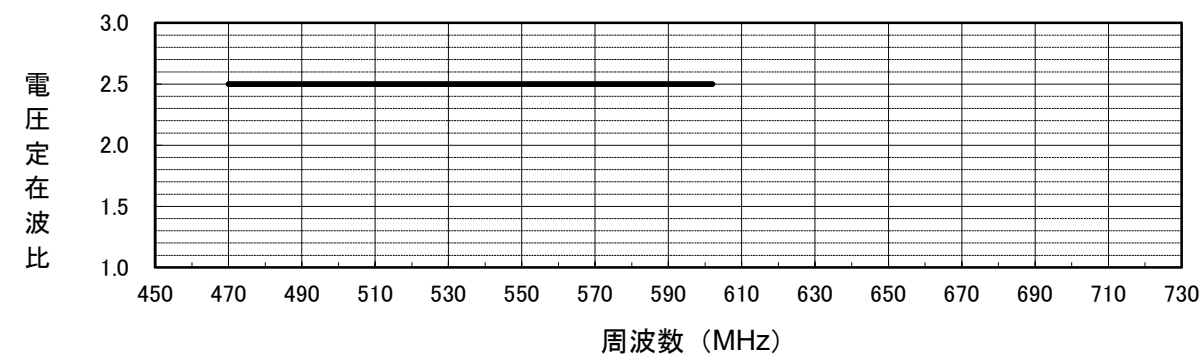
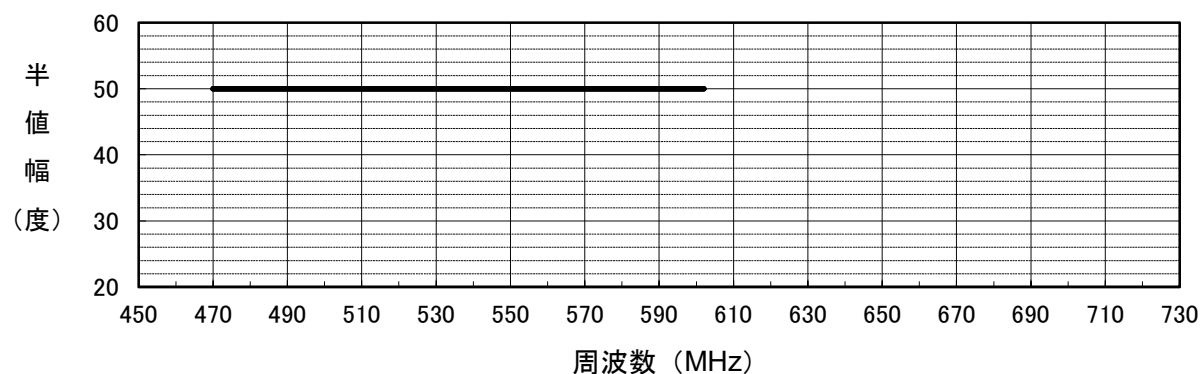
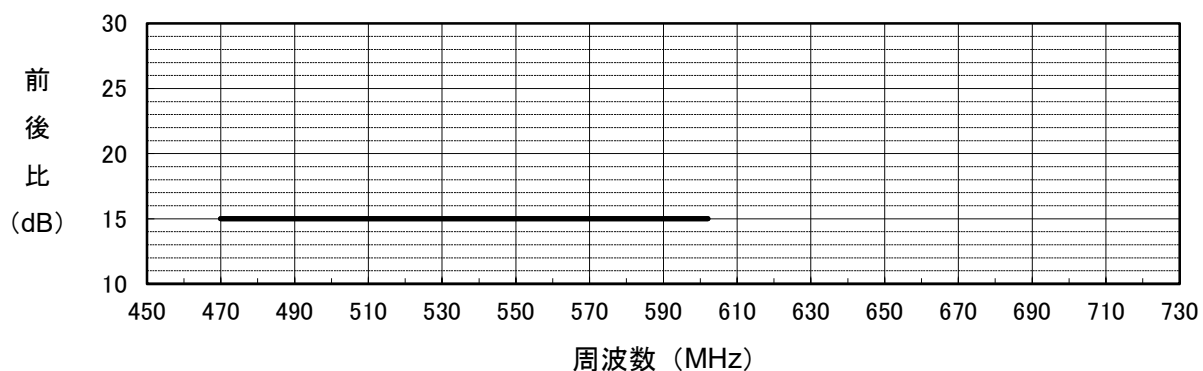
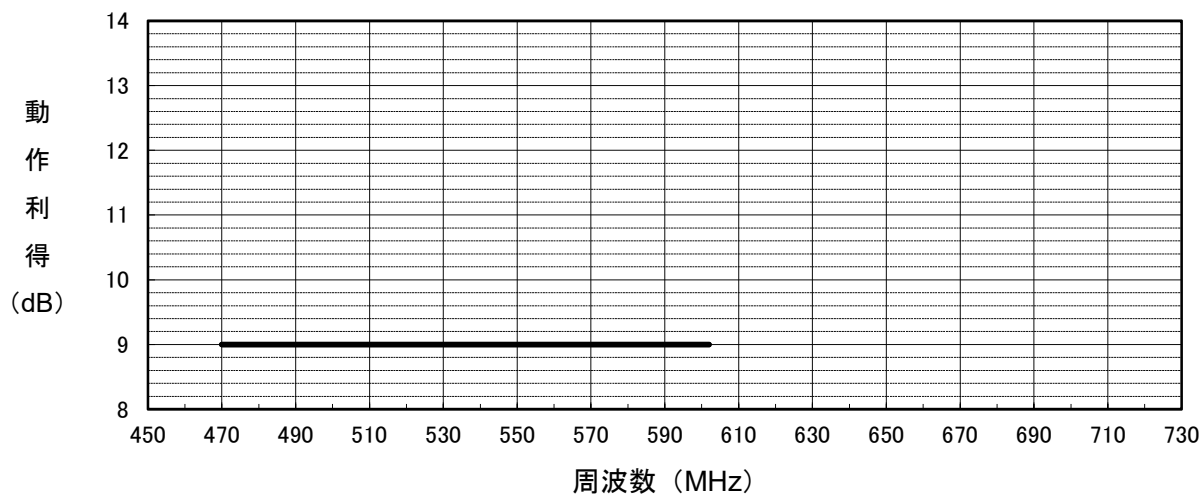
地上放送用アンテナ性能試験成績表 (UHF 低域用)

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：



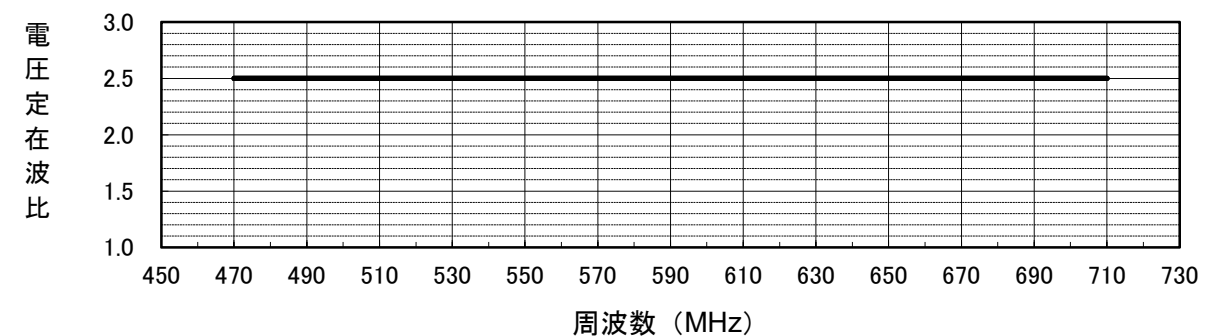
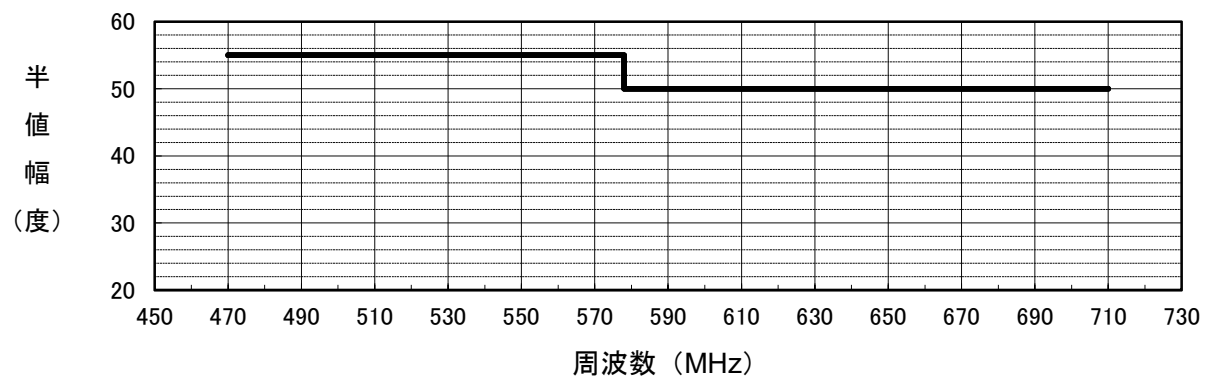
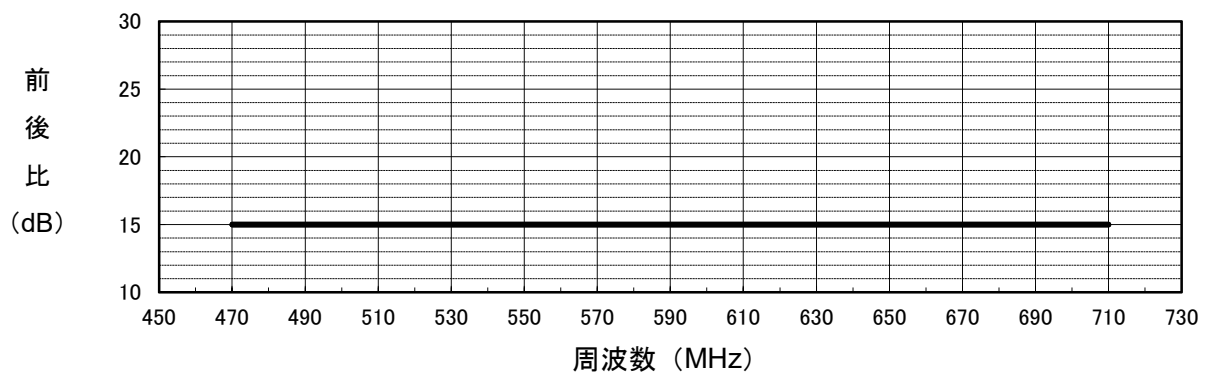
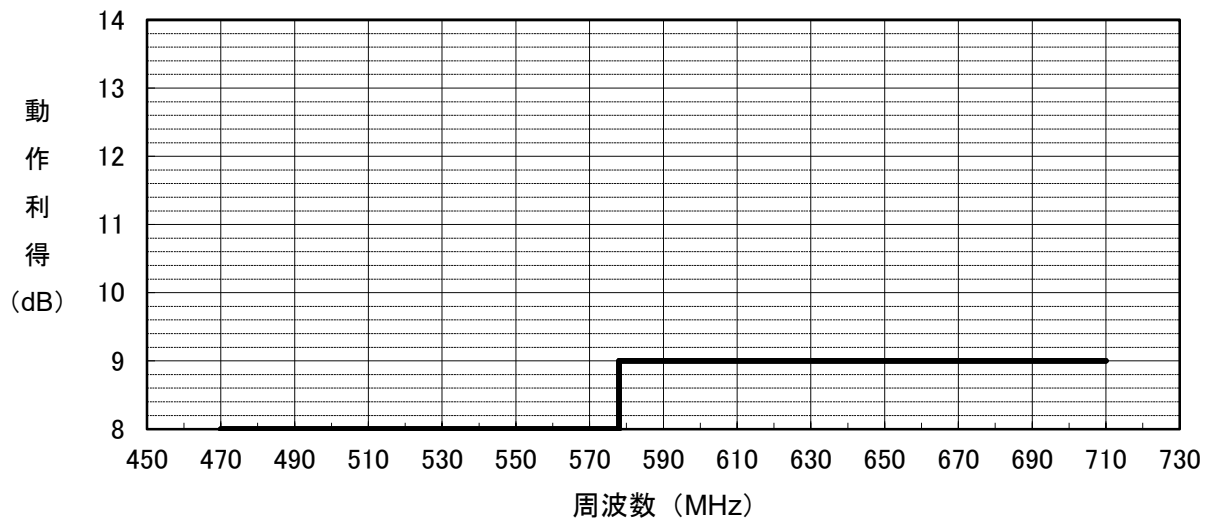
地上放送用アンテナ性能試験成績表 (UHF 全帯域用)

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：



地上放送用アンテナ荷重試験成績表 (安全性)

B L 型式：下表

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：下表

B L 型式	メーカー型名	反射 素子	アーム		備 考
			前	後	
VS－FMW					
VS－FMWS					
ULN－20					
ULN－20S					
UWN－20					
UWN－20S					

- (注) 1. 測定機器のみ結果を記入。
 2. ○は良、×は水平基準より10度以内に復元せず。

衛星放送用アンテナ性能試験成績表 (アンテナ利得)

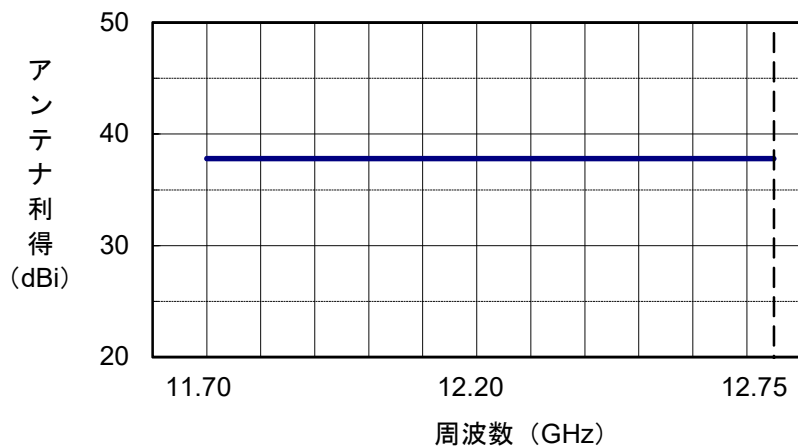
B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

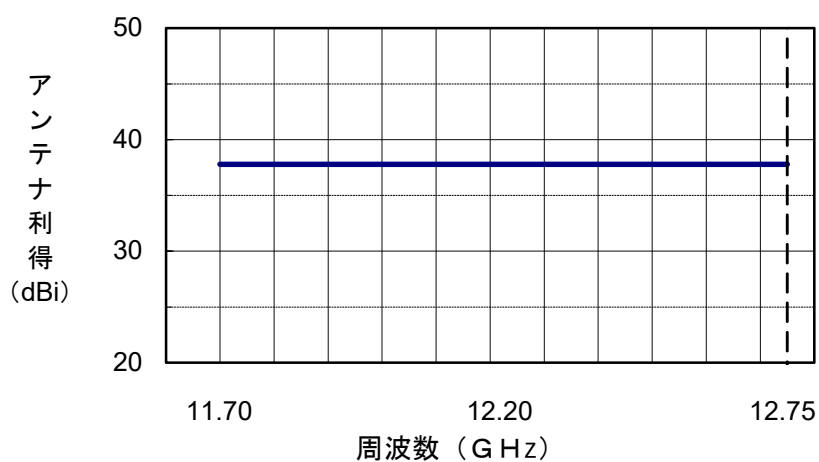
メーカー型名：

<右旋偏波>



試験周波数 (GHz)	11.70	11.85	12.00	12.20	12.50	12.75
アンテナ利得 (dBi)						

<左旋偏波>



試験周波数 (GHz)	11.70	11.85	12.00	12.20	12.50	12.75
アンテナ利得 (dBi)						

様式－ 7

衛星放送用アンテナ性能試験成績表 (指向性±180度)

BL型式：

測定年月：平成 年 月

会社名：

メーカー型名：

種類：

測定周波数： GHz

測定偏波面： 右旋 ・ 左旋 偏 波

相
対
受
信
レ
ベ
ル
(dB)

グラフ貼り付けスペース

水平回転角度 (度)

様式－ 8

衛星放送用アンテナ性能試験成績表 (指向性±18度)

ＢＬ型式：

測定年月：平成 年 月

会 社 名：

メーカー型名：

種 類：

測定周波数： GHz

測定偏波面： 右旋 ・ 左旋 偏 波

相
対
受
信
レ
ベ
ル
(dB)

グラフ貼り付けスペース

水平回転角度（度）

様式－ 9

衛星放送用アンテナ性能試験成績表 (交差偏波特性)

ＢＬ型式：

測定年月：平成 年 月

会 社 名：

メーカー型名：

種 類：

測定周波数： GHz

測定偏波面： 右旋 ・ 左旋 偏 波

相
対
受
信
レ
ベ
ル
(dB)

グラフ貼り付けスペース

水平回転角度（度）

衛星放送用アンテナ荷重試験成績表 (安全性)

ＢＬ型式：下表

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：下表

ＢＬ型式	メーカー型名	反射鏡		一次放射器指示アーム	
		正面方向	裏面方向	垂直方向	水平方向
SHA－75					
SHA－90(100)					

(注) 目視観察により○は飛散に相当する破壊の無い場合、×は飛散に相当する破壊のある場合。

BS・110度CSコンバータ性能試験成績表

(利得周波数特性)

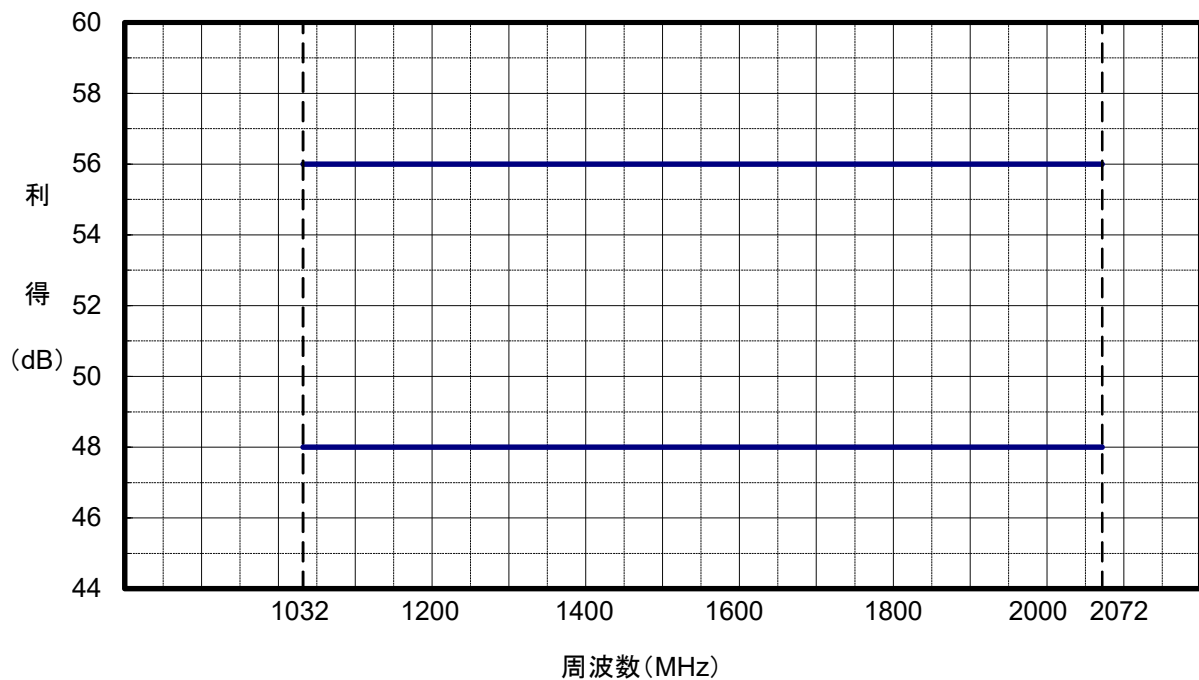
BL型式：

会 社 名：

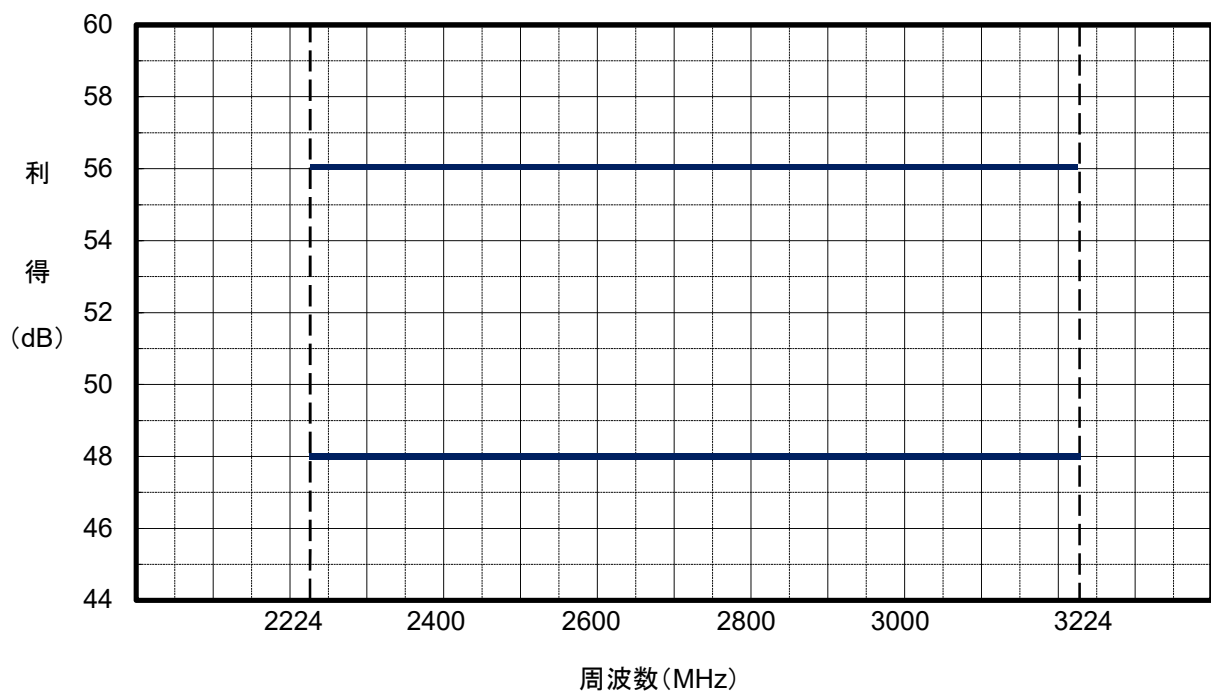
測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

<右旋偏波>



<左旋偏波>

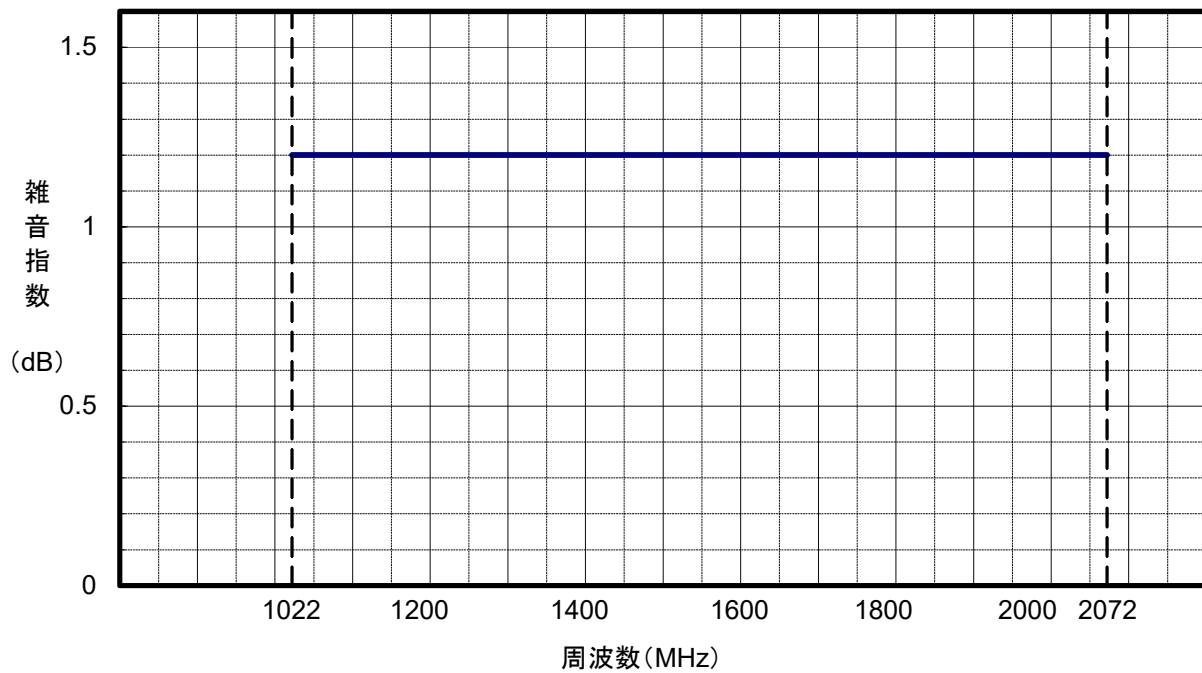


BS・110度CSコンバータ性能試験成績表

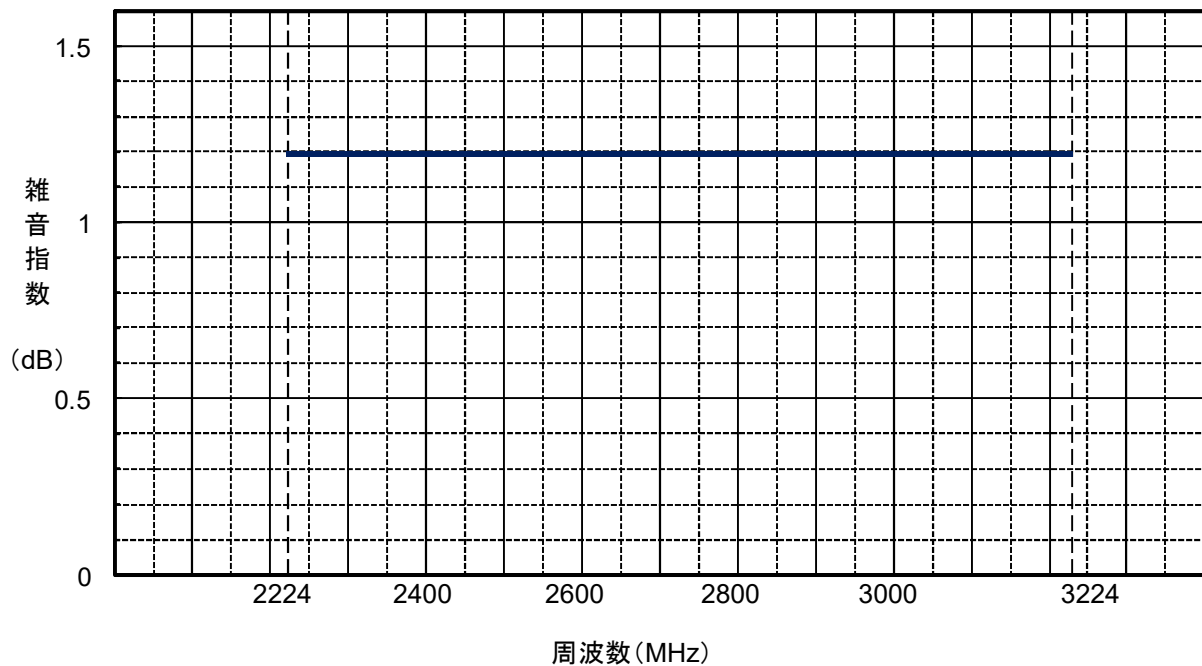
(雑音指数)

BL型式：	会 社 名：
測定年月：平成 年 月	メーカー型名：
	種 類：
	周 囲 温 度： °C

<右旋偏波>



<左旋偏波>



BS・110度CSコンバータ性能試験成績表_右旋帯域 (相互変調妨害比・イメージ妨害抑圧比)

B L 型式：

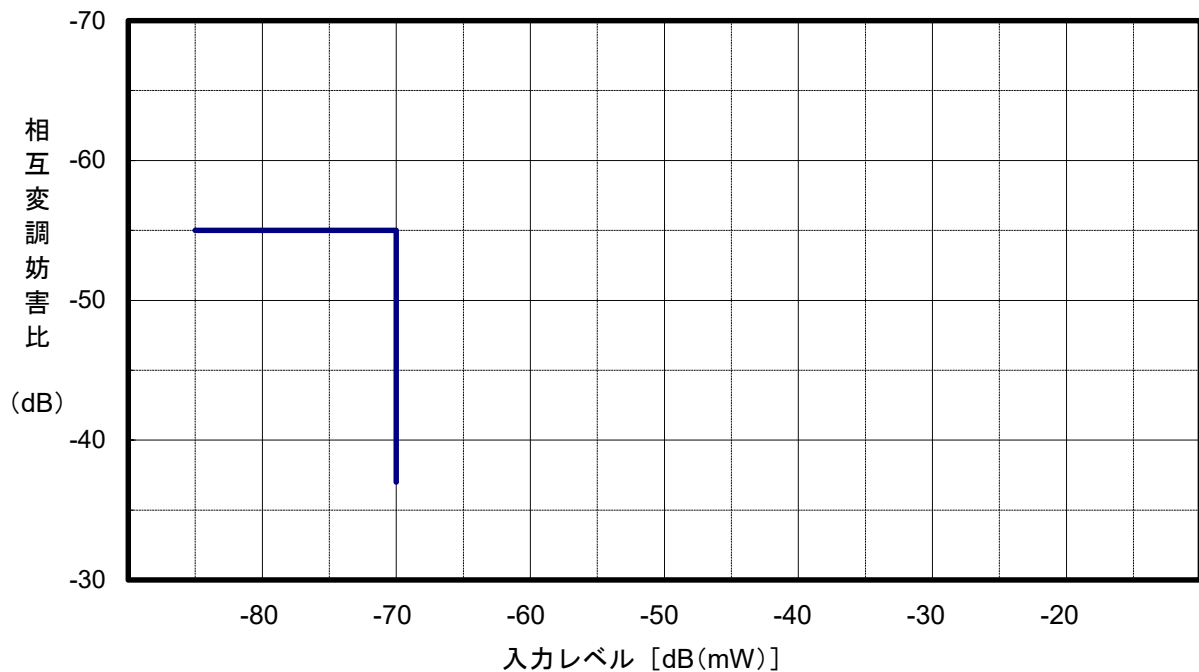
会 社 名：

測定年月：平成 年 月

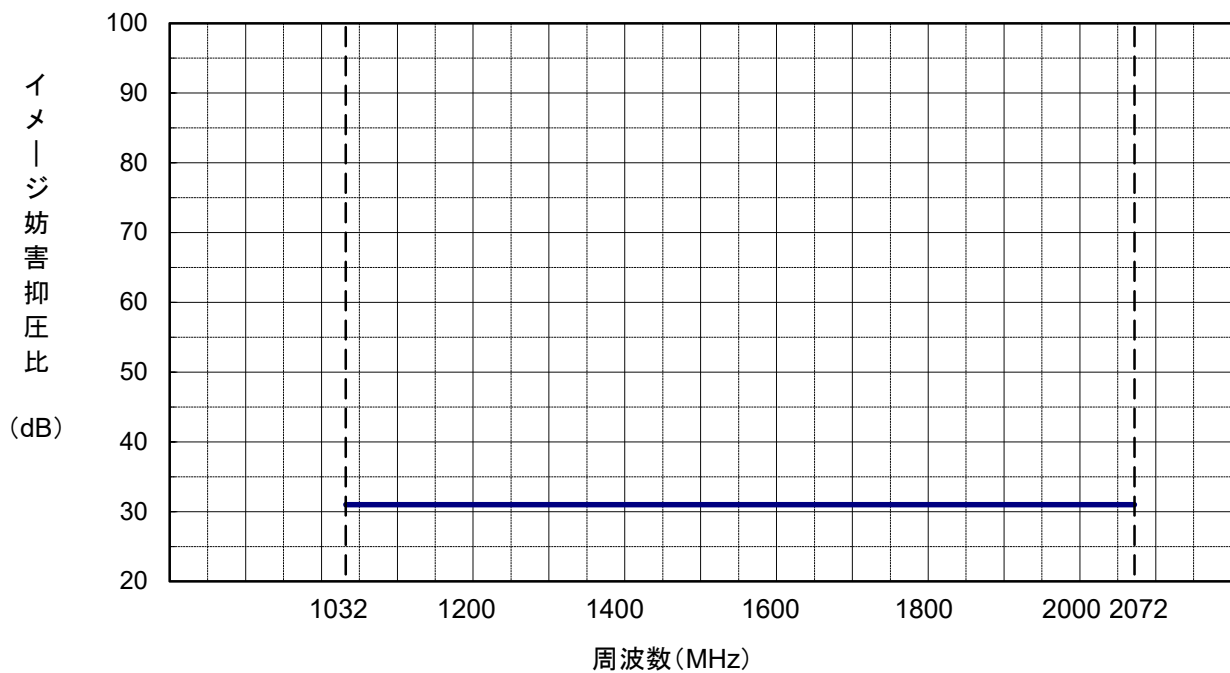
メーカー型名：

種 類：

相互変調妨害比



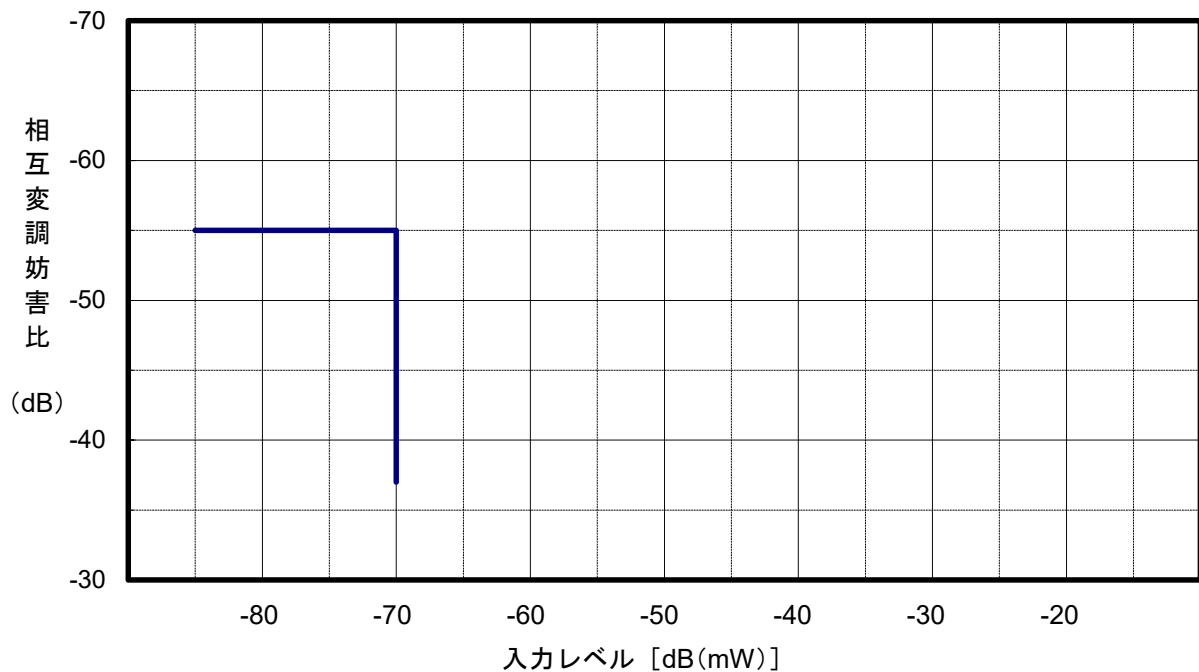
イメージ妨害抑圧比



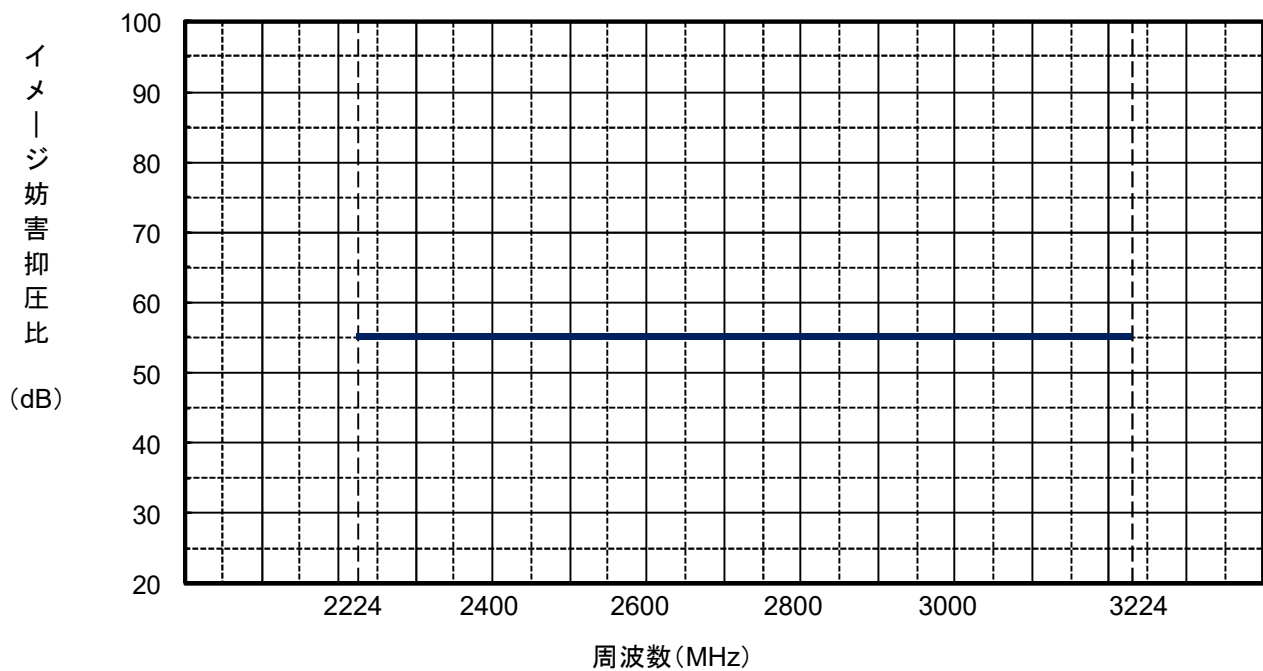
BS・110度CSコンバータ性能試験成績表_左旋帯域 (相互変調妨害比・イメージ妨害抑圧比)

BL型式：	会 社 名：
測定年月：平成 年 月	メーカー型名：
	種 類：

相互変調妨害比



イメージ妨害抑圧比

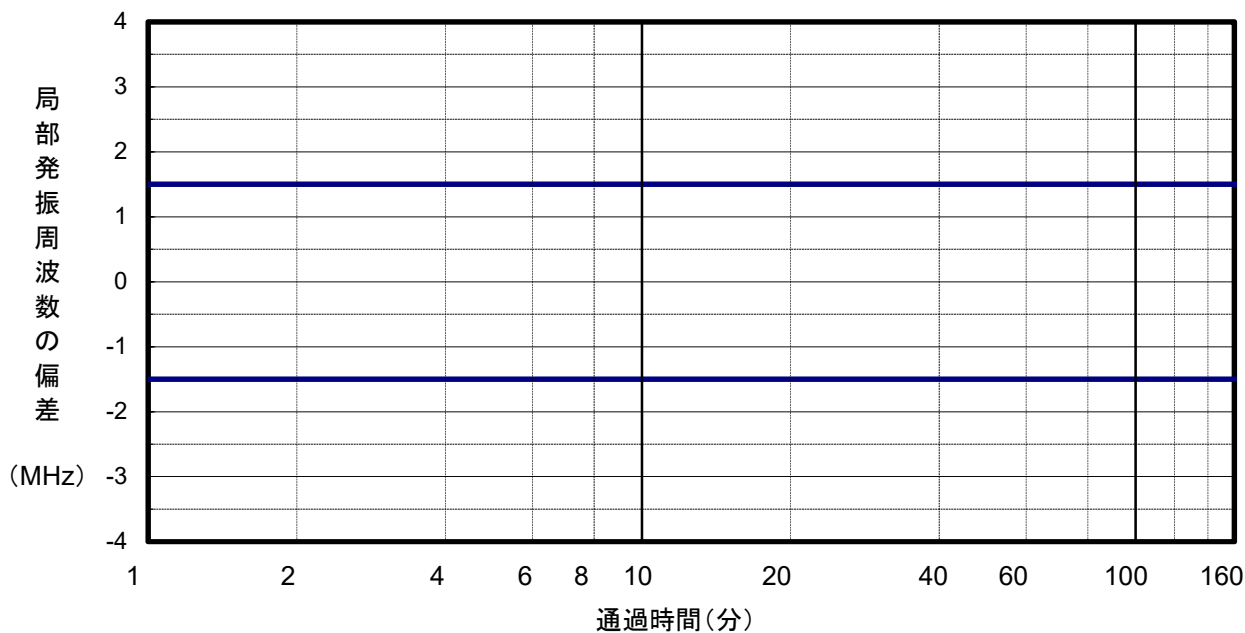


BS・110度CSコンバータ性能試験成績表

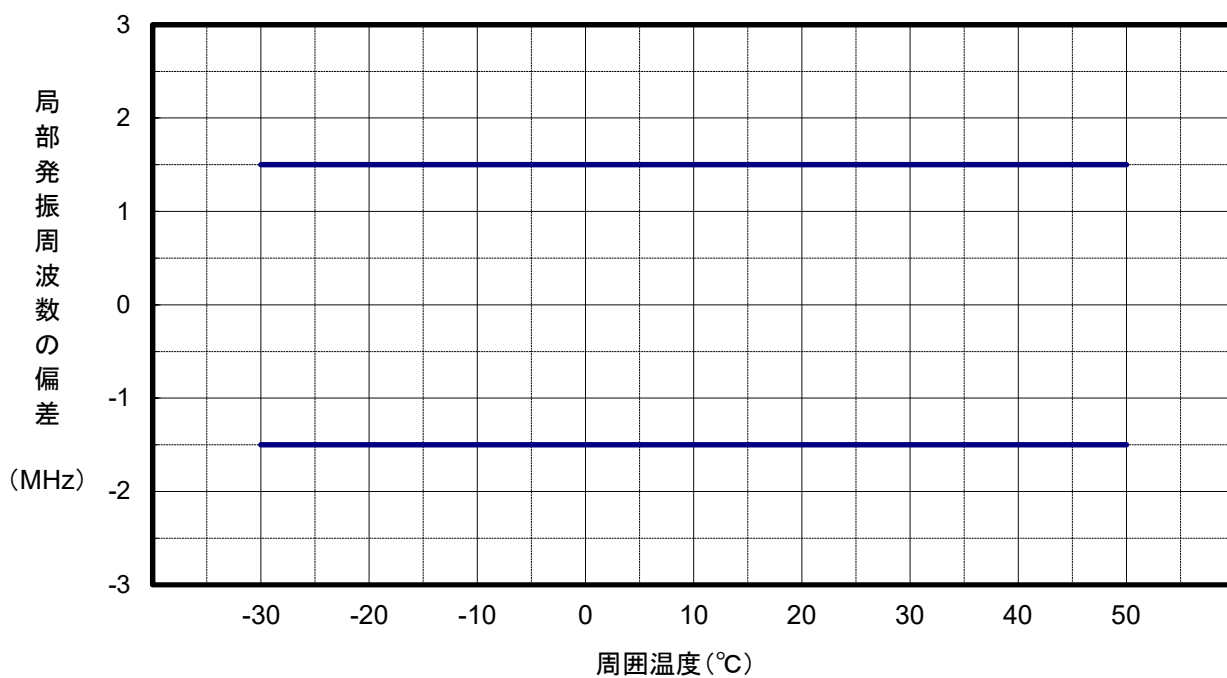
(局部発振周波数およびその漂動)

BL型式：	会社名：
測定年月：平成 年 月	メーカー型名：
偏 波： 右旋 ・ 左旋	種 類：

起動時の変化



温度安定度

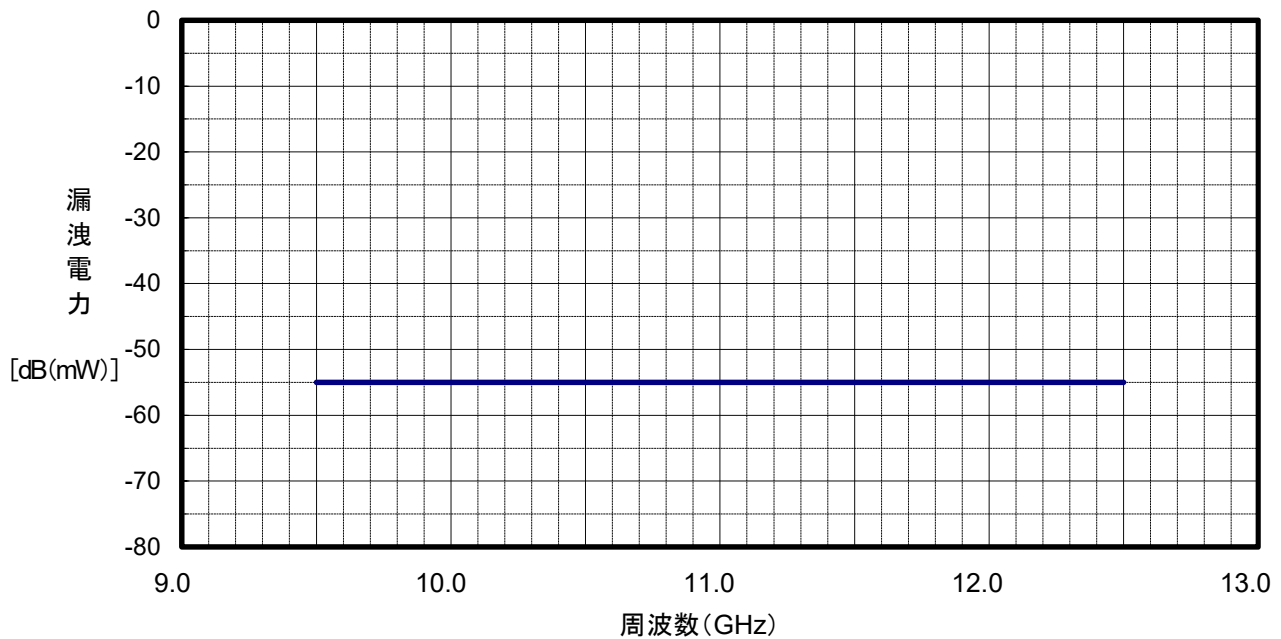


BS-110度CSコンバータ性能試験成績表__右旋偏波用

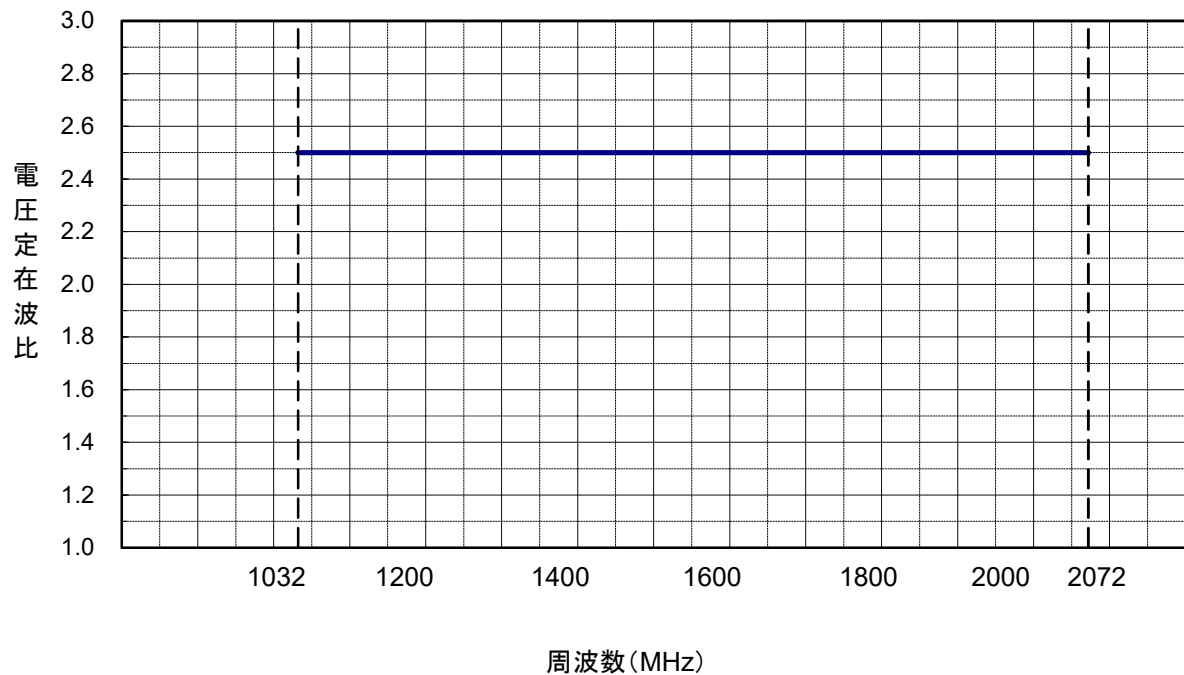
(入力端子における局部発振周波数の漏洩・出力VSWR)

BL型式：	会社名：
測定年月：平成 年 月	メーカー型名：
	種類：

入力端子における局部発振周波数の漏洩



出力VSWR

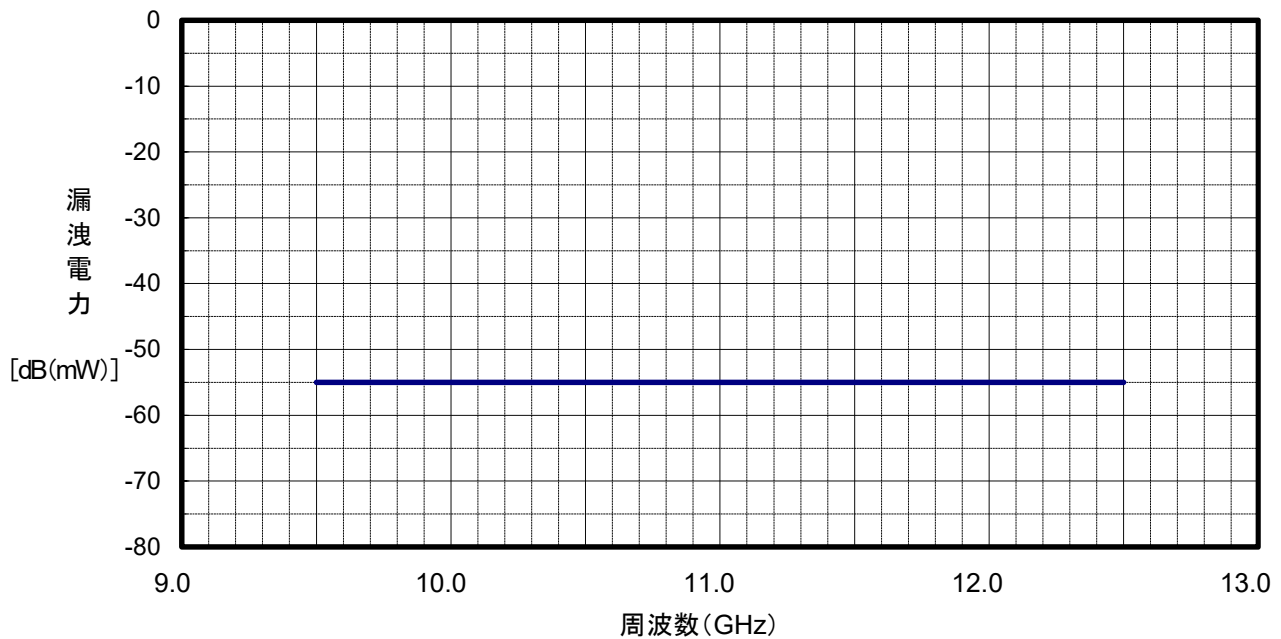


BS・110度CSコンバータ性能試験成績表__左旋偏波用

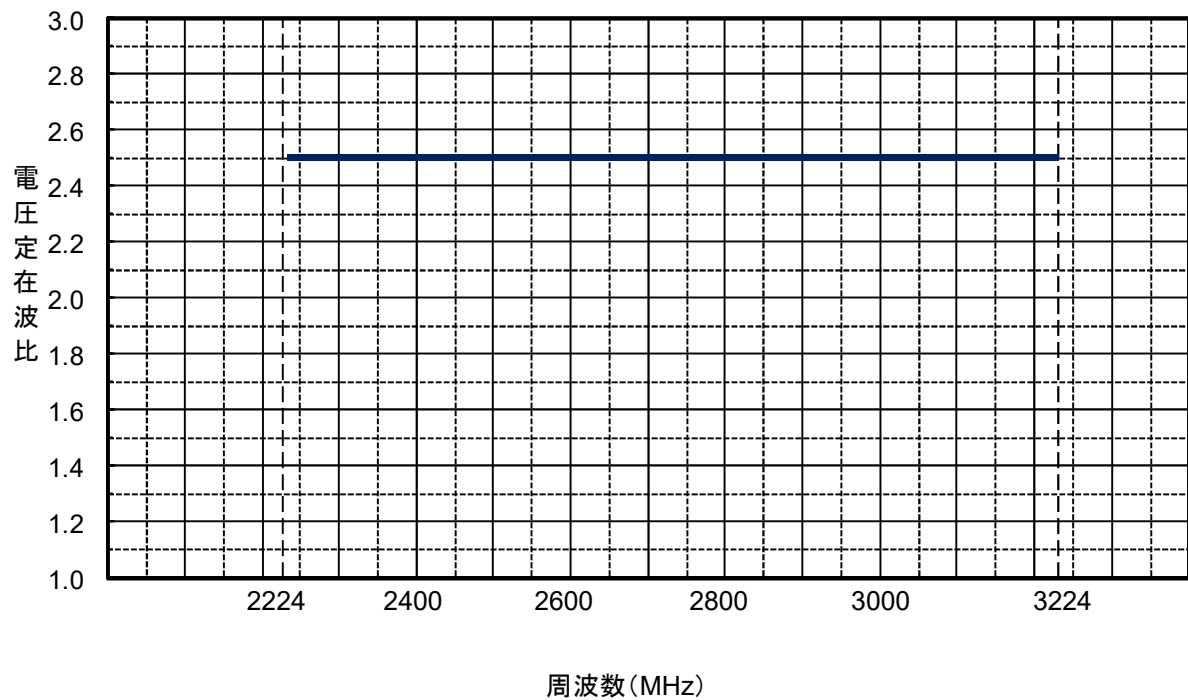
(入力端子における局部発振周波数の漏洩・出力VSWR)

B L 型式：	会 社 名：
測定年月：平成 年 月	メーカー型名：
	種 類：

入力端子における局部発振周波数の漏洩



出力VSWR



BS-110度CSコンバータ性能試験成績表

(局部発振器位相雑音)

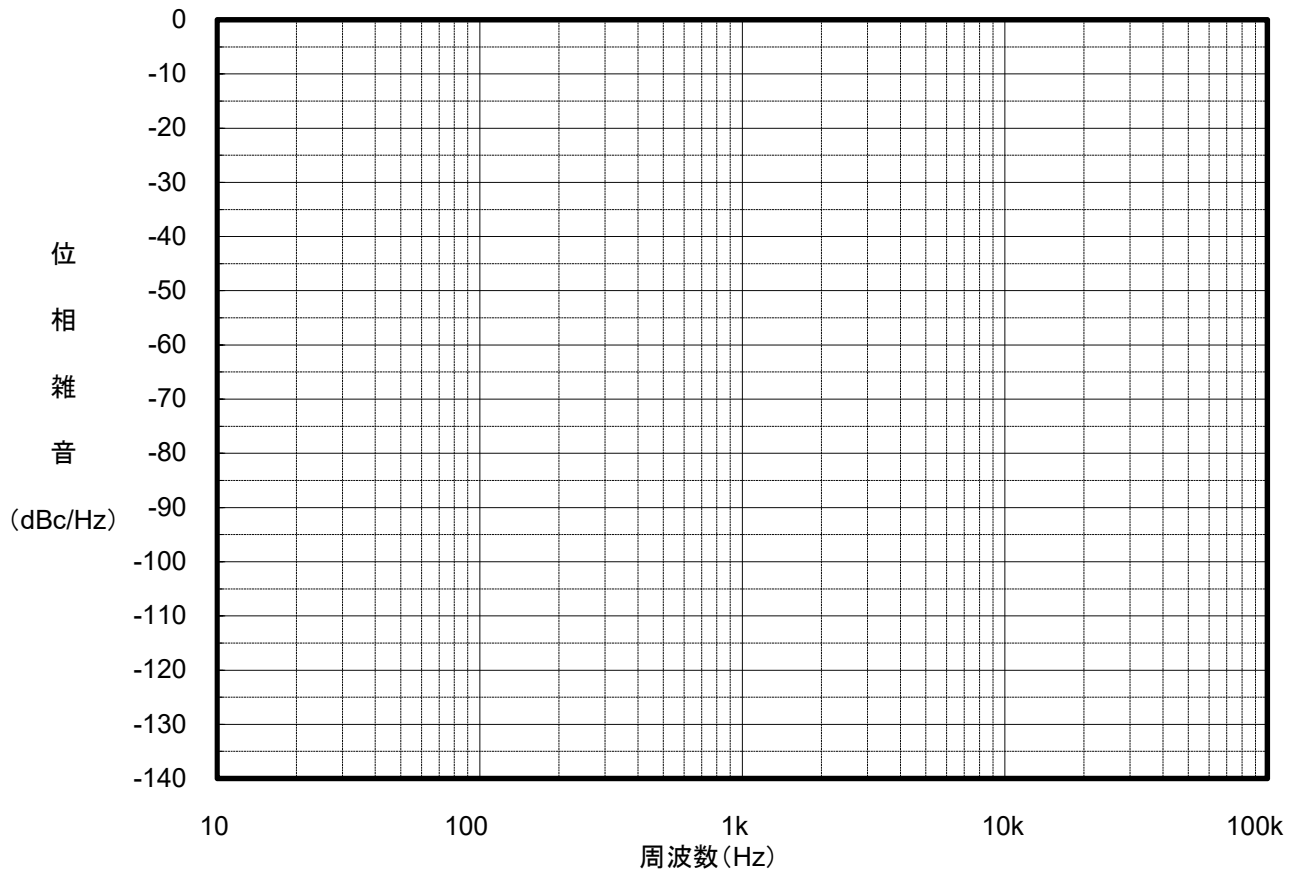
BL型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

偏 波 右旋 ・ 左旋



衛星放送用アンテナ性能試験成績表

(G/T)

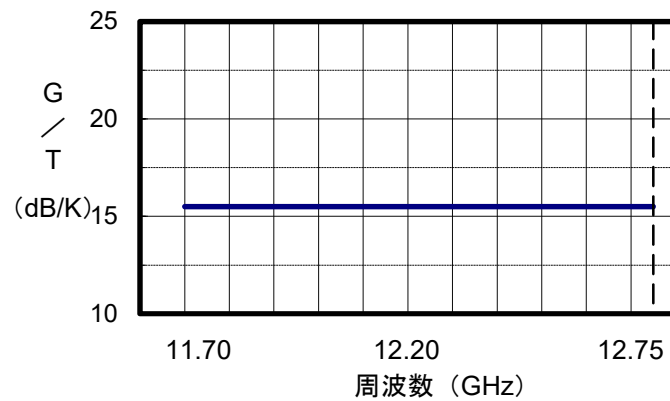
B L 型式 :

会 社 名 :

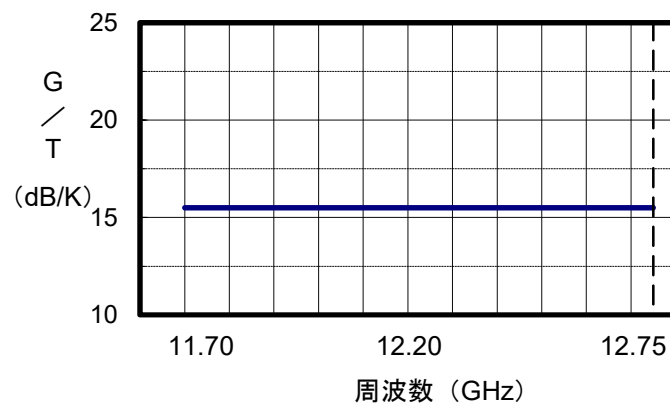
測定年月 : 平成 年 月

メーカー型名 :

<右旋偏波>



<左旋偏波>



試験周波数 (GHz)		11.70	11.85	12.00	12.20	12.50	12.75
G/T (dB/K)	右旋偏波						
	左旋偏波						

ブースタ性能試験成績表

(耐衝撃波試験・通電試験・出力電圧試験・雑音指数)

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

1. 耐衝撃波試験・通電試験

項 目		性 能	試 験 条 件
耐衝撃波試験	入力	(良 ・ 否)	15kV 1.2/50 μ s 正負各2回
	出力	(良 ・ 否)	
	電源	(良 ・ 否)	
	ヒューズの溶断	(無 ・ 有)	
通電試験	外観	(良 ・ 否)	AC100V+10% 48時間連続
	周波数特性	(良 ・ 否)	

2. 出力電圧

電源電圧 (AC V)	出力電圧 (DC V)	規 格 値	備 考
90		DC15V +10% -10%	
110			

3. 雑音指数

周波数 (MHz)		雑音指数 (dB)	規 格 値 (dB)	備 考
80			10以下	
620			8以下	
1090			10以下	
1280			10以下	
1520			10以下	
2040			10以下	
2540			10以下	
3160			10以下	
CATV	上り30		10以下	
	下り300		10以下	

ブースタ性能試験成績表

(利得・利得調整範囲)

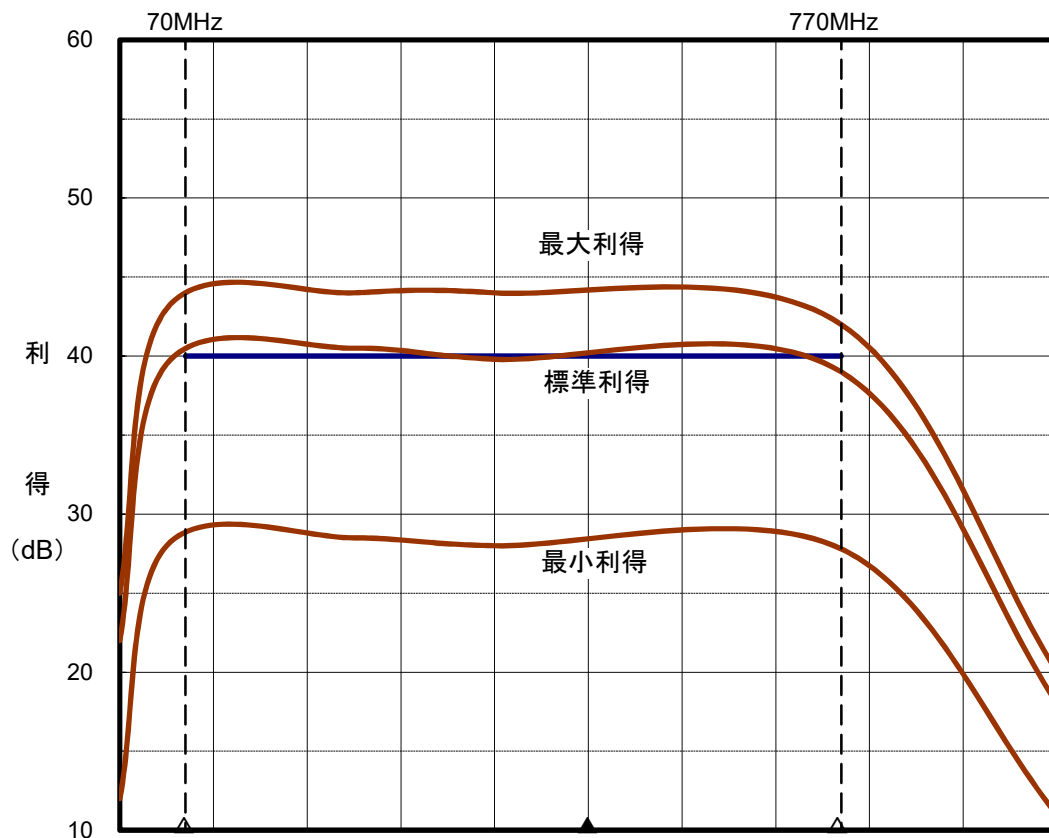
ＢＬ型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

□□帯域



FM	74	76	78	80	82	84MHz	86	88	90	92	94	(2MHz/DIV)
UHF	390	430	470	510	550	590MHz	630	670	710	750	790	(40MHz/DIV)
CS・BS-IF	750	1000	1250	1500	1750	2000MHz	2250	2500	2750	3000	3250	(250MHz/DIV)
CATV	0	100	200	300	400	500MHz	600	700	800	900	1000	(100MHz/DIV)
CATV上り	4	10	16	22	28	34MHz	40	46	52	58	64	(6MHz/DIV)

ブースタ性能試験成績表

(利得安定度・周波数帯域幅・帯域内周波数特性)

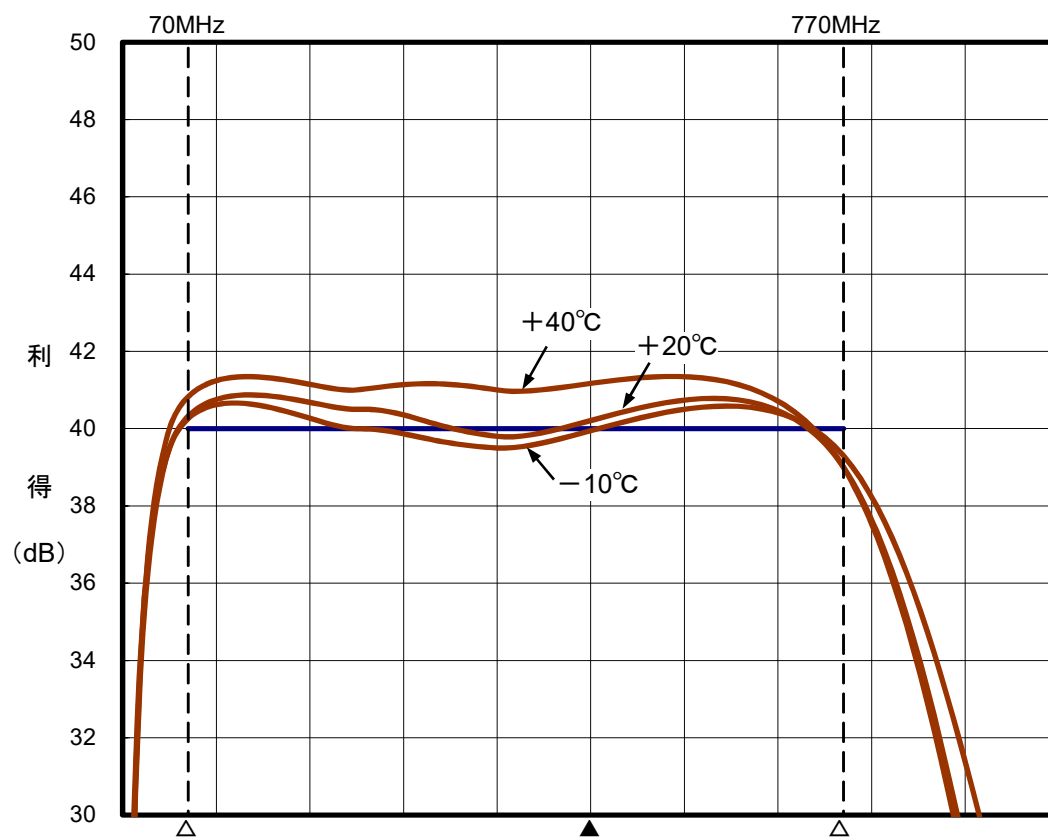
B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

□□帯域



FM	74	76	78	80	82	84MHz	86	88	90	92	94	(2MHz/DIV)
UHF	390	430	470	510	550	590MHz	630	670	710	750	790	(40MHz/DIV)
CS・BS-IF	750	1000	1250	1500	1750	2000MHz	2250	2500	2750	3000	3250	(250MHz/DIV)
CATV	0	100	200	300	400	500MHz	600	700	800	900	1000	(100MHz/DIV)
CATV上り	4	10	16	22	28	34MHz	40	46	52	58	64	(6MHz/DIV)

ブースタ性能試験成績表

(帯域内偏差)

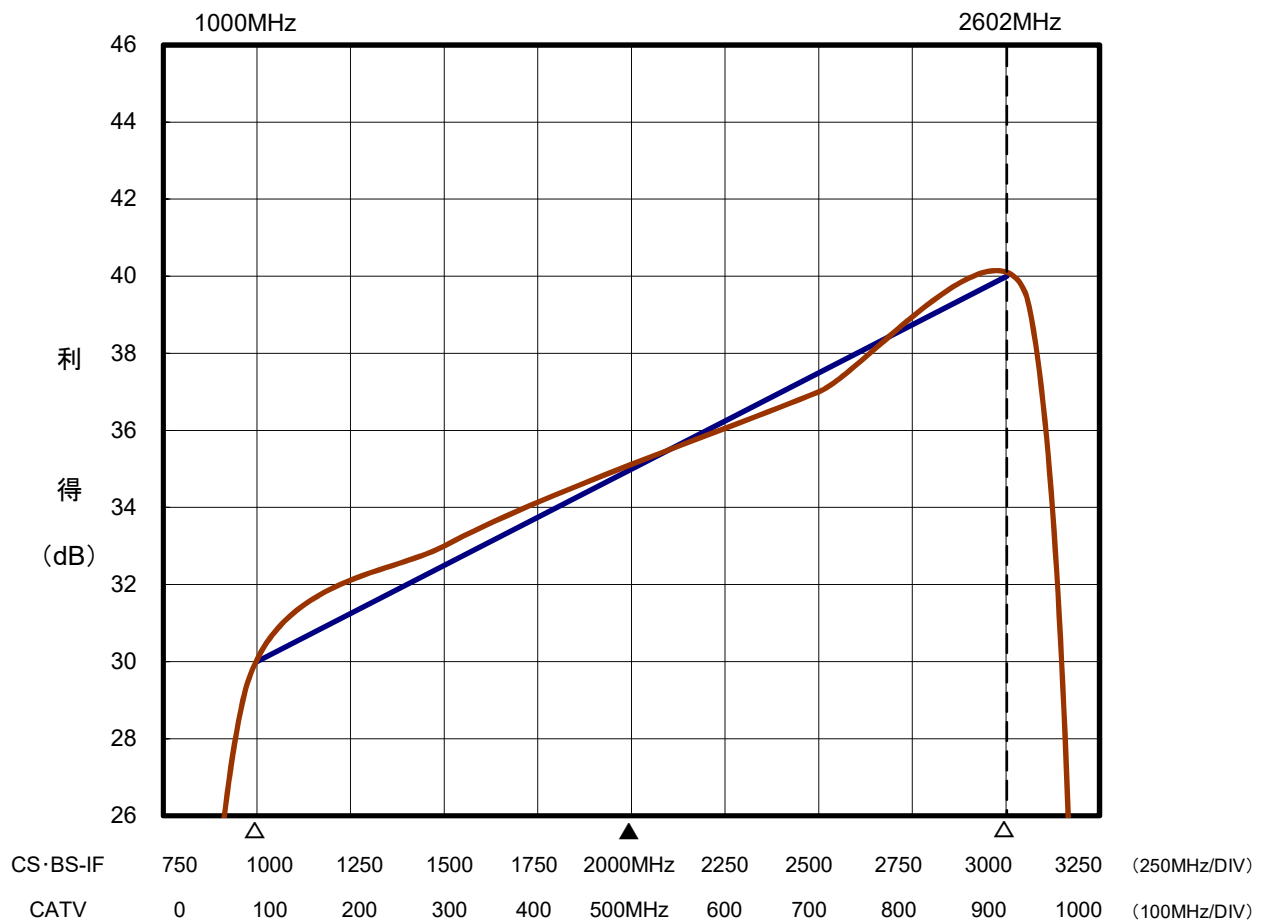
ＢＬ型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

□□帯域



ブースタ性能試験成績表

(チルト特性)

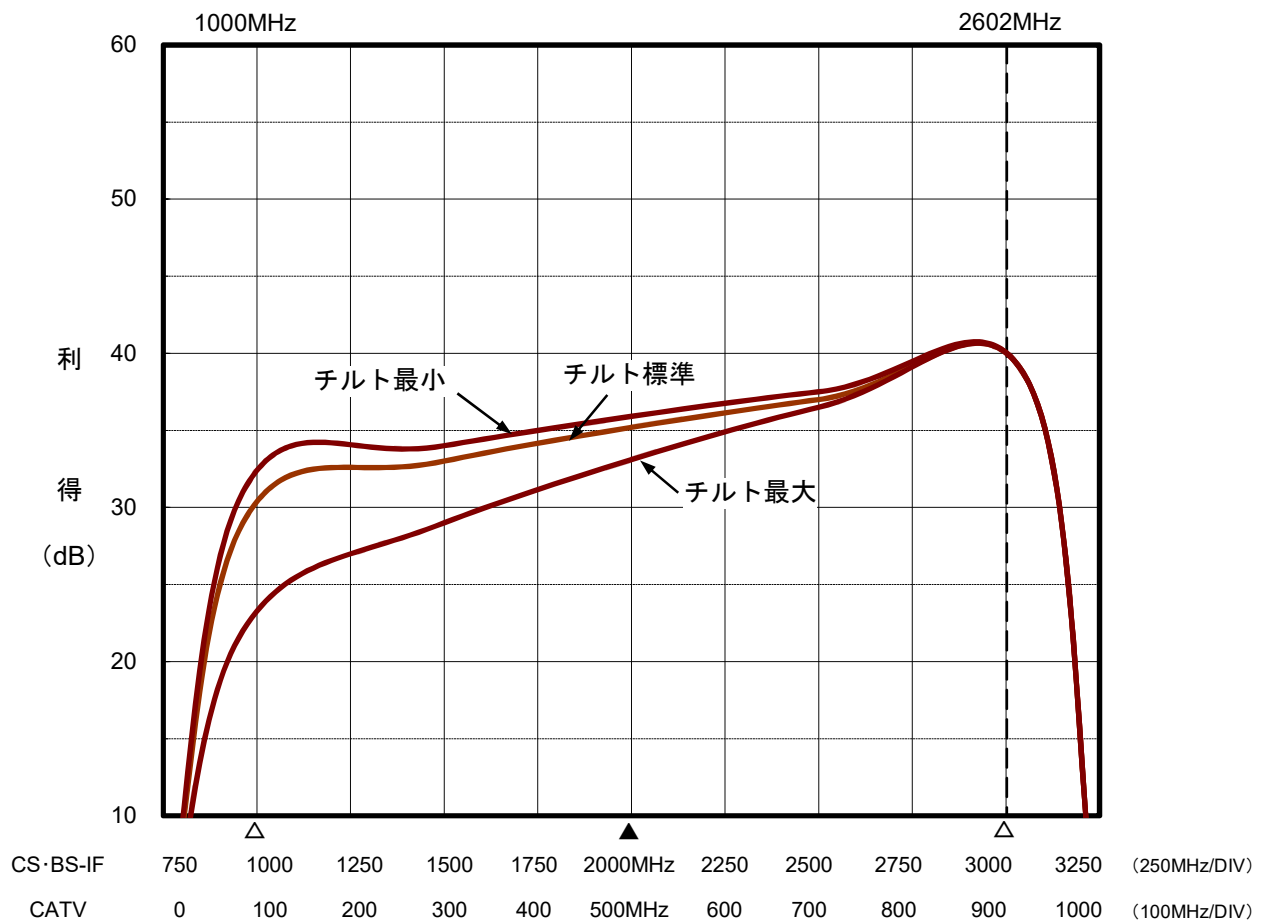
ＢＬ型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

□□帯域



ブースタ性能試験成績表

(電圧定在波比)

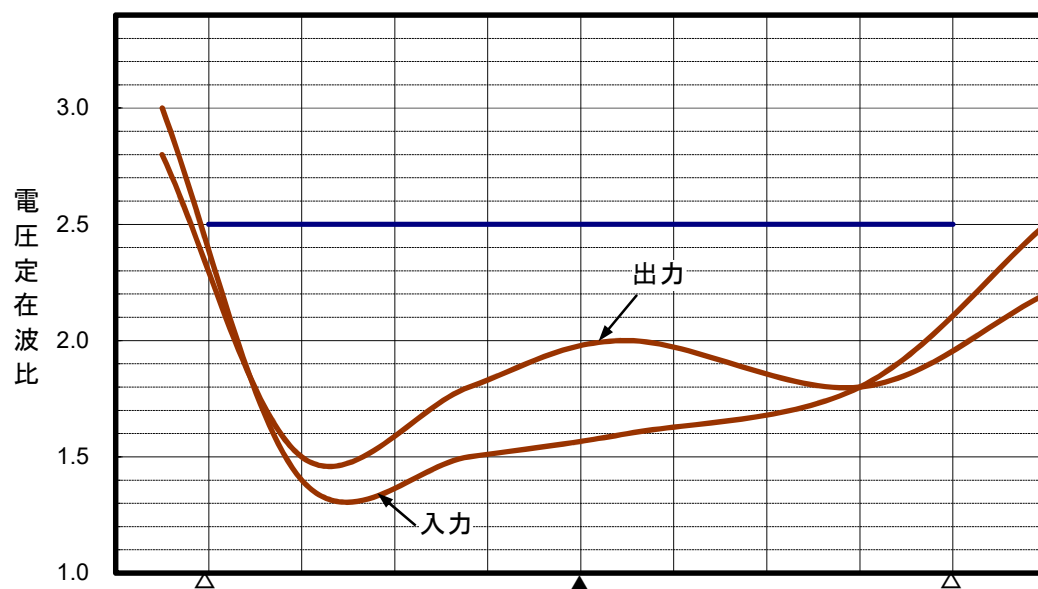
B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

□□帯域



FM	74	76	78	80	82	84MHz	86	88	90	92	94	(2MHz/DIV)
UHF	390	430	470	510	550	590MHz	630	670	710	750	790	(40MHz/DIV)
CS-BS-IF	750	1000	1250	1500	1750	2000MHz	2250	2500	2750	3000	3250	(250MHz/DIV)
CATV	0	100	200	300	400	500MHz	600	700	800	900	1000	(100MHz/DIV)
CATV上り	4	10	16	22	28	34MHz	40	46	52	58	64	(6MHz/DIV)

ブースタ性能試験成績表

(ハム変調)

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

周波数 (MHz)		ハム変調 (dB)	規 格 値 (dB)
80			－60以下
620			
1000			
2150			
2602			
3224			
CATV	上り30		
	下り300		

ブースタ性能試験成績表

(相互変調・CTB)

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

利 得：標準

IM₂

帯 域		発振基準周波数 (MHz)	測定周波数 (MHz)	IM ₂ (dB)	規格値 (dB)
CATV	上り	15 + 25	40		－ 以下
		40 - 25	15		
	下り	100 + 350	450		－ 以下
		450 - 350	100		

IM₃

帯 域	発振基準周波数 (MHz)	測定周波数 (MHz)	IM ₃ (dB)	規格値 (dB)
FM	2 × 80 - 84	76		76～95MHzの場合 －76以下
	2 × 84 - 80	88		
UHF	2 × 550 - 600	500		－71以下
	2 × 600 - 650	550		
	2 × 600 - 550	650		
	2 × 650 - 600	700		
FM / UHF	596 + 84 - 600	80		－72以下
	600 + 84 - 596	88		
	600 + 80 - 84	596		
	596 + 84 - 80	600		

CTB

帯 域	測定チャンネル	CTB (dB)	規格値 (dB)
CATV	C35		－ 以下

受動機器性能試験成績表

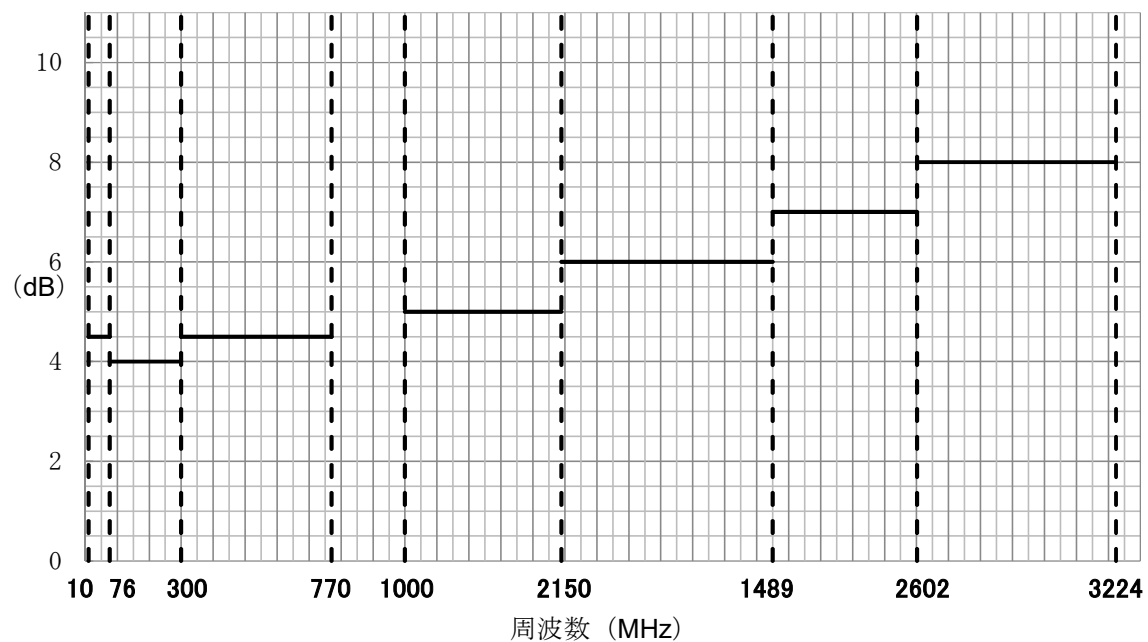
B L 型式：

会 社 名：

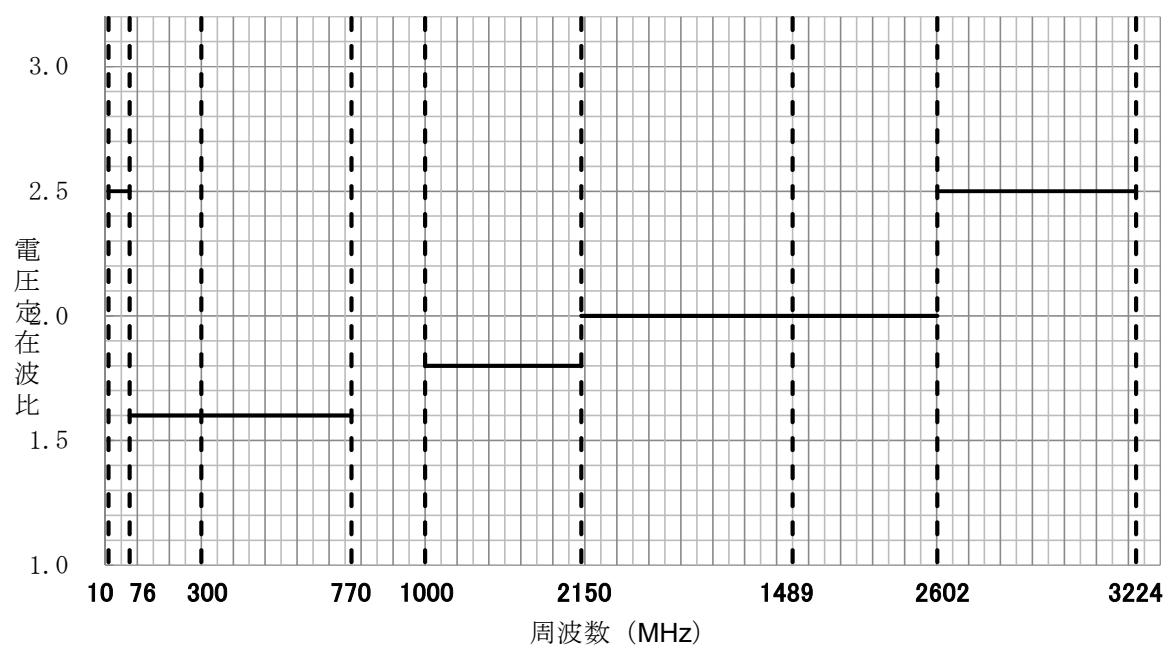
測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

挿入損失・通過帯域減衰量



電圧定在波比



受動機器性能試験成績表

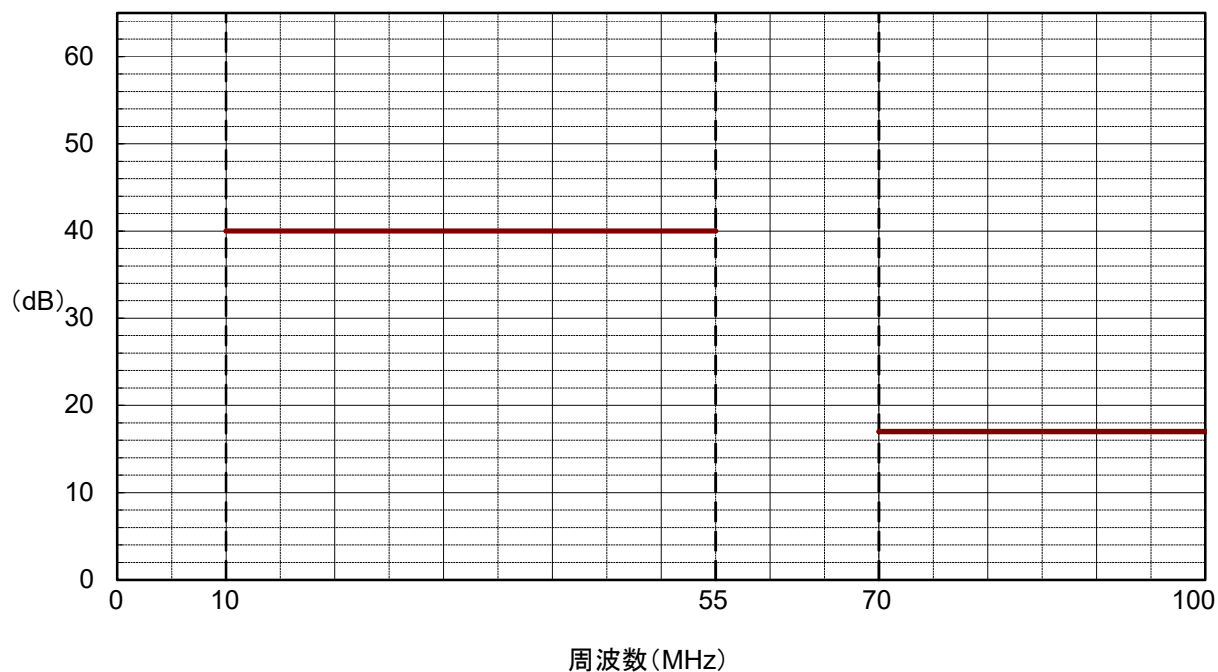
B L 型式：

会 社 名：

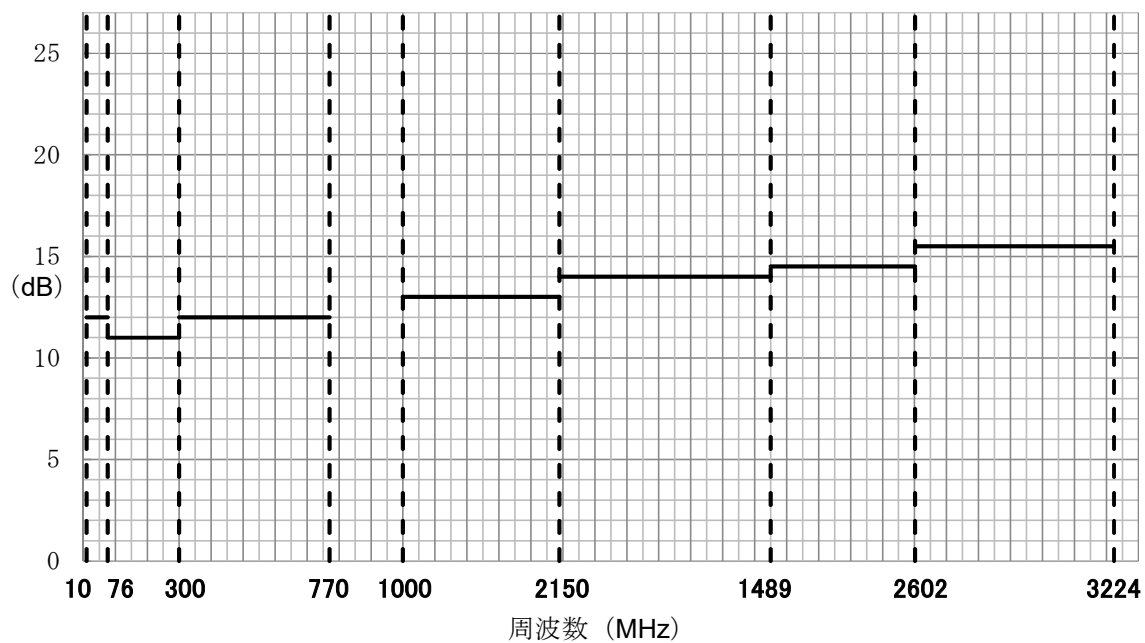
測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

端子間結合損失・逆結合損失・阻止帯域減衰量



分配損失・結合損失



ブースタ性能試験成績表

(絶縁抵抗・絶縁耐力)

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

項 目	性 能	試験条件
絶縁抵抗	(良 ・ 否)	絶縁抵抗値が $1M\Omega$ 以上得られていること
絶縁耐力	(良 ・ 否)	電流の漏れ値が $10mA$ を超えないこと

ブースタ性能試験成績表

(CIN)

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

利 得：標準

帯 域	測定チャンネル	C I N (dB)	規格値 (dB)
B S 右旋	B S - 1		S H ・ U F - 1 、 S H - 1 、 C A T V ・ S H - 1 : -22以下 S H - P 1 : -28以下
C S 右旋	N D 2 4		
B S 左旋	B S - 2 4		
C S 左旋	N D 2 3		

受信機器性能試験成績表

(漏洩電界強度：70MHz～770MHz)

B L 型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

70～770MHzの周波数範囲における測定

試験対象周波数	MHz	～	MHz
---------	-----	---	-----

	測定面	最大値周波数 (MHz)	アンテナ高 (m)	漏洩電界強度 (dB μ V/m)	規格値
ブースタ	アジマス面				70～770MHz : 34dB μ V/m以下
	エレベーション面				
	ローテーション面				

* 「アンテナ高」は最大値を示す測定値のデータを記載し、その他は斜線あるいは「－」を記入する。

	測定面	最大値周波数 (MHz)	アンテナ高 (m)	漏洩電界強度 (dB μ V/m)	規格値
受動機器	6面における最大値				70～770MHz : 34dB μ V/m以下

受信機器性能試験成績表

(漏洩電界強度：1000MHz～3224MHz)

ＢＬ型式：

会 社 名：

測定年月：平成 年 月

メーカー型名：

1000～3224MHzの周波数範囲における測定

試験対象周波数	MHz	～	MHz
---------	-----	---	-----

	測定面	最大値周波数 (MHz)	漏洩電界強度 (dB μ V/m)	規格値
ブースタ	アジマス面			1000～3224MHz ：40.2dB μ V/m以下
	エレベーション面			
	ローテーション面			

	測定面	最大値周波数 (MHz)	漏洩電界強度 (dB μ V/m)	規格値
受動機器	6面における最大値			1000～3224MHz ：40.2dB μ V/m以下